北白川通信

第34号

二〇一〇年四月四日

北白川教会
京都市左京区北白川久保田町三―三

北白川教会親睦修養会（二〇〇九年九月二三日）開会礼拝

エレミヤ書六章一〇～一五節「平和の使者」

佐伯　勲

今年も北白川教会の親睦修養会を、秋分の日に、いつものように、しかし当たり前のこととしてではなく、持つことのできます幸い、心から神様に感謝いたします。

修養会案内文の初めのところを少し補いながら読みます。

「今年も暑い夏を迎え、ヒロシマ、ナガサキの日、敗戦の記念日を覚えて、平和を求める祈りが絶えません。今年も世界の各地で争いがあり、また、米国・ロシアなど多くの核保有国（イギリス・ロシア・フランス・中国・インド・パキスタン・南アフリカ・イスラエル）に加えて、北朝鮮・イランの核・ミサイルの問題がアジアだけでなく世界的な脅威となっています。そのような中で、被爆国として日本は核廃絶を訴えてきましたが、今年になって、国際原子力機関（ＩＡＥＡ）のトップを日本の外交官がつとめることになり、さらに、世界の期待を背負い、新しく大統領になった米国のオバマ大統領が、四月プラハで行った演説の中で、『核兵器のない世界』を目指す決意を示し、

目次

親睦修養会　開会礼拝　佐伯　勲　1
講演「チェルノブイリ原発事故二三年目の報告」　山崎　知行　山崎　喜美子　7
質疑応答　20
ウガンダで考えたこと　川西　史子　24
青森のインドネシア人によるクリスマス礼拝　愛　工藤　浩栄　31
小さい人には優しくね　武田　尚子　32
歩くのも伏すのも見分け、わたしの道にことごとく通じておられる　金山　弥平　37
堅く支える　杉原千畝と信仰　瀬口　昌久　43
浦上四番崩れに耐えた人たちを支えたもの　林　貞子　59
絶えず喜びなさい　井川　満　73
編集後記　81

核をめぐる世界は新たな転換期を迎えようとしています。明日九月二四日は国連安全保障理事会で「核兵器のない世界」への決議案が採択されようとしていまし、また、例えば、一人の人が重く受け止めて、三宅一生という衣服デザイナーの方が、『閃光の記憶〈核廃絶へオバマ氏との一歩〉』と題して、七月一四日付米紙ニューヨーク・タイムズへ寄稿、ご自身の被爆体験を晒しておられます。…」

私ども、北白川教会が、核の問題で修養会や講演会等を持ちましたのは、私の記憶では、一九八七年の親睦修養会で、広島女学院、中・高等学校長の、橋本榮一先生をお迎えしてのもの、先生は被爆体験者であり、被爆時のすさまじく、むごたらしい体験を語ってくださいまして、ピカドンの閃光を浴びた話しを聞きまして（それは青い光・チェレンコフの光でして、日本は、ヒロシマ・ナガサキ・一九九九年茨城県東海村ウラン加工施設ＪＣＯ事故と三回経験している）、核のない平和を深く祈り求めなければならない感を強く持ったものでした。

そして、一九八九年の親睦修養会には、若い日に広島で被爆された沼田鈴子さんをお招きして、二一歳の結婚式三日前に被爆、片足を失い、また婚約者が戦死されるという苦難の中でキリストに出会われ、被爆体験の語り部として、修学旅行生たちに被爆樹アオギリとの出会いを語られ、また、被爆者としての立場からだけでなく、軍都ヒロシマという、アジアの国々の人たちには加害者としての立場からも語っておられ、「平和の使者」となられた方であります。講演では被爆という絶望の体験を、なお神の恵みとして受け止めるに至った信仰の長い道のりを語られまして、その言葉には多くの人々を慰め、励まし、希望を与えてくださる重みがあったことでした。現在、広島市南区の老人ホームに入っておられると聞いています。

あれから二〇年でしょうか。この二〇年間、平和への祈り、核の無い平和を深めるどころか祈ることすらせず、豊かな満たされた生活を続けてきたのではないかと主の御前に許しを請うものであります。ただご承知のように、私どもの日曜学校が、一九八六年四月に起きたチェルノブイリ原子力発電所事故災害、その被爆した子どもさんたちを覚えてＷＣＣ（世界教会協議会）とロシア正教会の呼びかけで結成されたＮＣＣ（日本キリスト教協議会：今年の四月から共助会委員長である飯島信さんが総幹事）のチェルノブイリ災害問題プロジェクト委員会が一九九一年五月に結成され、この間、日本の医師の派遣、現地医師（エレーナ・トルスタヤさん）の招聘・研修、スタディツアー（第四回二〇〇六年には山崎さんご夫妻、佐伯が参加）、医薬品の支援等々。

その委員会の「チェルノブイリ救援基金」に、私どもの日曜学校が、そのはじめから、この間ずっと、献金をささげてきました。毎日曜の礼拝で神様からたくさんの恵みをいただいている、その少しでも神様にお返しするという意味を子どもたちに説明し、お小遣いから少しずつ献金したものを災害献金という形でささげてまいりました。

また、小笠原先生が「主の祈り」について語られておりました。『〝天にましますわれらの父よ〟で、「主の祈り」を代表させることができるのではないか、また、〝われら〟の中に、愛する人や、天に召された人たち、さらに、韓国の南北分断の悲しみの中に

ある友たち、インドで出会った学校に行けない子どもたち、チェルノブイリの子どもたちも皆、この〝われら〟の中に主イエスの愛の眼差しの中に含まれています。』
わたしたち北白川教会は「主の祈り」のたびにチェルノブイリの子どもたちのことを覚えて祈ってきたのです。
そのような中から、日曜学校が献金している原発事故で苦しんでいる子どもたちに会いたい、献金を直接、手から手へ（hand to hand face to face）と思い、それで二〇〇六年のスタデイツアーに参加し、その時、お会いし、主に在る交わり許されたのが山崎さんご夫妻でありました。

それから、核の問題については、関屋綾子さん、わたしどもの教会の設立母体である基督教共助会の創設者である森明の娘さんですが、少し補足しますと…、東京ＹＷＣＡ、日本ＹＷＣＡの会長、ＮＣＣ総会副議長など歴任、平和・反核運動に関わられました。二〇〇二年召天。
一九六三年世界ＹＷＣＡの総会（デンマーク）では、核の危険について、「原子力の平和利用も危険である」と発言したことに対し、アメリカの代表からは「原子力は人類の科学の勝利である」として総攻撃を受けられました。
一九七〇年に、日本のＹＷＣＡとして、「『核』否定の思想に立つ」と表明されました。「…括弧に入れた『核』という事で、何も核兵器だけを言うのではなく、核というものを生み出してそれを中心にしながら、その恩沢に浴しながら、そしてある意味ではその恩沢に浴する事によって本当は失ってはならない世界の人類が共有しなければならない人間性というものを自分も人も気付かぬうちに失いながら進んでゆく現代の社会、そういうものの中にあって、否定すべきものを否定してゆくということで、括弧つきの核否定の思想に立つという事を運動の真中に立てたわけでした。」
また、ＮＣＣチェルノブイリ災害問題プロジェクト委員会の委員長を発足時の一九九一年から二〇〇二年まで一二年間、亡くなられるまでされました。
また、思い起こしますことは、ＹＷＣＡ「ひろしま・ながさきを考える旅」を企画され、実は、わたしは、大谷中・高等学校に勤めていたとき中学生を連れて参加したことがありました。
関屋さんは共助会でも核の問題を取り上げられ、「『核』～人間と文明」について講演されました。夢のエネルギーを手にしたことにより、より良き生活を求め続けていく人間の文明、そこには、自分が生きて行くためには他のものを犠牲にしてよいと考える人間の罪の姿があると、語られました。…要点だけ以下に紹介します…
＊核の危険性について、チェルノブイリの事故、ＪＣＯの事故等。
＊非人間性について、ひろしま・ながさき、核兵器、ウラン劣化爆弾等。
＊利潤を生む（利をむさぼる）ということについて、それまではお金がかかるので国家的なものであったのが、一九六三年以降儲かる企業のものとして。
＊もう一つ『核』の問題を論ずる時に必ず出てくるのが、隠蔽、改ざん。

そのような危険があることをはやくから指摘しておられました。

先日も、新聞記事によりますと、「核密約」～核兵器を積んだ米国の船や航空機の日本への寄港、通過を認める「核密約」が成立していたという、一九六七年の「非核三原則」（当時、佐藤栄作首相はこれでノーベル平和賞を受賞）の、一．作らず　二．持たず　三．持ち込ませず　の、三．持ち込ませず　は、最初から空洞化していたという記事です。

わたしは、この『核』の問題を考える時、プルトニウムの危険性を中心に、核の問題に取り組んで来られた高木仁三郎という方のことを思い起こすことです。

著書に「原発事故はなぜくりかえすのか」、「市民科学者として生きる」（岩波新書）などがあります。また、著書『チェルノブイリ・最後の警告』の中で次のように述べておられます。

「核技術というのは、いわば天上の技術を地上において手にしたに等しい。私は何ら比喩的な意味でこの事を言っているわけではない。核反応という、天体においてのみ存在し、地上の自然の中には実質上存在しなかった自然現象を、地上で利用することの意味は、比喩が示唆する以上に深刻である。あらゆる生命にとって、放射線は、それにとって全く防御の備えのない脅威であり、放射能は地上の営みの原理を破壊する異物である」

これは核兵器であれ、核のエネルギー利用であれ、核を弄ぶこと自体が人間の限度を越えるものであることを、科学者の立場からはっきりと警告してくださったものであります。結局、『核』の問題というのは、深刻な危険、脅威なわけですが、問題は、それを見て知らぬふりをする、そして、安全であり、大丈夫、安し安し、平和であるかのように、偽る、隠蔽する、改ざんする、人を欺く、密約という形で、真実を覆い隠す、そこに人間の大きな罪があるということであろうと思います。

はじめに、エレミヤ書六章一〇節～一五節までお読みしました。六章一三・一四節「身分の低い者から高い者に至るまで皆、暴利をむさぼり、預言者から祭司に至るまで皆、欺く。彼らは、わが民の破滅（傷）を手軽に治療（癒）して、平和がないのに『平和、平和（平安、平安）』と言う。」

この〝平和（平安）〟と訳される原語〝シャローム〟は、心の平安だけでなく、肉体の健康、政治的平和、社会的調和、経済的繁栄等々、それらすべてを統合した救済を表す重要な概念です。

国の指導者から国民に至るまでみんなが利をむさぼっている、エネルギーを使い放題、豊かな生活に酔いしれている。一九六〇年に比べて今日、日本のエネルギー個人消費量は3倍の恩恵に浴しているが、しかし、現状に満足している人はいないという。そういう中で、ある人たちは、本当は破滅に向かっているのに、平和だ、平安だ、安心だ、大丈夫だと言って、人々を欺いている、騙し続けている、それは、エレミヤから見れば、本当の平和でもなんでもない、ということになりましょう。

そうしますと、わたしたちは、本当の平和とは何か、ということをしっかり見ないといけないということになるでしょう。つまり、今見ましたような偽りの平和があります。平和、平安

と言ってもそうでない状態との区別がはっきりしていないことです。例えば、〝核の傘の下の平和、核の平和利用、CO2削減クリーンなエネルギー〟イコール、実は〝核先制攻撃〟にもなるということです。そういう平和は、わたしたち人間・人類の破滅を覆い隠し、手軽に治療、表面をなでているだけのもの、その行く末ははっきりしているでありましょう。破滅、絶望であります。

そうであるなら、わたしどもに望みを与えてくれる真の平和は何でしょう。

それが、聖書が語る〈平和の神〉ということであると思います。聖書は何度もそのことを語ってくるわけですが、いくつか見てみようと思います。

一つは、ローマの信徒への手紙一六章二〇節「平和の源である神は間もなく、サタンをあなたがたの足の下で打ち砕かれるでしょう。」

これを読みますと、普通に言われる平和と、どんなに違うかすぐわかると思います。普通は、平和の神、神の平安と言うと、何か牧歌的な、静かで穏やかな、優しい愛に満ちたものであろうと考えます。しかし、ここには、相手がサタン、悪魔であるにせよ、足で打ち砕くと言うのです。つまり、この平和の神は、戦いの神であるということです。更に言いますなら、平和を希求する者は戦わねばならない、ということです。本当の平和・平安をもたらすためには、本当の意味での戦いがなければならないということ、それは、武器を使って人を殺したりする戦いではなく、信仰による戦い、人間の罪との戦い、キリストの愛による戦いということです。

こういう問題に少しでも関わったことのある人ならば、この世の仕組みが悪い、原発の会社が悪い、核保有国が悪い、北朝鮮・イランが悪い、それも大事だけれども、それだけでは片付かない、隠したり、騙したり、嘘をついたり、偽り欺いたりする人間の罪があるということ、人間が罪とサタンの支配下にあるということに気づくと思います。その罪とサタンと戦ってくださる神、そこからの救いのためにキリストが血を流して戦われた、そこにわたしどもの信仰の戦いがあるということを見なければならないでありましょう。もちろん、わたしどもにそんな力はありませんが、神の力によってサタンに勝たせていただけるのであります。

さらに、コリントの信徒への手紙一　一四章三三節に「神は無秩序の神ではなく、平和の神である」とあります。多くは語れないのですが、このところは、教会の秩序について語られているところなのですが、一言で言いますならば、教会が秩序をもって一つになって正しい礼拝をささげているのかどうか、言い替えますならば、キリストの教会の中で神の御言葉が正しく語られているのか、ということなのです。本当の平和を語るべき教会が問題有りということなのです。

もう一つ、テサロニケ一　五章二三・二四節「どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにしてくださいます。」

平和の神は真実なお方であるから必ず平和を成して下さるということが言われています。真の平和は終りの日の完成であります。

最後に、フィリピ書四章八・九節を読んで終わります。

「終りに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます。」

これも聖書が語る〈平和の神〉でありますが、このことが核の問題とも深く関わっていると思うのです。言われていることは、簡単なことです。わたしたちの毎日の生活の中でどんなに小さなことでも良いと思われることはどんなことでもしなさい、ということでありますが、この普通の小さな当たり前のことが、深く平和と「核」の問題と関わっているのです。何も大きなことを考える必要はないのです。

実は、この聖書の箇所は、関根綾子さんが天に召され（二〇〇二年一〇月一三日）、一〇月二七日東京ＹＷＣＡにおける葬儀で川田殖さんが（そのときの共助会委員長）式辞をのべられ、このフィリピ書八・九節を引きながら、この使徒パウロの勧めは、関屋綾子さんの生涯を導いたものと思えてなりません、と語られました。

関屋綾子さんの平和運動は、この平和の神に支えられ、宗教者の枠組みを越えて、心あるあらゆる人々と協力し、共に重荷を担い合う者とされたことを思う、と語っておられたことでした。

講演
「チェルノブイリ原発事故二二年目の報告」

愛隣教会　山崎　知行
山崎喜美子

今回はこのような報告の機会を与えてくださり、北白川教会の皆様に深く感謝いたします。当日は当方の時間配分の悪さもあり長い時間お話しさせていただいたにもかかわらず最後まで熱心にお聞きくださり、質問も沢山いただいて、よき交流が与えられたと神様に深く感謝するものです。伝統ある御教会の親睦修養会報告集の一回分を汚すことになるやも知れませんが、当日の報告の内容をまとめてみたいと思います。

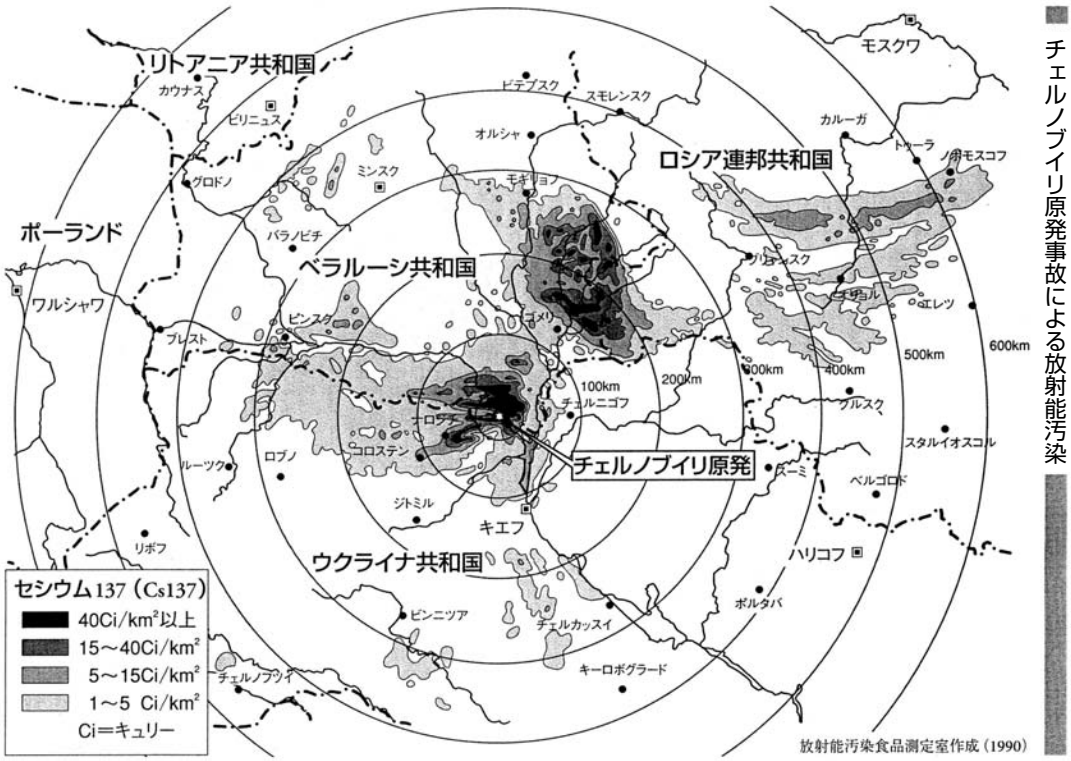
我々夫婦が長年、原子力発電の人体への、いや生命全体への害作用に気付いてから、これまでの原発事故での最大の事故〝チェルノブイリ原発事故〟は片時も忘れることの出来ない事故でしたが、まさかその現地を直接訪問出来るとは考えてもみませんでした。しかも三回も！　神様のご計画は全く意外な所に準備されているのだと感じております。

ＮＣＣ（日本キリスト教協議会）のチェルノブイリ災害問題プロジェクトがチェルノブイリスタディツアーを一九九八年から始めていますが、二〇〇五、，〇六、，〇八年と三回参加させていただきました。初めの二回は、この事故で放射能の三分の二が降り注いだといわれるベラルーシを、そして，〇八年には現地チェルノブイリをも加えてウクライナとベラルーシを訪問しました。

ベラルーシ共和国は一九九一年ソ連崩壊後に独立した小国で（国土二〇万平方km、人口九九〇万人）東はロシアと西はバルト三国やポーランドに挟まれた農業国です。ほとんど平坦でなだらかな丘陵と湿地帯や湖沼が点在する、とても美しい国です。南隣りのウクライナは似たような国土で、南側に地中海と連絡する黒海があって沿岸部は観光地として有名です。そのウクライナとベラルーシの国境近くにウクライナ国チェルノブイリ市郊外に一九七八年から原子力発電所が作られ、一九八四年には問題の四号炉が完成・運転開始しました。そして一九八六年四月二六日未明、四号炉の初めての定期点検時に出力低下を行いながらのテスト時に爆発炎上してしまったのです。その爆発の規模は広島原爆の五〇〇発分（セシウム一三七に換算して）とも言われる程で、一瞬にして吹き飛ばされた天井から炉心に詰まっていた熱い放射能が大量に大気中へ放出されました。

当時ソ連は共産党独裁の情報管理社会でしたので、事故の正確な情報はなかなか出てこなかったのですが、事故後三年もたってからソ連政府が公表せざるを得なくなった汚染地図には事故炉を中心とした三〇km圏内以外に、驚いたことに一〇〇kmも二〇〇kmも離れたところに三〇km圏内に匹敵するほどの高濃度の汚染地区が記録されてあったのです。事故後、大量に放出された放射能は黒い雲を形成し、この放射能雲はまず西に、それから北から二七日には東北へ流れ、遠く離れた高濃度汚染地区あたりで不幸にも雨が降ったようです。一説には人工降雨を行ったとも言われます、五月一日にはモスクワでメーデーの祭典がありますので。

汚染地図の左下の汚染度表で最低の一平方km当たり一キュリー



の意味は、日本の法令で言うところの「放射線管理区域」で、一般人は立ち入り禁止の区域です。それがベラルーシ、ウクライナ、ロシアの三国で一四・五万平方km（本州の約六四％の面積に相当）にも及び、今でも六〇〇万人もの人々が、そこで生活せざるを得ない状況にあるのです。

セシウム一三七による汚染地域の法的定義（ベラルーシ・ウクライナ）

一平方km当たり四〇キュリー以上　第一次移住ゾーン（強制移住）

〃　一五～四〇キュリー　第二次移住ゾーン（移住対象）

以上二地域で二〇～三〇万人

〃　一～一五キュリー　希望により移住

〃　五～一〇キュリー　希望により移住、子供に給食

〃　一～五キュリー　定期的な放射能管理を要する

以上三地域で約六百万人

歴史的事項と原子力について

ここで簡単に核の歴史について振り返ってみますと、放射線が発見されたのはレントゲンによるX線の発見が初めですが、キュリー夫人がラジウムを使っての様々な功績をあげ、一九三八年オットー・ハーンが核分裂を発見すると、これがとてつもないエネルギーを生み出すことを突き止め、時あたかも戦時中で、この膨大なエネルギーを爆弾の形にすれば戦いを有利にすることが出来ると考えたのは、時代が生み出したエネルギーだったと思います。ナチスドイツに先駆けて原爆を製造することをアインシュタインを中心とする科学者たちが時の

アメリカ大統領ルーズベルトに進言し、一九四二年アメリカはマンハッタン計画をスタートさせます。ウランの核分裂反応を応用する原爆製造を原子炉を作ることから始めたのです。つまり原子炉はもともと核兵器を造るための技術であったのです。一九四五年にはアメリカは原爆を三基完成させました。初めの一基（プルトニウム爆弾）を実験用として、七月にアラマゴードの砂漠で炸裂させたのです。爆発の威力を調査する為になんと兵士たちを爆心地へ向けて進軍させたようです。その時の軍人、そして風下の住民が原爆による最初のヒバクシャであった訳です。そして八月六日には広島にウラン爆弾が、八月九日には長崎にプルトニウム爆弾が落とされました。戦争行為として都市に原爆が落とされた初めての事件でした。戦後、核兵器を造り続ける大義名分がない事からアイゼンハワー大統領は国連総会で〝アトム・フォー・ピース〟という演説をして、核の平和利用を訴えました。しかしソ連との冷戦で、核兵器は地球を何回も滅ぼしてしまうほど大量に作られていく歴史をたどることとなります。核の平和利用という表現に出会う時に、チェルノブイリ現地を訪れた我々としては、「核」と言えば〝軍事利用〟で「原子力」と言えば〝平和利用〟との言葉の使いわけには騙されたくない思いが強くあります。原子力エネルギーを使うプロセスにはウラン採掘から始まって、ウラン濃縮、燃料加工、原子炉運転、使用済み核燃料の保管、再処理、高レベル放射性廃棄物の管理というすべての分野でヒバクシャを出さざるを得ず、しかもそれらの人々を差別する構造があり、いったん原子炉事故が起これば地域社会を根本から消滅させてしまう程の生命系に相反する技術だと思わざるを得ません。放射線の医療への応用とか私たちが実際に電気を利用している立場から放射線利用の利点を全く否定しているわけではありませんが、常にネガティブな面を忘れないように思いを集中して生きて行きたく思っております。

事故被災者について

事故当時のソ連は厳重な情報管理が行われていたので詳細はいまだに不明な点が多いですが、事故現場に居合わせた原発職員・消防士たちは一〇〇〇人とも二〇〇〇人とも言われますが全身に一～一〇シーベルトもの被ばくを受けているようです。一九九九年茨城県のＪＣＯ事故で亡くなった二人の被ばく量に匹敵する量です。事故処理に最初に投入されたのはソ連陸軍化学部隊だったようです。彼らはすでに核戦争を想定して核爆発後の対応を訓練されていたのでした。彼らは猛烈な放射線の中、必死に消火活動に取り組んだようですが、彼らの被ばく状況や、その後の様子は一切知らされていません。その後全国から予備役や建設労働者やら事故処理作業者（リクビダートル）として六〇万人とも八〇万人ともいわれる人たちが駆り出され、処理活動に従事してますが、彼らの被ばく量は一〇〇～五〇〇ミリシーベルトと言われています。去年発表された論文では被ばく線量と病名がはっきりしている人たちのデータがまとめられましたが、全白血病と悪性リンパ腫について被ばく線量と病気との関連が明確になりました。二二年も経ってようやくです。

三〇㎞圏から強制移住させられた避難民が約二〇万人、被ばく量は表1のとおり、高濃度汚染地域の住民や移住者が二五～三〇万人、一平方㎞当たり一キュリー以上の汚染地域住民は約

表１　30km 圏避難住民の外部被曝量

原発からの距離	居住区数	人数（人）	平均外部被曝量 ミリシーベルト
プリピャチ市		45,000	33
3～ 7 km	5	7,000	540
7～10 km	4	9,000	460
10～15 km	10	8,200	350
15～20 km	16	11,600	52
20～25 km	20	14,900	60
25～30 km	16	39,200	46

注：1986 年のソ連政府事故報告書より.

六〇〇万人。彼らの被ばく量は想像する以外にデータはありません。

三〇km圏内の住民の汚染状況

表からうかがえる事は、二五〇ミリシーベルトは白血球減少の起こるレベルですから、炉心から一五kmまでの距離に住んでいた人々には急性放射線障害があった様に思われます。チェルノブイリ原発の建設及び運転をする人達のために新たに造られたプリピャチ市は原発から約五km、人口五万人の若い人たちの街ですが、四月二六日（土）には情報は伝えられず、人々はいつも通りに外で遊んでいたそうです。結婚式まであったようです。しかし放射線レベルはぐんぐん上昇したので二七日には強制移住が決定され、首都キエフから一二〇〇台のバスが集められて約二時間ですべての住民が住み家を後にさせられました。しかもたった三日間分の食料と必需品を持たせて。しかしその後、人々は再び我が家を見ることは許されませんでした。ですので、表にあるように外部被ばくはまだ少なくて済んでいるのですが、それ以外の三〇km圏内の人たちには一週間も放置され、その後、強制移住がなされたので外部被ばくは上記のように急性放射線障害をきたすほどのレベルを身体に受けさせられてしまったのです。

二か所の病院訪問（以降，〇五、，〇六年訪問記）

ベラルーシの首都ミンスクの国立内分泌センターでは院長のタチアナ・モホ医師が現状を話して下さった。甲状腺ガンは国としてチェルノブイリ事故が原因であると認めざるを得なかっ

た唯一の疾患だが、ヨウ素一三一という放射能が選択的に甲状腺に沈着しやすい放射能で、ことに子供の場合は非常に影響を受けやすい。そのため小児甲状腺ガンは四年後の一九九〇年頃から急激に増加し、九五年まで異常な増加率を示している。一五歳という年齢を区切って統計を取っているので事故後一〇年が過ぎると徐々に減少して二〇〇一年には事故二年後の約二倍くらいまでに減少している。その代り成長した子供も含めた全人口の甲状腺ガンの年間発生率はその後も増え続け、今でも増加の勢いは止まっていない。白血病に関しては広島・長崎では二～三年後から増加し始め、五～一〇年がピークになっていたが、ベラルーシの小児白血病は八六～九二年に統計的に優位な増加が認められているようだ。

この内分泌センターでは全国各地での検査の結果特に問題のある複雑な人たちが紹介されて受診に来る。一日で甲状腺のホルモン検査、超音波（エコー）検査、甲状腺組織検査までを済ませるが、副腎など他の内分泌器官の検査が必要な人たちが多く、ことに子供は複雑で成長不全などが絡むと多くの時間が必要で神経を使う。他に骨粗鬆症が増え、糖尿病ではインスリン依存性のⅠ型が多く、ことに妊娠が絡んだ複雑な人が送られてくる。治療は地元に送り返してやってもらうが、免疫を高める薬は以前は無料だったが、今は無理となり、無料で出来るのは予防注射、インスリン、成長ホルモン、副腎ホルモン位で、最近は締め付けが厳しくハイペースで有料化していっている状況だ。

南部の地方都市ゴメリ（ベラルーシ第二の都市）の北二〇㎞のチェチェルスク地区病院では当直の内分泌科医が対応して下さった。ここでも甲状腺ガンの増加が目立ち、エコー検査の予約はすぐに一杯になってしまう。ここ南部地方はプリピャチ川と湖沼地帯が多く、昔から結核の多い土地柄だけど三〇年以上前のレントゲン器械しかないので対応が不十分だ。産科医の意見では胎児の時点で既に異常のある例の発生率が事故以前に比べて多いとのこと。学校健診では九〇％以上の学童に何らかの異常が見つけられ、中でも原因不明の貧血が多くて気になっている。小さないたいけない女の子に卵巣ガンや子宮ガンなどがあって、小児婦人科とでもいうべきセクションが必要になってきている。男の子には脳浮腫や脳腫瘍が増えている。全般的に免疫力低下のため呼吸器や消化器、心臓の病気などを含む一般的な病気が多く、治癒が遅れる傾向にある。経済状態が悪く、国の援助は打ち切りの方向にあって、被災した人々の苦しみは想像を絶する。

子供の養護施設訪問

経済状態の悪化が被災家族を圧迫し、加えて免疫力低下があるため広島・長崎に見られる〝ぶらぶら病〟の様に身体が思うように動かないため仕事の能力が落ちて失業する人が増え、再就職にはヒバクシャ差別があって、大人たちもやり切れず、アルコールに逃れる人が増えている。女性のアルコール依存も増え、育児放棄のため食べる物も無くやせ衰え、児童虐待などもあって周囲の人が見かねて病院へ連れてくることが多いとのこと。病院ではとりあえずの栄養補給をして、二週間で児童保護施設（ここ数年で建てられた）へ送る。ここでも六カ月という期限限定で、その後アルコール依存のカウンセリングで立ち直

れた親元へ帰れれば良い方（でも経済的には苦しい）、里親を見つけるとか、しかし多くは児童養護施設へ送られる。

二〇〇五年の訪問時に強制移住の村のすぐ近くに三年前に開設された児童養護施設を訪問した。園長は国の援助が激減していくのでもうやっていかれないと嘆いておられたが、子どもたちはいたって明るく、誕生会の日だったので詩の朗読をしたり、歌を唄ったりして最後は全員でフォークダンスに興じた。しかし子供たちの食事代は国からの援助は一日一ＵＳドル＝二〇〇〇ベラルーシルーブル＝一一二円。誕生会の費用は職員が出し合って手作りで行っていた。

子供の保養施設訪問

首都ミンスクから北西へ八〇㎞、湖のほとりの森の中に保養施設「希望二一」がある。高濃度汚染地に今も住む子供たちのための学校とサナトリウム機能を兼ね備えたリハビリ施設で一九九四年九月開設。ベラルーシ政府と支援団体、ドイツの自治体や市民団体、それに日本のＮＰＯ「チェルノブイリ子供基金」が協力し合って運営費を援助している。「希望二一」では午前中三～四時間の授業がある。午後はクラブ活動や医療に当てられている。小児科医、歯科医、甲状腺の医師、心の専門家が常駐し、心電計、肺機能測定器、検眼鏡、超音波診断装置などは「チェルノブイリ子供基金」から贈られた。汚染地の子供たちの健康状態は悪化している。保養所では汚染地での生活の方法なども教えている。例えば食べ物の選択、特に果物を取ることの必要性など。保養所でよい空気に触れ、良い食事をすると保養前の二〇％くらいまで体内のセシウムレベルは下がるとのこと。

汚染度が一平方㎞当たり一〇キュリー以上の高濃度汚染地区の子供は年二回の保養施設利用が優先的に認められている。一平方㎞当たり一キュリー以上の汚染地区の子供は年一回の保養が受けられる。ここ「希望二一」と黒海沿岸に南保養所があって子供の希望が受け入れられる。保養期間は二一日間、一グループ約三〇人で一五グループを受け入れている。費用は一日一一・五ユーロで国の援助は七〇％、ほかは海外からの援助基金から賄っている。国は援助金を出していることから施設の運営に規制をかけてきており、専任教師を置くことが出来なくなってきた。子供たちの出身地の先生が同伴する方法などに変わってきている。その為課外クラブ活動も減少傾向にある。保養所としては運営対策を考え、一般家庭の家族単位の保養・リクレーションを二一日間二五〇ユーロの有料で受け入れたり、さまざまな会議やイベントに施設を有料で開放したり、農園では野菜作り、果樹作り、薬草作り、蜂蜜作りまでやって運営しているとのこと。

しかし子供たちの雰囲気はとても明るく、良い食べ物、良い空気そしてゆったり配慮された教育プログラムとケアシステムの中で子供たちの笑顔が豊かになっている。ただ、中には身体のダメージが強く、元気になりきれない子供も何人かいたのも事実です。

「困難の中の子供たち」―甲状腺ガンの子供と母親の組織

ベラルーシ第二の都市ゴメリはチェルノブイリ原発から北へ一二〇㎞で周囲に幾つもの強制移住対象の高濃度汚染地区が点

在しているところだ。ここの小児外来病院の一室を借りて上記の名前の市民組織がある。リーダーの娘さんが七歳の時甲状腺ガンの手術を受けている。当時、母親たちは自分の子供がガンであることを隠し、国も圧力を掛けていたので呼びかけを広めるのは大変であったようだ。九二年秋、テレビで子供たちの状況を訴え、大きく運動が広がり、国も認めざるを得なくなったようだ。国は甲状腺ガンだけをチェルノブイリ原発事故の影響として認め、一八歳まで月五〇ＵＳドルずつ補助している。しかし最近、監督している大統領支援室が手続きを難しくしたり、五年間障害が出なければ手当をストップしたりと、支援を後退させている。事故時、子どもだった女性が母親になる年齢となり、甲状腺ガンだった人の子供のうち六人の子供が同じように甲状腺ガンとなったそうだ。最近では妊娠中に染色体の異常が認められればウクライナでは中絶が認められるようになった。甲状腺の手術後、転移して目を摘出したり、手術後の後遺症のためコンプレックスや精神不安定で自殺未遂や投げやりの生活になったりで、心の傷が深く、家族を訪問してアドバイスをしたりしておられるとのこと。学校を卒業しても仕事が出来なかったり、障害証明が就職の妨げになることもあるようだ。重症の子供を持つ家庭では父親の二〇％くらいがアルコール依存症や仕事が出来なくなったり、離婚したりして母親が子供の成長を支えている。その母親もアルコール依存症になったりすると育児放棄となっていく状況がある。今は一八歳までの三五〇人とその母親が会員となっている。一八歳になるとこの会を卒業ということで卒業生には三年間月五〇ＵＳドルの援助をしている。甲状腺ガンの手術を受けた人の職業は限られてしまう。大学は受け入れてくれる。国の方針は障害者を健康だと言って抑圧する。病気の人は徴兵免除となるが、生活保護はない。失業手当はあるもののアパート代にもならない。そんな中で日本との交流が発展して家族単位で文通したり、日本のＮＰＯを通して月五〇ＵＳドルずつ支援として振り込まれ、感謝しているとの報告もあった。

エレーナ・トルスタヤさんとの交流

サハロフ国際環境大学放射線医療内分泌学研究所、公衆衛生リハビリテイション実験室助教授のエレーナさんはＮＣＣとの交流で何回か来日。研修を受けたり、学会発表やシンポジストとして活躍してこられたが、ＮＣＣのスタディツアーではいつもコーディネーターとしてお世話をして下さる。彼女はチェルノブイリ被災者のＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス症候群）を研究しておられるが、最近の特徴は、高濃度汚染地区の子供たちは保養地へ優先的に保養に行けるなど情報が行き届いているのでそれほど不安は厳しくないが、低濃度汚染地区の子供たちは情報がほとんど入らないので、身体の変化や今後のことに不安がきつく、ＰＴＳＤの発生率が高いと話しておられた。例えば汚染地での生活の注意事項を知りながらも経済的には汚染食を食べざるを得ない中での生活の工夫は、たとえ言われても多くはそれどころではない。若い人に聞くと放射能はウイルスだとの答えが戻ってくる状態で、そうした若い人たちに高血圧や心臓病が増えているとのこと。大統領のチェルノブイリ切り捨てへの方針が暗い影を落としている。

（ここまで知行記す）

ウクライナ訪問（ここから，〇八年訪問記）

二〇〇八年九月一七日～二三日　ウクライナのチェルノブイリ四号炉と三〇㎞圏内高濃度汚染地区を訪問しました。旧ソ連崩壊以前は同じ国であったウクライナとベラルーシですが、寝台列車で国境を通過するとき、パスポートチェックが全車両を終了するまでの数時間止まったまま、また不審物がないかベットの下まで検査する厳重さ、中には荷物の中まで広げられた人もいたようで国境の厳しさを感じました。

ウクライナ・チェルノブイリ博物館

モスクワから飛行機で一時間四〇分キエフ空港着。キエフの町から車で一時間の所にチェルノブイリ博物館がある。一九九二年に造られ、一階は消防署、二階が博物館となっている。中に入ると階段に天井から消えた村の名九一と三市の名札がぶら下がっている。すべて強制移住となり、ウクライナから、いいえ地球上から消えてしまった市や村の名なのです。原子炉の模型の前で女性からチェルノブイリ四号炉爆発事故の説明を受けた。旧ソ連時代はこの事故をすべて運転員のミスと片付けていたが、独立後の一九九一年、原子炉自体に三二か所もの設計ミスがあり、構造上の問題があったと認められた。一号炉は一九七八年に営業運転し、四号炉は一九八四年運転、将来性があると期待されていた。事故は最初の点検補修の為に停止作業に入った直後に起こった。四月二六日、博物館の時計は一時二三分の針を示して止まっていた。壁にはこの事故で犠牲になった三一人の消防士たちの写真が貼られている。平均年齢二三歳、世界を救った英雄だと讃えられていた。ウクライナ全体でのリクビダートル（除染作業員）としては一万四千人亡くなった。しかし説明する女性は「自分はもっと多いと思う」と付け加えた。放射能が高く、ロボットや機械は動かなくなり、人間が四人一組でシャベル作業をする。二～三分の作業で徴兵二年分とされた。原子炉直下の炉心溶融後の水蒸気爆発を防ぐため、原子炉の下を短時間で掘り、コンクリートトンネルを作る作業を行った。地下の温度は三八度にもなり、這いつくばって素手で掘り、困難を極めたといわれている。上空からはヘリコプターで七〇〇トンの砂、鉛、ホウ素を投下、消火に一週間かかった。広島の五〇〇倍の放射能を放出し、遺伝子が傷つけられ六～七世代は影響を受ける。ガラスケースの中に頭が一つ胴体が二つの動物が展示されていた。

高濃度汚染地区

ゴメリはベラルーシ第二の都市、チェルノブイリ原発から北に一二〇㎞位の所にある。事故当時風の方向と降った雨の影響でチェルノブイリ地区と同じほどの放射能汚染地区となった。ドーブル市役所に立ち寄り、放射能汚染地区管理委員の責任の方が同行、この地区の説明を受けた。二五か所の高濃度汚染の村があり、一三か所の村が埋められ、人口は二五％減少した。帰りもこの市役所に寄ったが私たちを乗せてくれた運転手は、車のタイヤが汚染されていないか夫にＲ―ＤＡＮの測定を依頼、車のタイヤの土を丁寧に洗い流していた。汚染に対する気配りはこの地域だからこそと心が痛んだ。

・ウイレバ村…ゴメリ市から四五㎞、ロシアに近く一五㎞先は国境になる。人口は当時五〇〇人住んでいたが、

今は強制移住で無人となり、家は一一七軒が土に埋められた。木がうっそうと生い茂り、野生動物が増えているらしい。

。ジミーヤンキーの別荘…レンガ造りの立派な建物。一七～一八世紀頃ゴメリの街を造った人がイタリアから建材を運んで建てた。旧ソ連時代は共産党の別荘にもなった。この別荘近くに八八〇人が住んでいた。一九八九年に強制移住となり、今も通常の三倍の放射能汚染がある。六家族の人が残り、週二回パンなどの生活必需品を運んでいる。当時住んでいた子供たちのうち二五人が今も「困難の中の子供たち」に加入しガンなどの治療を行っている。

。アンナ・ミリアムさん宅…アンナさんは七三歳。夫を一九七一年に亡くし今は一人で住んでいる。息子さんの家族はゴメリに住んでいるが、ちょうど二週間前からアンナさんを訪れていて私たちの訪問をとても歓迎され一緒に写真に収まった。アンナさんは若い頃銀行に勤め、結婚して集団農場の仕事もしていた。今は年金暮らし。畑でジャガイモ、玉ねぎ、ナンキン等を作っている。軒下に置いてある野菜をR―DANで調べたが放射能の数値は高く（九倍）しかしこれを毎日食べざるを得ないのが現実。電気・電話はあるが水道はなく井戸を利用している。たぶんこの井戸も放射能数値は高いだろうが、昔風の屋根のある、とてもステキな井戸だった。家の中は刺繍や家族の写真が飾ってあり、一人の生活を楽しんでいる姿に見えた。日本人に会ったのは初めてとのことだが広島・長崎は知っておられ、放射能汚染は生活を一変させた事として大きなウエイトを占めているようだ。

爆発炎上した四号炉と三〇km圏内

キエフ駅からドニエプル川沿いに車で二時間、広大な牧草地や美しい森を通り抜けるとチェルノブイリ地区リチャード検問所があり、赤白模様の遮断機が下りている。車の中に内務省管理監が入り、パスポートチェックを一人ずつする。すぐ近くに管理棟があり、元ジャーナリストのセルゲイ・チェルノさんから三〇km圏内の説明を受ける。

。三〇km圏内の管理

ウクライナ緊急状態省が管理している。チェルノブイリ原発はすべて止まっているが、管理が必要で四〇〇〇人が作業をしている。三〇km圏内での宿泊はできないので、六〇km離れたスラヴチッチ市から鉄道で通勤、二週間働いて二週間休む勤務をしている。四号炉は三〇年は大丈夫と言われていたが、一七年で石棺にひびが入り、劣化し、倒壊の危険がある。ドーム型新石棺の作業を主にドイツが行っているが、資金不足もあり、工事は難航している。三〇km圏内には八つの企業があり、九〇〇〇人が働いている。金属処理会社、水処理会社、放射性廃棄物処理会社、設計・建設の会社、洗濯・洗車等の会社、森関係の会社、チェルノブイリサービス（暖房、

下水、コミュニケーション）等。三〇km圏内では植物の根が放射能を吸収するので必ず木を植えるようにしている。高レベル放射性廃棄物は地上にある施設で鉛の上に置いて管理している。

。強制移住村とサマショール（ロシア語で我儘な人）の人々

事故前三〇km圏内には二〇万人の人が住んでいたが強制移住のため、他の地へ移り住んだ。しかし二〇〇〇人の人たちが帰って来て、今は二八〇人が住んでいる。旧ソ連時代は三〇km圏内に住んではいけなかったので国家からの補償はなかったが、独立後の一九九三年からは一定の制限で帰りたい人は帰っても良いことになり、二〇〇人の人が年金を受けて生活をしている。年金は郵便職員が月に一回配達している。電気・電話は一人でも住んでいれば供給する。しかし水は井戸水。道路は冬は通れなくなる。週二回必需品は店が開き買い物が出来る。食べ物は現地のものは汚染しているので食べてはいけない事になっているが、ほとんど自給で野菜を作り、ニワトリ、ガチョウ、豚、牛などを飼っている人もいる。

教会は事故前一六か所ロシア正教会があったが、汚染で取り壊され、二〇〇三年に国が新しく建て直した一か所のみとなった。

現在ある施設…診療所、図書館、警察、店、バー、スポーツ会館、プール

現在ない施設…学校、幼稚園、裁判所、気象庁、結婚式場、文化施設

二二年経ち、住民が減った。野生動物が増え、二〇〇種類以上いる。まだ法令にはないが将来国立保護園が出来るはずだ。最後に原子力発電についてどう思うかの問いにセルゲイさんは「人間が造ったものは寿命が短いので良いとは思はない」と心を込めて言われた。

管理棟を出て再びバスで三〇km圏内を回る。

イリヤスカヤ教会…ロシア正教会。週一回土曜日に礼拝をしている。

ユダヤ教司祭の墓…四月二六日だけ訪れて良い墓。事故前にはこの近隣にユダヤ系の人が多く住んでいた。第二次大戦時ユダヤ人八〇〇〇人を埋めたとも言われる。

事故処理戦車の墓…事故処理に一万台使用したが今は二千台となっている。どう処理したのかは不明。

放射能汚染の廃船…ドニエプル川で砂利、セメント等を運んで消火を助けた。そのまま川に放置されている。

消防署と消防隊員の銅像…四号炉に一番初めに駆けつけた消防隊員。急性放射能障害で死亡が二八名、火傷で死亡一名、瓦礫に埋もれたまま一名、その他の死亡一名。

。一〇km圏内

再び検問所があり赤白縞模様の遮断機が下りている。

リーリョフ検問所で、運転手の点検のみで通過する。

。コパチ村…原発から五kmの所にある村で、一一一四名の人が住んでいた。原発から一番近く、生い茂った木々の道沿いの奥にだいだい色の放射能マークの立て看板と家のしるしの看板が見える。壊され、土に

埋蔵された家々のしるし。

森を抜けると突然広い草原に出た。放水路があり、その向こうに建物が見える。コルダーホール型冷却塔、建築中でクレーンが何本も立ったままの五・六号炉、使用済み核燃料貯蔵庫等で二二年前の姿のままで立っていた。

。爆発炎上した四号炉

原子炉一～四号炉は敷地の一番北側にあり、東西に並んでいる。東側一号炉の裏に記念公園とモニュメントが立っている。セルゲイさん曰く「公園の写真は撮っても良いが、一号炉側の写真は撮ってはいけない。」え！　何故？　軍事用鉄塔でもあるのだろうか？質問するチャンスを逸してしまった。車は一～三号炉の前を通り四号炉の前で止まった。小雨で姿の霞む四号炉。「一〇分したら車に戻ってください」。放射能が高く一〇分間しかいられないらしい。確かにR―DANの数値は八六一と私の住む岩出市の五二倍。まだ一二五トンもの燃料が入ったまま、確かに石棺のコンクリートはひび割れが見え、劣化している。ドーム型の補修工事の予定らしいが、まだその形跡は見当たらない。四号炉の前にモニュメントがあり、周囲は木々で青々している。事故時、この辺は消火作業の為に人々が右往左往していた事だろう。今は深く静まり返り、コンクリートの塊として立っている。放射能の値が高い四号炉の前に立って、私の五感は痛くも痒くもなく何も感じない。何も感ずることの出来ない放射能物質。「これは人間の扱える物ではない」と改めて強く思った。

。プリピャチ市

四号炉から北へ五㎞の所にプリピャチの町がある。原発で働く人たちと家族のために一九七〇年に造られた町。平均年齢二八歳。若い夫婦や子供たちが五万人住んでいた。事故当日、火災はアパートの屋上から見えたらしいが、避難の知らせはなく、普段通りの生活をしていた。翌日急に避難の連絡があり、バス一二〇〇台を連ね、二時間で避難を終了した。三日分の食料と必需品のみ持参、三日後には帰れると思い、着のみ着のままであったらしい。しかし永遠に家へ帰ることは許されなかった。車の中から見るアパートの屋根や窓には、蔦が絡み、道路は雑草が生え、道がデコボコ、この町に降り立つことは適わなかったが地獄と化した原発の町の未来を見ることが出来た。

。五月一日開園予定だった遊園地

プリピャチ市の入り口付近に遊園地がある。一週間後に開園予定だった遊園地は、まだ子供が一度も遊んでいない、ゴーカートは蔦と草で荒れ放題、観覧車は回ることなく天高く突き出していた。入るとすぐの所に苔があり、セルゲイさんが「この苔は以前二〇〇〇レントゲンもあった。今も放射能が高いのであまり近づかないほうが良い」と注意、夫のR―DANも高い数値、それを覗いて思わず飛び退いてしまった。セルゲイさんが観覧車の下からキノコを持って来て苔のそばに置いた。一緒に測定したらどうかということらしい。ここも放射能数値が高いので短時間しか居られなかったが、未来の子供たちへの責任を感じないではいられない所となった。

。赤茶けた松の森

プリピャチの町からすぐ近くにヤノフ駅と鉄道線路がある。鉄道線路に沿った長い松林は事故後数日で真っ赤に枯れ

てしまった。事故時、放射能の風の通り道になって影響を受けた。今は緑の木々が蘇えっているが、チェルノブイリを忘れない為に枯れ木を数本残している。

。避難道路

私は以前からプリピャチの町から避難する一二〇〇台のバスがどうして四号炉の真横を通り抜けなければならなかったのか疑問に思っていたが、現地に来て初めて納得した。プリピャチの町からキエフ方面へ向かう道はこの道一本しかなかったのだ。燃え盛り、炎を上げている四号炉の脇を猛スピードで通り去ったらしい一二〇〇台のバス、濃い放射能を再び浴びなければならなかったプリピャチの人たちの悲劇を今更ながら痛ましく思った。

。「さようなら　ごめんなさい　私の家よ」

一〇㎞圏内を出てオリガ・ミハエルさんの家の近くで、無人の家の板壁に「さようなら　ごめんなさい　私の家よ」の文字がペンキで書かれてあり、避難の直前書いたであろう事を思うと胸を抉られるような悲しみを感じた。

。オリガ・ミハエルさん宅訪問　七八歳

三〇㎞高濃度汚染地域に一人で住んでいるオリガさん宅を訪問。突然にもかかわらず大歓迎で家の中を案内された。各部屋はウクライナの美しいレースや刺繍で飾られ、家族の写真があちこち置かれ、ペチカの上に布団を敷き、昔ながらの生活の様子が窺がえた。テーブルの上に読みかけの本があり、「何を読んでいるのですか?」「ノストラダムスよ」とはにかみながら答えてくれた笑顔にほっとする。庭は木や美しい花でいっぱい。娘二人の家族はキエフに住んでいるとか。以前は家族でにぎやかであったことを思うと……。この地域に一つ残るイリヤスカヤ教会へ週一回行くのが何よりも楽しいとも言っておられた。

。放射能測定検査

三〇㎞圏内の検問所を出る前に、一人ずつ放射能汚染の検査を行う。手を機械に翳し、全身の検査。やはりここは放射能汚染地域なのだと改めて思った。

（以上，〇八年訪問記、喜美子記す）

廃村での出会い

強制移住対象地区で特に汚染度の高い村は、遠くの地から汚染されていない土を運んで村全体を埋めてしまうことが行われている。フォトジャーナリストの広河隆一さんによれば五〇〇を超える村々が消えた村になっているとのこと。埋められてはいないが立ち入り禁止の高濃度汚染地区をいくつか訪問することができた。ゴメリ北二〇㎞のチェチェルスク郊外のナオフォビッチ村を訪問し、寒々とした廃村を歩いていたら、突然人影が。驚いて近づくと、懐かしい人の声が聞こえたとのことで八二歳のオルガさんが家から出てきた。強制移住で都会のアパートに入れられても生活になじめず、自分の家に帰って来たとのこと。家に入れていただいてしばらく歓談したが、政府はこうした政府の言うことを聞かない勝手な人にサマショールとの新語を作って批難している。しかし聞いてみるとどうやらどの村にも数人はこうした人がいるらしい。週二回トラックが来て必要なものを売って回っているらしい。ゴメリ東四五㎞のウイレバ村には七三歳のアンナさんがおられた。ウクライナでは

独立後九三年からはどうしても帰りたい人は帰っても良いことになり、一人でも住んでいれば電気を供給する、電話は村に一本は必ず通しているとのこと。この人たちは汚染された自分の畑で野菜を作ってニワトリやガチョウなどを飼って生活をしている。キノコも集めて食べている。一平方km当たり四〇キュリーの汚染地に二〇年住むと三〇〇ミリシーベルトの汚染に換算されるとの報告もあるが、もちろん外部被ばくのみの数値だが、これは白血球減少という放射線障害のレベルに達している。我々は旅行者なので逃げる事が出来るけど、彼らはもともと自分の家なのに、この環境で生活せざるを得ない。

簡易放射線測定値について

使用した測定器はR―DAN（アールダン）と言って、一番簡単なガイガーカウンターで、ガンマ線のみをチェックする。ガンマ線が一本通過するたびにカウントして、一分間のカウント数を表示する。普段の生活地・岩出の基準値は一分間で一六・七カウント。これと比較して何倍の環境なのかを見た。

ウクライナとベラルーシの首都は基準値と同じ。ベラルーシ南部の地方都市ゴメリから東五〇kmの高濃度汚染地区ウィレバ村に行くと二～三倍と増えて来る。ここはセシウム一三七で一平方km当たり四〇キュリー以上の高濃度汚染地区で強制移住指定地だが、ここにアンナさんが一人で住んでいた。お宅の軒下や庭で基準値の一〇倍を超す。家の中は一～二倍なので少し安心だが、庭や畑がそんな環境で畑を耕し、野菜を作って食べて生活して、すでに二二年。これからもまだそんな生活が続く。

最後の日に原発サイトを訪問した。ウクライナの首都キエフから三〇km圏内、一〇km圏内と近づくにつれて数値が高くなり、四号炉をはるかに目にする頃には八倍ほどだった。一号炉のモニュメント公園では三～四倍、そして爆発炎上した四号炉では今回の最高値八六一カウントを記録した。これは基準値の五二倍だが、他の人たちの測定ではやはり二〇〇八年の同じ場所で大体二〇〇倍と聞いていたのでわがR―DANの限界かと思う。京都大学原子炉実験所の今中さんから、ガイガーカウンターは一台ずつ特性があるので、このような測定値になったのかもしれないとのコメントをいただいた。我がR―DANは少なくも基準値の二〇倍程度のガンマ線はほぼ正確に近くチェック出来ても、それ以上の一〇〇倍を超えるガンマ線環境に今まで遭遇してこなかったので正確な測定は無理であることがわかった。チェルノブイリ原発事故当時、原発の核安全課副主任だったニコライ・カルパンが二〇〇六年に「原子力平和利用の復讐」という著書を出され、その中に当時彼が測定したガンマ線と中性子線の測定値が生々しく記録されてある図表があるが、そこで今回の測定場所とほぼ同じ場所の測定値を見ると約一億倍と読めた。原発労働者の町プリピャチでは、街中で大体一〇倍、当時は一万倍と言われていた。遊園地には一度も子供たちに使われることのなかった観覧車などが恨みの雨に濡れていた。園内に青い苔が生えているところがあってホットスポットになっていると言われたが、やはり八三六カウントを記録した。

最後に航空機のデータが高い。高度約一万二千mで約二十倍。これは地球が分厚い大気圏に包まれて、地上では宇宙線の影響がかなりブロックされているのに、わざわざそれを突き破って上空に行っているので宇宙線という放射線に直接さらされてい

るため。航空労働は実に過酷な環境だ。

一つの問題提起

二〇〇四年イギリスの「ランセット」という専門誌に「診断用Ｘ線による発がんリスク」という論文が発表された。それによると診断用Ｘ線は大きな利益をもたらす一方で使用頻度によってはガンに発展していくリスクも知られ、各国で調査がなされている。今回のイギリスの調査では計算上の発ガンリスクはイギリスが〇・六％、ほかの先進国一三の国々では〇・六～一・八％、一方日本では世界で最も年間照射頻度が多かったが診断用Ｘ線照射が原因と思われる発ガンリスクは三％以上で、これは年間七五八七例の発ガンに相当するものであったという。ただしこれにはＣＴ検査が含まれておらず、ＣＴ検査の年間使用頻度を加えると日本の診断用Ｘ線照射に起因する発ガンリスクは四・四％となり、年間九九〇五例の発ガン例数となるとの事だ。ちなみに二〇〇二年の国連科学委員会の調査によるとＣＴ装置の台数は世界全体で四万一千台、そのうち日本は一二八六八台で実に三一％を占める。こうしたことから考えて日本は診断に熱心だと評価するのか、それとも、一回のＣＴ検査で一〇ミリシーベルトの被ばくを受けることから慎重に考えたほうが良いのか、意見の分かれるところだ。少なくとも脳ドッグと言って、ＣＴ検査によって微小な脳梗塞像や微小な動脈瘤を発見してすぐに手術というやり方は避けた方がよいと思う。（これは脳外科学会でも警告されている）。さらにイギリスなど数カ国は小児科学会で小児に対するＣＴ検査の制限を提案している。医療被曝は今後問題になっていくと思う。

チェルノブイリの今に関連して

四号炉は事故後コンクリート製の石棺で覆われているが、三〇年持つと言われた石棺も一七年ですでにひびが入って放射能が漏れ出して、いつ崩壊してもおかしくない状態だとか。それで石棺に直接手をつけるのは危険なので、四号炉全体をそのまま覆ってしまう巨大なドームを作る計画は立てられたのだが、資金調達が十分でなく、まだ現場では工事は始っていなかった。

ＮＰＯ法人チェルノブイリ救援・中部が〝菜の花プロジェクト〟を立ち上げた。これは菜の花が放射能を吸収することが分かり、放射能は茎や葉や菜種の鞘の部分に沈着して、菜種そのものには放射能が沈着しないことに目をつけ、菜種油をディーゼル油としてトラックやトラクターの燃料に活用し、茎、葉、根、菜種の鞘などからバイオガスを作り、地域暖房などの燃料や発電に利用し、放射能を含むバイオ汚泥は国の低レベル放射能廃棄物処理の基準に従って厳重に管理するというものだ。現在のところバイオ技術の完成には至っていないが、菜種の収穫は順調で、現地の評判もまずまずといったところと聞いている。四号炉周辺でも積極的に植物が植えられ、植物の活躍が期待される。

当日いただいた質問の中から

全てではありませんが記憶に残るご質問にお答えします。

質問：広島・長崎では同心円状に汚染が広がっていたが、チェルノブイリでは一〇〇㎞も二〇〇㎞も離れている所にも汚染があるのはなぜか？

応答：爆発炎上後、放射能雲が形成されますが、風が最初は西へ、その後漸次北西から北東へ変化し、不幸な事に高濃度汚染地区あたりで雨が降ったようです。その為に放射能が大量に降り注いだわけです。一説には人工降雨があったとも言われます。五月一日はモスクワでメーデーの祭典がありますので。

質問：航空機の放射線濃度が高いが？

応答：地球は一〇㎞以上にもわたる分厚い大気圏に覆われていますので宇宙線という放射線から守られて生命系が存在しうる環境になっているようです。それをわざわざ突き破って上空を飛びますのでガンマ線や中性子線にさらされるわけです。太陽や夜空に見える恒星は核分裂また核融合が連続して起こっているので膨大なエネルギーを出し続けているようです。つまり宇宙空間は放射線の世界で、そこには生命系は存在できません。太陽と地球の関係はとても特殊な関係と言えると思います。核分裂を利用した原子炉の技術は宇宙の論理を生命系が存在しうる地球上に展開しているので、生命には相容れない技術だと思います。まさに神の領域を侵すものだと思います。

質問：国家システムの中で官僚のチェック機能の動きは？

応答：直接官僚の動きについて聞いたわけではありませんが、ベラルーシの状況を言いますと、一九九一年ソ連が崩壊したのちベラルーシは共和国として大統領選挙を行いました。大方の予想は保守派の穏健な人が勝つものと思われていたのですが、あるソルホーズ（集団農場）の所長をしていたルカシェンコがチェルノブイリ補償に取り組むとの公約を掲げて当選しました。ところが彼はその後、前言をひるがえして補償に取り組まない政策を取り始め、その後の大統領選挙も現役の強みを利用して選挙管理を徹底させ、独裁政治をやり続けています。その為にチェルノブイリ補償は目に見えて打ち切りのスピードを強めています。そしてチェルノブイリはすでに終わったとして、汚染されていない土でわざわざ覆った畑まで掘り起こして農業推進を推し進めているようです。

質問：最初に創世記を読まれたのはなぜか？

応答：創世記一章二八節に「…産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物すべてを支配せよ。」とありますが、この〝支配せよ〟の言葉の解釈を間違えたのではないかと高木仁三郎氏に教えられたのでした。高木さんは原子力資料情報室を立ち上げ、長く代表をしていた方ですが、一九九二年我が愛隣教会で特別講演会をしていただいたのです。テーマは「核と人間」でヨブ記や創世記を引用して、キリスト者でもないのに教会人にズシッとくる大変重要な問題提起をなさってくださいました。ドイツのエバンジェリストのゲルハルト・リートケを引き合いに出して話してくださいましたが、リートケは創世記二章一五節「…エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。」この〝耕し、守る〟が〝支配せよ〟の中身なのではないかと言っていますが目に

鱗でした。その後このとらえ方が我々の「核」を考える基本となっています。高木さんは市民科学者を養成する「高木学校」を創設されるなど、核問題を考える市民の理論的支柱となってくださっていましたが、残念ながら病を得て二〇〇〇年に亡くなられました。

その後にいただいた質問

質問：日本で電力の三分の一、フランスでは九割を超えるものが原子力でまかなわれている現在、これを廃止するときのエネルギー政策はどうするか。ドイツが脱原発をかかげながら、結局フランスから電力を買わねばならなかったと聞いているが、これも含めてどう策を立てるのか？

応答：確かに現在日本の電力の約三分の一は原子力でまかなわれています。しかしこれをエネルギー政策から考えるときに原発程エネルギー効率の悪い方法はありません。発電には核分裂エネルギーの三分の一しか利用出来ないようなのです。後の三分の二は海に捨てているのです。そのうえ遠くの都会まで高圧線で送電するうちに三分の一ほどロスがあるそうです。高い設備投資をして作られた電気は値が高いです。そのうえ日本の電気は九つの電力会社の地域独占が認められていますし、電気事業法によれば電気の料金は電力会社の資産に応じて決められているのです。つまり発電所や高圧電線を作れば作るほど電気料金を高く設定出来るのです。その結果日本の電気料は世界一高くなっています。自家発電のプラントを作れる大企業は当然自前で発電所を作って効率よく利用しています。例えば火力発電所を作って発電すると同時に、その熱力をコジェネレイションと言って地域冷暖房等に活用しているのです。結局電力は使う場所の近くで必要な容量に見合った小規模発電の方がエネルギー的には効率が良いと思います。さらに日本のエネルギー開発の研究予算の九〇％以上は原子力に割り当てられ、自然エネルギーへの配分は十分でありません。エネルギー政策を考える時に、こうした情報が市民に十分に知らされていないことの方が大いに問題と思います。

質問：核にかかわる技術は、昔のコバルト照射をはじめ、医学に深く入り込み、重要な診断手法、治療手段となっているが、これらすべても否定されるべきか？

応答：放射線の医療への応用はまことに目を見張るほどすばらしく発展してきたと私も思っています。その技術のメリットが素晴らしければすばらしいほど、技術のデメリットは厳しく問われ反省されなければさらなる発展は難しくなるのではないかと危惧するものです。お話の中ではそのあたりが十分でないままにＣＴ検査装置の導入のあまりに突出した姿に日本の医療のあり様に疑念を感じ、過剰な診断への警鐘を鳴らしたい思いが先走ったもので、不十分でした。

質問：「核の研究は初めから兵器開発とかかわっていた」との発言があったように記憶しているが、それに関して、①各研究の初めをどのあたりに考えているか？

②私には素粒子論は核研究の中心部分と思うが、湯川―益川の研究なども兵器開発の流れの中にあるのか？

③私はキュリー夫人のラジュームの発見は核研究の大切な段階と理解しているが、彼女に兵器への利用の考えは全くなかったと思われる。

④日本の素粒子の実験の極く初期の研究者菊池正士には、彼のしようとしている研究が実生活にやがて関わってくるような可能性は考えられなかった。これが研究者の平均的姿ではなかっただろうか？

⑤重要な科学および技術で（医学もこめて）軍事に用いられなかったものはあるのか？

応答：大変格調高いご質問をいただいて身の引き締まる思いです。ましてや④の菊池正士の名前は初めてお聞きしたので大変勉強になりました。

まず小生が「核」というものに接する初めは第五福竜丸のヒバク事件をきっかけに全国的に拡がった原水爆禁止運動のニュースからでした。だから核―核爆弾という繋がりが小生の中に強くあるのは否めません。ただ核の研究の初めといった場合には理論物理学として原子の発見あたりからとなるのでしょうか。放射線の発見はレントゲンによるX線の発見が初めと思いますし、キュリー夫人のラジウムの発見とその応用は大きな功績を残しました。一九三八年にオットー・ハーンが核分裂を発見し、膨大なエネルギーを見出してから、この核エネルギーを爆弾にとの時代の要請があり、原爆製造へ向けて原子炉の研究が始まったと思います。

小生がお話の中で「核の研究は初めから兵器開発とかかわっていた」と申しましたのは正確には〝核分裂応用の技術研究は…〟とすべきでした。

原子炉は元々は濃縮ウランを用いて原爆を作る技術ですし、その中で作られたプルトニウムがその後の原爆と水爆の原料となり、現在問題になっている高速増殖炉と再処理工場へと発展していく基本の技術だと思います。

⑤に関しては全くその通りで、戦争が重要な科学と技術を発展させてきたと小生も思いますが、それでは戦争は必要悪なのでしょうか？

小生は仮に科学や技術の発展が遅れるとしても戦争によらない発展を望みます。

（以上知行記す）

ウガンダで考えたこと

川西　史子

はじめに

この四月から五月にかけての連休にウガンダを訪問する機会があり、そのときの話をするようにとのことです。まず、なぜウガンダへという話から入るべきなのでしょうがこれまでの交流は過去の北白川通信を参照していただくことにして、とにかく、健登と一週間ほどウガンダ各地を訪問してきた、といきなり始めさせていただきます。

それで帰ってから撮ってきた写真を見ていますと、その中の水汲みの子どもの写真を見て長男が「かわいそう」と言ったんです。すると長女が「かわいそうとはちゃうやろ」と。「え？なんで。こんな小さいのにかわいそうやろ」と、長男がちょっとびっくりすると「その子たちにはそれは普通の生活で、かわいそうというのはおかしい」「上から目線はいかんのはわかるけど、やっぱりかわいそうやん」「かわいそうと言い

切ってしまうのはこっちの勝手な価値判断や」と、ちょっとした論争になりました。

これはなかなか面白いなあと聞いていたんですが、今回お話をすることになって、この辺を切り口にお話しします。この長女の言い方、少し冷たいような感じもしますが、彼女なりの体験を踏まえたものであるような気もします。

われわれは健登の仕事で三年ほどアメリカに滞在したのですが、アメリカへ行った時、彼女は九才、四年生でした。まったく英語を知らないままアメリカへ着いた翌日から現地校へ通わせました。もちろんＥＳＬという外国人のための英語教室はある学校でしたが。田舎の大らかな人の多い地域で、学校でも親切にしてもらって順調に…一、二か月ほどたった頃でしょうか彼女がこう言いました。「みんな親切はいいんやけど、手伝いすぎるねん。私は同じ四年生で、四年生のせないかんことは何でもできる。英語が話せんだけやねんから」

「英語が話せんだけや」という表現が面白く、でもまあなんと恩知らずなとも思い、ちょうどその頃あった懇談会で学級担任とＥＳＬ担任に「うちの子、こんなおかしなことを言うんですよ」と話したんです。するとＥＳＬ担任が「それです！」と。「我々が教えたいのはそれなんです。言葉がわからなくて自信を失っている子に本当に教えたいことは、あなたもおなじ小学生だ、同じ能力があるんだよ、ということなんです。それさえわかれば子どもは自分で伸びていきます。英語はその手段です。だから彼女のようにそれが初めからわかっている子には、こんな教室いらないんですよね」

というこの話の裏返しが「かわいそうと言ってはいけない」

のだと思うんです。もちろん、長男の「かわいそう」と思う感性も忘れてはいけないとは思いますが…。ちなみに当時五才の幼稚園児だった長男は、アメリカでの最初の二年間、どちらのクラスでもクラスで一番しっかりした優等生の女の子にべったり世話をやいてもらっていました。彼の「かわいそう」はこの体験からくるのかもしれません。

旅程

ウガンダという国は、日本と違い民族的には大きく南北に異なっています。言葉も通じないし、体格顔立ちも少し違います。その境目はナイル川です。日本の場合の海のように、ナイル川を越えて日常的に行き来はできなかったわけです。でも内陸国ですから、たとえば北部の人たちは南部の人とは言葉も通じないけど、国境を隔てたスーダン南部の人とは同じ民族であるとかがあるわけです。だいたいがウガンダという国自体、できてまだ四〇年ちょっと、国境線もヨーロッパ人が勝手に作ったようなものですから、「国」というイメージが日本人の持つものとはずいぶん違うと思います。

今回の旅はウガンダの首都カンパラをスタートとゴールに、北部を大きく反時計回りに駆け足で廻ったものです。雨期に入っていたし日程が短いこと、さらに治安のよくない地域である前半の移動は飛行機を使い、後半はドライバー付きタクシーで。我々には運のいいことに雨が少なく、道路事情もまあまあでほぼ予定通り日程をこなすことができました。

同行者はウガンダ人医師アイザック、彼は首都郊外の出身で、北部へ行くのは初めてとのことでした。後半は日本大使館臨時スタッフの人も二人加わっての旅となりました。

カラモジャ

ウガンダに着いた翌日朝、郊外の飛行場から小型飛行機で東北部に飛びました。目的地のカラモジャ地方は、遊牧民、好戦的な戦士の部族の住む地域で、まず観光で行くことはないところです。外務省情報では「渡航の延期をお勧めします」地域。でもそういう地域にもカトリック教会の修道会は昔から活動していて、そこを足がかりに旅をすることができました。今回はその滅多には入れない北部を中心にお話しします。

さて、そういう地方のカンゴーレという村にカトリックの修道会の作った女学校中高があって、そこに日本人のシスター寺田和子さんが居られるのを訪ねました。ちょうどウガンダの学校は一学期間終えてひと月の休みに入ったところで、残念ながら生徒たちの様子を見ることはできませんでしたが、彼女や他のシスターからいろいろお話を聞きました。

カラモジョンでは女性は血縁のある男性の持ち物です。娘は父親の、父が死ねば兄弟の。結婚は夫となる人が妻を父親から買い取ることで、妻は夫の持ち物になります。そんなところで、女の子を中学以上の学校にやることを父親に納得させるのは大変なことだったようです。それでも教育を受け英語を使えると都会で就職し現金収入が得られるから、父親も学費を出すんだそうです。

それはいいのですが、教育を受けた娘たちはまず村へは帰らない。西洋式の教育を受けて男の持ち物には戻れないでしょう。教育が村の発展には役立っていない、学校へ行かせたらもう

帰ってこないと父親たちが警戒し始めたら…という問題・懸念を抱えているそうです。

また先ほどもお話ししたように、ウガンダでは大きく南北二系統に分かれたいくつかの言語を使う人たちが住んでいます。それで共通語が英語となっていて、学校の教育は全て英語で行われています。日本の一部「教育」関係者は喜びそうですが、これも問題だとか。母語ではないわけですから、深く考える力、表現する力は養われにくいのではないか。実際この学校の先生（シスター）の話でも、テストやレポートもただ教科書どおりの回答。作文書いても例文切り貼りのような優等生作文。文法的に間違っているわけではないが、とても本人がそう考えているとは思わない内容で面白みのかけらもない、と。さらに教育は英語でなければいけないということが、子供たちに最初から劣等意識を植え付けていないかという心配もあるようです。

あらためて日本では母国語で高等教育まで受けられるありがたみを感じました。外国語を懸命に日本語に翻訳した江戸明治の先人にあらためて感謝です。

アレモ

それからまた飛んで、主な目的であるアレモ村に行きました。ここはカトリックのミッションが作ったハンセン氏病と結核の療養所があったところで、そこにカラモジョンの人々の略奪を逃れた難民が集まって村ができ、学校や病院ができ・・・と発展してきた村だそうです。草ぶきの屋根、レンガと泥の壁の小屋、豚やヤギ、七面鳥にニワトリなどがうろうろし、マンゴーの木にはまだ緑の実がいっぱい。もちろん、電気水道ガスなどありませんから、小屋の横には石三個を置いただけのかまどがあるし、村を歩くとどこへいってもポリタンクを持った水汲みの子ども（学校は休みですから）を見かけました。共同井戸が村はずれにあるのです。

われわれの泊ったところは元の医師宿舎で一応コンクリート造りの家、食事は後述するＣＡＳＡの運営スタッフの奥さんが作ってくれました。また太陽電池パネルで蓄電し、夜九時ごろまで豆電球並みの明かりが点きました。ただ水道はなく、飲み水もポリタンクの水、その貴重な水を使ってたらいで体を洗うのがここではシャワーと呼ばれます。

普通の家は草ぶきの土間。でも毎朝、家の周りを箒がけする音で目が覚めました。また、食事の前には一家の主婦が、水差しとたらいを持ってきて客の前にひざまずき、水差しの水を注いで客は手を洗うのです。全員が手を洗うと、主婦が短く感謝のお祈りをして、「さあどうぞ」と。まるで聖書の世界に入り込んだようでした。

アレモ村の中心には教会や、中学校が二つ、女

子と男子、病院もあります。いまはミッションは引き上げ（五〇年で切り上げたそうです）医師はいません。看護士や medical officer という資格の人が診療しています。ですから入院患者はいるのですが、hospital ではなく health centre と呼んでいます。

着いた日の夕方、その診療所を見学しましたが、小児科にはかまどに倒れたのか、からだ半分に大火傷をした一才くらいの子どもや、二才半というのに一才前にしか見えないマラリアの子などがいました。産科には八人。予定日の一ヶ月くらい前から、つまり歩いて来られるうちに入院するんだそうです。こんにちは、と握手をしましたが、自分から手を出さなかった人が一人。あとで聞くとＨＩＶ陽性の人でした。またそのうち一人が陣痛が始まっていて「少し早いんだけど…」と助産婦さんが心配していましたが、翌朝聞くと母親は無事だが赤ちゃんは小さくて死んでしまったとのことでした。と言っても二〇〇〇ｇあったそうですから日本ではちょっと考えられない。赤ちゃん自身に何か問題があったのかもしれませんが。

ＣＡＳＡ

さてこの村は二〇〇七年に健登が滞在した際友人となった人の故郷で、ウガンダ北川会の資金の残りで小さな障害者向けの給食デイケアサービス（care and share Aremo ＣＡＳＡ）を立ち上げたので、その様子を見に行ったわけです。私は詳しい運営にはノータッチなのですが、最も困窮している障害のある人たち三〇人ばかりに、一日二回の給食とデイケアを地元の人にほとんどボランティアでしてもらっているようです。

おおきな建物を作り、集まれる人にはここで給食を、無理な人には自転車で運んでいます。またスタッフが簡単な巡回医療サービスもやっているようです。健登の話では、給食だけのサービスで確かに皆、状態は良くなっているようです。またこの左の車椅子の女性は二〇〇七年の報告でも紹介されたこの「crawling Lady・這う女性」です。あの後、別の援助団体が来たときにふと彼女の話

をしたら車椅子をもらえたそうで、彼女単独ではなく必要な人が必要な時に使っているそうです。なんだか「天は自ら助くる者を助く」の実例を見た思いでした。もし、ＣＡＳＡがなければ、援助団体に彼女の話をすることもなかったでしょうから。

村を回って少し診察につきあいました。癲癇やポリオ、ハンセン氏病、統合失調症などのいろいろな病気の人がいます。治療というほどのことはできませんが、デイケアだけでずいぶん状態は変わるようです。今まではやはり家族の中でも、世話をされずにほっておかれていた人たちも、スタッフが給食を届け、体を洗うサービスをすることで、家族も世話をするようになったとか。本人だけでなく母親も明るくなったとか。さきほどの彼女はこのサービスのおかげで八年ぶりに体を洗ってもらった、とよろこんでいるとか。

資金が少ないこともあり、一部の運営スタッフ以外はほとんどボランティアに近いのですが、ＣＡＳＡの名前入りのおそろいのシャツを着て仕事をしていたのが印象的でした。別に支持したわけではなく、人間、価値のある仲間になったと思えば、そういうしるしをほしがるものだと思います。またかれらの仕事のことを話すときの、嬉しそうな表情から自分たちは人のためになる「しごと」をしているんだという自信、誇りが感じられてきました。

グル

そのあとは陸路でリラという少し都会まで行き、日本大使館のスタッフと合流、さらに北部の最大都市グルに入りました。日本大使館のスタッフは「渡航の延期をお勧めします」地域には入れないのでここでやっと合流したわけです。グルは数年前まで、神の抵抗軍、それは子供を誘拐して兵士として戦わせたので悪名が高いのですが、その内戦がひどかったところです。この神の抵抗軍のやりかたは、村や学校を襲い子供を誘拐するのですが、そのときに子供たちに家族や知り合いを傷付けたり殺させたりさせるのです。そうして彼らが逃げられないようにして連れて行く。そうして精神的に追い詰められた彼らを最前線で戦わせる。

そのグルで和平後、逃げたり捕虜になったりして戻ってきた元子ども兵のリハビリ施設を運営しているテラ・ルネッサンスという立命の学生が作ったＮＧＯですが、その現地滞在員小川真吾さんにお会いしました。

元子ども兵のリハビリは、まず精神的身体的なケア、それから読み書き計算の基本教育、職業教育、平和教育などを一年半。それから起業できるものには資本を貸して起業させる。その後一年半はフォローアップする。やはり子供たちは精神的にひどく傷ついているし、女の子はたいてい大人兵の妻にさせられて

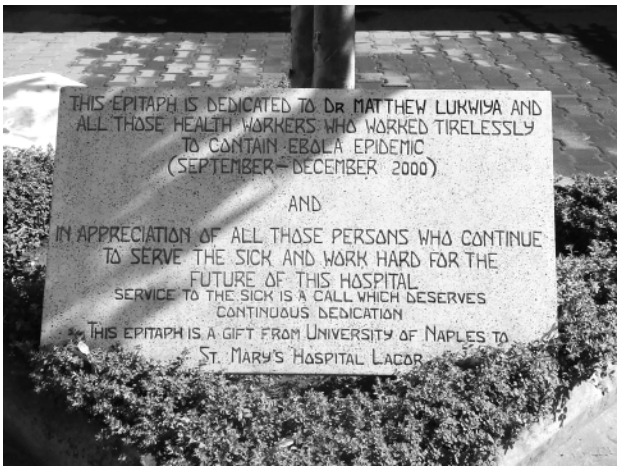
産んだ子連れ、また村や家族のもとに帰ることも難しいことも多い、と。

そこで小川さんは元子ども兵の教育や職業訓練、彼らの作った品の販売経路の開拓といった仕事のほかに、彼らと地元民とも和解のきっかけになればと、毎週土曜日に子供たちのダンスプログラムをしているそうです。元兵士の子どもと被害者の子どもが一緒に活動することを通じて。親どうしの和解が進むことを願って。残念ながらそれを見ることはできませんでしたが。

さて上手く話し合いができて和解がなった場合、村に帰るわけですが、その際の儀式をするための資金も貸し出しているそうです。このあたりの習慣では何か悪がなされた場合、それは社会全体が傷を受けたとされ、それを癒すためのゆるし、仲直りの清めの儀式をして問題が解決したとするんだそうです。犯罪を犯した個人だけを罰するのではなくて。そのことが、戦争犯罪人として個人を裁く国連の方針と軋轢を生んでいることもあるとか。

ラチョール病院

グルにはラチョール病院というウガンダ第二の病院があります。これはイタリアの修道会が運営するもので、海外からの多額の寄付に支えられているのか、近代的な立派な病院です。この病院には寄付で運営されているからでしょうか、広報担当者がいて、彼女の案内でざっと見て回りました。病院内にエボラ出血熱記念碑もありました。二〇〇〇年に発生したときこの病院で流行を食い止めた、その際命を落とした医療関係者の記念碑だそうです。こういうものを見ると、いかにも最前線（何かはともかく）にいる、という緊張感を感じました。



ここでも他の数か所の病院でもそうですが、ウガンダの病院ではとにかく一番大きいのは産科病棟。次が小児科。とにかく子供の多い、どんどん人口が増えている国です。あとは、女性病棟、男性病棟、エイズ病棟とあって、離れたところに結核病棟、というのが基本のようでした。

国第二の病院だけあってかなり設備は整っているようでしたが、ＣＴ、ＭＲＩなどはない。また、あるはずの機械でも壊れていて使えないことも多いとか。「○○はあるんですよね」「あるんですけどこわれているんです。」「え、うちの診療所からこの間患者を紹介したのに。その場合どうなるんですか？」「首都カンパラの大学病院を紹介します。あそこにしかないですから」「遠くですね」「そう、行かない人が大抵です。ここまでなら何とか来ることができるが、カンパラとなると旅費やら宿泊費やら到底無理だと」は、実際にその場できいた会話です。

さいごに

ざっとウガンダ北部を、医療や教育などの援助を見て回ったことになるわけですが、さて最初に戻ってこの水汲みの子に対する感想は変わりましたか？もちろん、どっちが正解というものではありませんが。

私がいちばん気になったのはウガンダの経済でした。人間は多いのですが、街にも活気があるように見えるんですが、どうやって収入を得ているのか？カンパラを離れると「工場」と名のつくものを見たのは、途中紡績工場一か所だけでした。そのカンパラでも最大の産業がNGOだということですから。いくら教育を与えても、とにかく先立つもの、お金がない限り、それを外国からの援助に頼るしかないのでは、国の将来は語れない、「自分でできる」とは言えないと思います。

とくにアレモのような北部地方では食料も自給できていない。村の家々の食糧貯蔵庫は、種まきの時期にもう空っぽでした。カンゴーレの女学校は国連のワールドフードプログラムを受けて給食を出しているとか。どんどん子供が生まれ、人口は増えている。食糧難が心配です。「かわいそうだ」と手っ取り早く食料を援助するのか？食料増産、自給できるような援助をするべきではないのか？

マラリアの子どもは「かわいそう」です。誘拐された子ども兵はすぐに救わなくてはいけません。でも、「自分でできる」を見つけてやること、前者の場合、親への栄養衛生指導、後者の職業訓練や、社会・村に戻すことも同等の重みを持って考えられるべきでしょう。

もうひとつは平和です。神の抵抗軍の活動中、人々は誘拐を恐れて畑へも出られなかった。豊かな土地があっても生産活動が出来ないわけです。今やっと落ち着いてきて、グルは本当に活気のある大都会に見えます。しかし、今度は北隣のスーダンで分離問題が起きています。アラブ・イスラムの北部からアフリカ系の南部が独立しようとするもの。ただその境界線あたりに油田があると。その投票が二〇一一年。その結果また治安が悪化するのでは、という不安を抱えています。

土地の広大さ、人々の生活などなど、日本から見るとはるかかなたのようなアフリカの国の今後に、せめて心は寄せておきたいと思います。

青森に住むインドネシアの兄弟姉妹へ

五所川原教会　工藤　浩栄

この日本語の聖書は、私が授洗の時、小笠原牧師からいただいたものです。二〇〇〇年一二月二四日　クリスマス　五所川原教会と書いてあります。今から九年前の出来事です。五所川原教会は柳町にあった古い建物でした。

イエスは、わたしたちのために命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。

ヨハネの手紙　一　三章一六節

これが、小笠原先生が私に与えた主のみ言葉です。

私はこの頃、心の病のために合計二二ヶ月仕事を休みました。薬の副作用のために何もできなくなりました。仕事に行っても、周りの人の目が気になります。また、人というものは他人の不幸を喜ぶものです。

一九九九年五月に、私は五所川原教会に初めて行きました。そこで小笠原先生に会いました。先生は脳梗塞の後遺症のため、あまりしゃべることができませんでした。私も病気でしたが、先生もまた病気でした。私はその時何を話したのか覚えていません。先生は心臓の手術を受けたあとでした。胸の傷跡を私に見せてくれました。私は最初、先生が何をいおうとしたのか分かりませんでした。しかし、小笠原先生を通じて、私が主イエス・キリストと出会ったのはその時でした。

かなりあとになってから、なぜ先生が心臓の手術を受けることになったのか分かりました。教会には保育園があります。冬の寒い朝、保育園の子どもたちのために、雪かきをしていて心臓の弁がつまって、脳梗塞になったのです。そのために、足から心臓に血管を移す手術のために大きな傷が残ったのでした。

先生はこういいました。

「自分は死にそうになったが、小さい子どもたちのためにやったのだから、私は幸せだ。だからこの傷は、私にとっては、イエスさまの、くぎで打たれた傷と同じだ。イエスさまが我ら罪人のために負った十字架を、私も小さいけれども、子どもたちのために負おうとしたのだと思う。」

今日の聖書の箇所が、このことを意味するのかどうかは、まだ分かりません。

人はごく小さいもののためには命を捨てることができます。親はかわいい子どものためには命を捨てます。これは愛です。人は愛のために自らの命を捨てます。これは真実です。

しかし、この逆もまた真実です。つまり、人は愛のために生きようとします。これは、アウシュビッツ強制収容所を生き延びた医者であるフランクルが自らの体験から示したものです。全く絶望的な状態が深まれば深まるほど、彼は収容所で離れ離れにされた若い妻のことを思い出しました。実際にはその時、すでに彼の愛する妻は生きてはいなかった。また生きていたとしても、決して会うことはできなかった。しかし、実際にはそこにいるはずのない妻が、まさにそこにいるとしか思えない。それが、聖霊なのです。彼は実際にはいない、愛する妻のために生きようとしたのです。フランクルによれば、強制収容所の

厳しい環境を生き延びた人々は、何か愛する対象を持っていたといいます。それは、恋人であったり、妻、夫、父、母、子供、自らの研究対象、芸術など、どんな形であれ、生き延びた人、つまり死を選ばなかった人は何か愛するものをもっていたというのです。しかも、その愛するものが実際に生きていようと、生きていまいと、そんなことは関係がない。ですから、人は愛のために命を捨てもするし、愛のために生きようともするのです。

私は会社で全く相手にされませんでした。しかし、それからしばらくして、インドネシアのみなさんが五所川原にやってくるようになり、新しい命が生まれました。私は元気になりましたが、会社ではひどい目に遭いました。しかし私には希望がありました。みなさんは、私の友達となってくださいました。ともに主にある兄弟姉妹となってくださいました。私もまた、フランクルと同じように、愛するもののために生きようとし、また、そのように望んでいたのだと思います。

みなさんは、寒い青森で苦労したと思います。愛する家族が天に召されたり、病気で苦しんでいることも、私は知っています。しかし、遠く離れていても、もう地上には存在しなくとも、愛するものは、あなたの心の中に今も生きておられる。ともに生きておられる。

主がともにいます。インマヌエル！苦しくとも、貧しくとも、イエスさまはともに十字架を負って下さる。今日この場所で、クリスマスと新しい年の訪れをともにお祝いできる機会を与え給う主、イエス・キリストの御名において感謝します。

（二〇〇九年一二月二七日　つがる市柏公民館）

小さい人には優しくね
～あなたも、あかちゃんだったことがあるでしょ～

武田　尚子

本文は、本人の意向により削除してありますが、

冊子『北白川通信第３４号』で読むことができます。

ご希望の方は教会へのメールで連絡ください。

日曜学校クリスマス

歩くのも伏すのも見分け、わたしの道にことごとく通じておられる

金山弥平

二〇〇八年の一一月、私は車にはねられました。その出来事について、皆様の励ましに対する感謝の気持ちと、この経験を通して学んだことを簡単に書き記したいと思います。まず二〇〇八年一二月一三日付で、「北白川教会の皆様」宛で佐伯先生にお送りした一文から一部省略して引用することをお許しください。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

二〇〇八年一二月一三日

北白川教会の皆様

今回の私の怪我につきまして、皆様の御祈りと御励ましに守られ、支えられておりますこと、心より感謝申し上げます。

そして何よりも、待降節のこの時、こうしてこの世で生きることをなお許されておりますこと、生きて皆様に御礼申し上げることができますことを、父なる神様に感謝申し上げます。

今回の事故は、確かにダメージではありますが、皆様のお祈り、温かい御心に接することが許されたこと、などなど、損失を補ってあまりあるものが与えられたことを強く感じております。神様は、確かに奪われはするけれども、しかし同時に、それにはるかに優るものを与えてくださるということを実感することができました。

事故にあったのは、一一月二七日夜一一時でした。名古屋大学からアパートへの帰路、交差点の横断歩道を青信号で渡っていたときに、背後から右折してきたバンにはねられ、全治三か月の重傷を負ってしまいました。

車がぶつかる直前にバックステップできたため、幸運にも、車体側面との接触による顎と胸の打ち身と、車の前方に残った左脚・足の損傷にとどまりました。背負っていたナップザックのおかげで、後方へはね飛ばされた際には道路にまともに頭を打ちつけずにすみました。

考えれば考えるほど、文字どおり、間一髪であり、今現在、こうして生きてお手紙を書いていることが許されているのも、何かまだこの世でなすべきことがあるとして、もうしばし生きるように言われたのだ！と思わざるをえません。このことは家族にとってはもちろんのこと、私自身にとっても非常に嬉しいことですし、また車を運転していた青年（誠実な好青年です）にとっても、人の命を奪ったという後悔なしにこれからの人生を歩んでいけるのは、本当に幸いなことであったと思います。

車がぶつかる直前には、家内と息子のことがとっさに頭に浮かび、事故の二日前、名古屋に向かう日（火曜日）の別れ際にも、彼女が「こちらが注意していても、最近では向こうからぶつかってくることがあるから、くれぐれも注意するように」と言っていたことが思い出され、「ごめん！ だめかもしれない」と思いながらとにかくバックしようと試みて、すでに着地していたであろう右足をもう一度後ろへ引き、前にかかっていた重心を後ろに移動させながら半歩バックし、さらに左足を上げようとし

ていたときには、視界全体をバンの大きな車体が占めていました。雨に濡れた黒い車体と、運転座席右側の黒いウィンドウに、背後の黄色く光る街路灯が少なくとも二つ、光る雨粒に囲まれて映っていました。飛ばされながら「ごめん。遅かった」と思いましたが、しかし倒れた後、すぐに頭や胸に触れてみましたところ、不思議なことに、まったく痛みはありませんでした。頭から足に向けて順番に点検して見ましたところ、脚には折れたことが歴然の痛みがありました。二人のことを考えることがなければ、そして何か知らない後押しがなければ、おそらくは、ここまでうまくはバックステップを踏むことができなかっただろうと思います。

車を運転していた青年は、手術前「手術が終わるまでいてもいいですか？」と私に尋ね、私が「何時に終わるか分からないから帰ってもいいよ」と言っても、「いさせてください」と頼みますので、「確かに、手術がどうなるか分からなくて心配かもしれないから、それならいてください」と言いましたところ、午前四時三〇分、やっと手術が終わり、私が元気そうにしているのを見届けて帰っていきました。その日の夕方には、再び母親と一緒に病室を尋ね、それから退院の前日まで、毎日、仕事の帰り、一八時から一九時の間に見舞ってくれました。彼自身、一六歳の時に全身打撲を負う交通事故に遭い、今回の衝突のときには、頭が真っ白になったそうです。

左脚・足の損傷は、左足関節開放性脱臼骨折、足首関節が皮膚を破って突き出ていて、腓骨は粉砕、靭帯は断裂していましたので、手術はかなり大きく、一三リットルのジェット水流で骨を洗浄し、腓骨にそってプレートを埋め込み、ボルトで脛骨に固定しました。当分の間は安静を命じられています。

左靴の内側は、靴底とその上を結びつける縫合部が全体にわたって分裂していました。このこともクッションとして働いて、重傷とは言え、足から身体全体へかけての怪我はこの程度ですんだのだと思います。

一二月六日に退院し、現在は大津の自宅で安静にしています。経過が順調に行けば、年が明けて一月の第三週、一三日（火）から松葉杖で出勤できそうです。

名古屋第二赤十字病院には、絵画や書がいろいろな所に飾られており、入院患者や外来患者を慰めてくれます。ここに示すのは、車椅子で病院内を、家内と散歩し、どこから救急車で搬入され、どこで手術を受けたか、今どこでリハビリをしているか、またどこにどのような絵が飾られているの

か、などを説明していた折に、撮影した絵です。私が「母子たち」としてその意味に気づかないまま示した絵について、彼女がこれは聖母子像だと指摘してくれました。確かにそのとおりです。中嶋美瑳子の「母子たち」という作品ですが、アドベントにふさわしい美しい絵だと思いましたので、お送りいたします。

（中略）

最後に示す絵は、事故の直前、日曜学校のクリスマス案内に差し込もうかと、いろいろ工夫していたギルランダイオ「羊飼いの礼拝」の絵です。結局、クリスマス案内のためには用いることはできませんでしたが、これも素敵な絵です。ギルランダイオは、ミケランジェロが最初に師事した画家であるとのことです。

事故の直前まで仕事していたのがこの絵であり、この絵に触れていたこと、そして接近する車に気づく直前に考えていたのが、この絵のことであったことも、神様の恵みが、この経験の中で輝き溢れていると感じさせてくれます。

どうぞ、皆様、何よりも御身体を御大切になさって、恵みに満ちたクリスマスをお迎えくださいますように。二一日のクリスマス礼拝、また日曜学校の礼拝と祝会には、私も参加を許され、皆様とともに、イエス様のご誕生をお祝いできますことを、心から願い、祈っております。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その後、二一日のクリスマス礼拝も、日曜学校礼拝も、ともにお祝いできましたのは、本当に大きな喜びでした。

この事故を通していろいろなことを考えさせられました。そこから三つだけ紹介させてください。車を運転していた青年は、はねたとき頭の中が真っ白になったということでした。確かにそうだと思います。はねられた方の私は生きていられた喜びが強く、その時は、他にどうしようもないからよく観察してみようと思い、非常に楽な気持ちでいられました。しかし、これは被害者であったからこそできたことであり、もしも自分が加害者の立場にあったらどうだろうと考えてみますと、やはり自分も頭の中が真っ白になっただろうと思います。自分の痛みであ

れば我慢できる―というか、そこにあるものとして我慢せざるをえないし、そして実際に来てみれば、何とかやっている以上我慢できる―のですが、人を傷つけたときには、傷ついた人の苦しみは、自分が我慢できる対象ではまったくありません。おそらくは、傷つけたことで悩み苦しむことしかできないでしょう。とくに相手の命を奪ってしまった場合の苦悩のことを思うと、「我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」と祈るしかないと思います。ソクラテスは、プラトン『ゴルギアス』のなかで、不正を加えるのもいやだし、加えられるのもいやだが、どちらかをどうしても選ばねばならないとすれば、不正を加えられることを選びたいと言っていますが、これを「害する」「害される」に置き換えるなら、害されるのもいやだし、害するのもいやだ、しかし、どちらかを選択しなければならないとすれば、害されることを選びたい、となります。これが人間の幸福につながる真理であることは、今回の経験を通して実感したところであり、深いところでソクラテスの主張が正しいことを確信させるものでした―ただし、自分がソクラテスのようにできるということではありません。ソクラテスの行ないを目標として間違いは絶対にない、ということです。命がこうしてあったのは、家族のため、自分のためだけではなく、車を運転していた青年のためにも本当に幸いであったと思います。

第二に、たくさんの人たちの暖かい気持ちに接することができたことは、非常に嬉しいことでした。教会の皆さんはもちろんのこと、私が松葉杖をついて歩いていると、名古屋駅でも、イギリスでも（二月二七日～三月八日の日程でイギリスに行ってきました）、世界中のどこでも、どんな人ごみでも、そしてどんなに急いでいる人でも、私のために道を譲ってくれるのです。

第三に、自分の身勝手さと、原点に立ち返ることの大切さについて考えさせられました。名古屋への行き帰りに、これまでに乗ったことのないほど、そしてこれからもたぶん乗ることはないほど、タクシーに乗りました。七条京阪から京都駅までの以前はスタスタと歩いていた歩道をタクシーの中から見ながら、はたしてここを自分の足で歩けるだろうかと、その度に思っていました。その道を今は確かに自分の足で歩いています。しかしまだ痺れは残っており、これさえなくなれば、と思ってリハビリに励んでいます。それだけならいいのですが、じつは、もっと歩けるはずなのにと時々思い、そうなると、自分の足で歩けるそのことだけで大きな幸いであるにもかかわらず、心のなかに不満が生じてくるのです。そんななか振り返ってみると、あの事故以来、最も幸福感を味わった瞬間は、落ちてくる雨粒を見上げながら横断歩道にひっくりかえっていた時であったことに気づきます。足の痛みはきつく、これから歩けるようになるかどうかもまったく分かりませんでしたが、とにかく生きていられたこと、そして家族に悲痛な思いをさせずにすんだこと、ただそのことだけでこの上ない喜びに包まれていたのです。身勝手な私はこれからも、いろいろな場面で不満を覚えることはあるでしょうが、その度に、あの瞬間に立ち返りたいと思っています。そして足の痺れは、あの時の幸いを思い出させてくれる大きな恵みなのだと感じています。

以上、述べましたように、この出来事は、確かにダメージではありましたが、しかし私にとってはそこに神の意図が働いていることを実感させる得がたい機会でした。そのことをさらに

確信させてくれたもう一つの恵みを最後に語って終わりにしたいと思います。

事故の後、家に帰って静養し、学校に復帰したのは一月一三日（火曜日）ですが、たまっていた仕事を少しでも片付けるため、前日一月一二日（月曜日）の成人の日には研究室に行って、仕事に少しずつ手をつけはじめました。夜遅くまで仕事をしていて事故にあったこともあり、家内は明るいうちにアパートへ帰るようにとしきりに言っていましたが、なかなかそうもいかず、研究室を出たのは一九時三〇分でした。松葉杖でも簡単に帰れると思っていましたが、その日大津から出てきたこともあり、手の豆はつぶれ、右足を前へ進める一歩ごとに自分の体重はこんなにも重かったのかと認識させられつつ、とにかくひたすら前へ進もうとあがいているような有様でした。事故にあった四谷通三丁目の交差点を渡るのは嫌でしたから、それより二つ手前の名古屋大学郵便局の近くの横断歩道を渡ることにしました。横断歩道に辿りつくいくらか前に青に変わった信号が、いつ赤になるか分からず、無理をしないで待とうかといったんは思ったのですが、しかし、なぜか渡ってしまおうと思い返し、頑張って横断しはじめたところ、事故現場の方面からやってきて横断歩道の前で止まった一台の黒い車がありました。私は邪魔にならないようにと思い、必死でその車の前を松葉杖で歩いていましたが、すると突然どこかから「金山さん」と呼ぶ声がしたのです。どこから呼ばれているのかな？と思って辺りを見回したところ、その黒い車の運転手が窓から顔を出して合図をしています。顔がよく見えなかったので、横断歩道を渡りきり、そこにあるちょっとしたスペースに回ってもらいました。まさか？と思ったのですが、車から降りてきたのは、私をはねた青年でした。「〇〇君」と言って握手をかわし、「どうしてるかな？と思っていた」と言いました。彼は、「これから帰られるのですか？送りましょうか？」と言ってくれましたので、「それはありがたい」と言って乗せてもらい、また「晩御飯を買わなければならないから、どこでもよいからコンビニに連れて行ってくれる？」とお願いをし、コンビニで買い物をしたのち、アパートまで連れて帰ってもらいました。腕も脚も疲れ果てて、はたして無事帰れるのだろうかと苦しんでいたまさにその時に、彼が助けてくれたのです。道中では、四谷通り三丁目の私がはねられた交差点を、私をはねた車に乗せてもらって通っていきました。その場所を通過するのは、事故以来、これが初めてでした。そこを通りながら、彼に「ここだね。でも生きていて、お互いに本当によかった」と言うと、彼は頷いていました。

表題に記した「歩くのも伏すのも見分け、わたしの道にことごとく通じておられる」はご存じのように、詩編一三九編の冒頭の言葉の一節です。

主よ、あなたはわたしを究め、わたしを知っておられる。
座るのも立つのも知り、遠くからわたしの計らいを悟っておられる。歩くのも伏すのも見分け、わたしの道にことごとく通じておられる。

その後、富山大学の松崎一平君が、彼の著書『アウグスティヌス『告白』〈わたし〉を語ること』（書物誕生、あたらしい古典入門）岩波書店（二〇〇九年）を送ってくれましたので、その御礼の

メールを記したおりに、この事故と、今述べた不思議な再会に言及しましたところ、彼は次のように書き送ってくれました。

ただちに、最近訳したアウグスティヌスの『詩編講解』第一三八編（現行聖書だと詩編一三九編の講解）の冒頭のことばを思い起こしました。

［中略―アウグスティヌスのことば］

『告白』を、アウグスティヌスの恩恵論を理解するためには、彼がこのようなこころばえをもって生きていたことに思いをいたす必要があると思います。そして、まさに貴兄は、遭遇された事故にたいして、そのようなこころばえをもって対処されているように思います。

私が中略した箇所にアウグスティヌスの言葉が来ます。松崎君が述べてくれているようなアウグスティヌスのこころばえをもって対処できているとは到底言えませんが、ただ大きな恵みによって、そのような心・思いの一端に触れることができたことは確かだと思います。「わたしの道にことごとく通じておられる」神が、どんな時にも限りない恵みに触れる機会を備えていてくださることは間違いなく、私のなしうることは、ただ一つ「後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ること」（「フィリピの信徒への手紙」三・一三）、それにつきると思います。

アウグスティヌスの言葉は次のとおりです。松崎君の流麗な日本語訳に代えて、彼が送ってくれた箇所に続く部分をも含めた私の無骨な翻訳をここで示すことをお許しください。

われわれは、われわれのために短い詩編を準備し、それが講読者によって歌われるように手配していた。しかしその時になると、見られるように彼は混乱し、それに代えて別の詩編を朗読した。われわれは、われわれの計画の中でわれわれの意志に従うよりは、購読者の誤りの中で神の意志に従う方を選んだ。それゆえ、われわれがあなたがたをしばし、その詩編の長さの中に引きとどめることになったとしても、その責めをわれわれに負わせないように。いやむしろ、神は、われわれが無駄に労苦することを欲していらっしゃるわけではないと信じるように。というのも、われわれは、われわれの最初の罪の中で、無駄に罰を受け取ったわけではないのである―われわれが、われわれの顔の汗の中でパンを食べるために（「創世記」三・一九）。たんにパンにすぎないかどうか考えてみてほしい。確かにそれはパンである―もしもキリストがパンであるとすれば。「わたしは天から下ってきた生けるパンである」（「ヨハネによる福音書」六・四一）、そうキリストは語っておられるのである。

堅く支える――杉原千畝と信仰

詩篇四一篇二節―一三節

瀬口　昌久

昨年の八月に一八年ぶりに、礼拝の説教をさせていただく機会をお与えいただきましたときに、自分は一七年間を土のなかで暮らしてから地上に出てくる一七年ゼミみたいだ、自分はまるで一八年ゼミのようですと申し上げました。その予定では、次回は二〇二六年八月に礼拝説教をするはずでしたが、このところの異常気象もあってか、土の中にいることがゆるされずに、追い出されるように、ずいぶんと早く、セミの卵にも満たない小さな信仰が成長する間もなく、お話をする機会がめぐってきました。ですので、今日は、セミの抜け殻のようなお話になると思いますので、みなさまのお赦しを最初にお願い申し上げます。

今朝は、私が一五年間、生活をしてきました名古屋にゆかりのある杉原千畝の信仰にもとづく決断とその信仰の土壌についてお話をしたいと思います。杉原千畝は、第二次世界大戦のさなかの一九四〇年、リトアニアの日本領事代理をしていたときに、外務省の訓令に反して、ユダヤ人に日本通過を認めるビザを発給し、六〇〇〇人以上のユダヤ人の命を救った外交官です。スピルバーグ監督の映画「シンドラーのリスト」がアカデミー賞をとった一九九四年頃には、杉原は日本のシンドラーとも呼ばれて脚光を浴びました。一九九七年にアメリカで製作されたVisas and Virtueという杉原千畝自身を描いた短編映画もアカデミー賞短編賞を受賞しました。日本でも何度かＴＶ番組で取り上げられ、二年前にもＴＶでドラマ化もされて、この十数年の間に杉原千畝のことはよく知られるようになりました。

杉原千畝の生涯とビザ発給の決断

杉原千畝は、一九〇〇年に岐阜県加茂郡八百津町で生まれました。八百津町は、本日の礼拝の奏楽をしてくださっている林律さんの郷里からはさほど遠くないところだそうですが、山あいの自然の豊かな人口一万人あまりの小さな町です。町を流れる木曽川にダムができる以前は木材を川に流して運んでいたのですが、その木材を集積する港のひとつが八百津町にかつてはあったそうです。八百津町には、杉原千畝の生誕一〇〇年になる二〇〇〇年に杉原千畝を記念する記念館がつくられ、杉原の亡くなった七月三一日の前後一週間には、毎年、杉原ウィークと名づけてコンサートなどのイベントが行なわれるようになり、今では町をあげて杉原千畝の偉業を称え、人権や世界平和を訴える取り組みが行なわれています。

杉原千畝は、幼少の頃をこの岐阜県八百津町で過ごし、税務署員であった父の転勤によって三重県や岐阜県に転居し、七歳のときに名古屋市に移り住み、名古屋の金山駅に近い名古屋古渡小学校（現・平和小学校）と県立五中（現・瑞陵高校）に通いました。ですから、杉原は名古屋で十年間を過ごしているわけです。そのため、数年前のことですが、名古屋市の自民党の

ある市会議員が名古屋市議会で、杉原千畝氏を育てたのは名古屋の教育であり、そのことを子供たちに伝えるべきだと主張していました。「人道的な人柄を形成した名古屋の教育は、全国に誇れる」というのです。はたしてそうでしょうか。杉原は成績がたいへん優秀でなかでも英語が得意であり、五中卒業後は、医者になるように命じた父の命に背いて、英語の教師になろうと考えて、早稲田大学高等師範部英語科に進学します。

親から学費の援助を受けることができずに、アルバイトをしながら苦学を続けていた早稲田大学に在学中に、彼は外務省の留学生試験に合格します。大学を中退して中国にロシア語留学生として留学し、中国のハルビン学院でロシア語を勉強して、二四歳のときに外交官として採用されます。杉原は語学の並外れた才能があったようで、英語やドイツ語もよくできましたが、彼のロシア語はロシア人と間違われるほどすばらしく、後年、ソ連で貿易の仕事をした時期は、秘書のロシア人が書いた書類のロシア語の手直しをしていたほどであったといいます。また、外交官としても情報の収集や分析などの能力が高く、外交交渉においてもすぐれた手腕を発揮しています。一九三二年からは、ソ連が所有していた旧北満州鉄道（現在の長春鉄道）の買収の実務に取り組み、一九三五年にその交渉を成功させて、日本に大きな利益を与えたといわれています。ソ連側の譲渡提示価格の三分の一以下で譲渡の交渉を決着させたその実務的な功績によって、彼にはその後の高い地位が約束されていたようです。しかし、杉原は日本政府の中国における非道な行為に抗議し、鉄道譲渡の協定が調印されたその年に、当時の満州国外交部の職を辞職して、外務省に戻ります。妻の幸子さんには、満州国外交部をやめた理由を、「日本人は中国人に対してひどい扱いをしている。同じ人間だと思っていない。それが、我慢できなかった」と説明したといわれています（『六千人の命のビザ』三四頁）。杉原自身が晩年に書き残した短い手記には次のように書かれています。

「満州国ができると、その外交部に派遣され、満州国には三ヵ年在籍しましたが、たまたま当時北満鉄道の権益を、ソ連から買い取るための対ソ交渉に参与して、何度も東京に出張しました。そしてその間に私は、この国の内幕が分かってきました。若い職業軍人が狭い了見でことを運び、無理強いしているのを見ていやになったので、本家の外務省へのカムバックを希望して東京に戻りました。当時の日本では、既に軍人が各所に横暴をきわめていたのであります。私は元々こうした軍人のやり方には批判的であり、職業軍人に利用されることは不本意であったが、日本の軍国主義の陰りは、その後のヨーロッパ勤務にもついて回りました」（『決断』所収、千畝手記より）

その後、杉原は一九三七年には、今度はフィンランドのヘルシンキの公使館勤務になり、そこで二年間働いて、一九三九年にバルト三国の一つリトアニアの首都カナウスの領事館を開設するように命じられます。杉原がリトアニアの領事代理として赴任した一九三九年、ドイツはポーランドとの不可侵条約を破棄し、ソ連と不可侵条約を結び、九月にはドイツ軍がポーランドに侵攻して、ドイツとソ連によってポーランドが分割されます。ポーランドの国家が消滅すると同時に、ポーランドにいた

三五〇万人のユダヤ人に対するナチスのユダヤ人狩りが開始され、ユダヤ人たちは家財産を捨ててナチスから逃れる命がけの逃避行を始めます。

私は二〇〇五年にポーランド南部の都市クラクフを訪問する機会があり、その郊外にあるアウシュビッツの強制収容所を訪れることができました。アウシュビッツの収容所の広大な敷地のなかに残されている、天井の低い暗く狭いガス室に入ったときの胸苦しさを私は今も忘れることができません。ポーランドにいた三五〇万人のユダヤ人のうち八五％が殺され、アウシュビッツの収容所では一二〇万人以上がガス室で殺されたと推定されています。また、アウシュビッツの収容所には、ポーランドだけではなく、イギリスをのぞくヨーロッパ大陸の全土から、北欧やギリシアなどからもユダヤ人が集められて殺され、ナチスに反対するとみなされた知識人をはじめ、ユダヤ人ではない多くのポーランド人たちもそこで虐殺されたことを知りました。

さて、一九四〇年五月に、ドイツは、デンマーク、ノルウェーを襲い、五月には西部戦線の攻撃を拡大し、フランス、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグへと矢継ぎ早に攻撃をかけ、各国はすぐに降伏を余儀なくされます。そのため、ヨーロッパは西も南もふさがれて、ポーランド北部にいたユダヤ人たちに残された数少ない逃走ルートは、東のシベリア鉄道を経由して日本に渡って、そこから自由の国を目指すものでした。六月にはソ連軍がリトアニアに侵攻して、リトアニアで親ソ連の共産党政権を樹立し、リトアニアの日本領事館に対しても八月二五日までに閉鎖するように通達します。ドイツ軍のポーランド侵攻地区からリトアニアに逃れてきたユダヤ人たちが、そのような状況のなかで、七月一八日にビザを求めてリトアニアの首都カナウスにあった日本領事館に押し寄せてきました。杉原は、すぐにユダヤ人のなかから五人の代表を指名して彼らと話し合いをもちました。最終的な受け入れ国がないユダヤ人に対しては、日本通過のビザを出すことができないので、この話し合いのなかで、当時、入国ビザを必要としなかったオランダ領の南米キュラソーを架空の最終受け入れ先とし、シベリア経由で日本のビザを出すことを決めます。杉原は、日本の外務省宛に、人道上どうしても拒否できないからという理由で、ユダヤ人にビザを発給する許可を求めて電報を三度打ちますが、ドイツと防共協定を結び、ナチス・ドイツとのつながりを深めていた日本の外務省は、三度ともトランジットビザといえども発給してはならいとその要請を拒絶します。これに対して、杉原も悩んだことが次のように手記に書かれています。

「サーア私は考え込んでしまった。元々、彼らは私にとって、何のゆかりもない赤の他人に過ぎない。一層のことビーザ拒否を五名代表だけに宣言し、領事館オフィスのドアーを封印し、ホテルにでも引き上げようと思えば、物理的には実行できる。しかも私は本省に対し従順であると褒められこそするであろうに。仮に、本件当事者が私でなく、他の誰かであったならば、百人が百人拒否の無難な道を選んだに違いない。なぜか？　文官服務規程というような条例があって、昇進停止とか馘首が恐

ろしいからである。私はこの回訓（電報の返事）を受けた日、一晩中考えた。家族以外の相談相手は一人も手近にはいない。

兎に角、果たして浅慮、無責任、我武者らの職業軍人集団の、対ナチ協調に迎合することによって、全世界に隠然たる勢力を有するユダヤ民族から、永遠の恨みを買ってまで、旅行書類の不備とか公安上の支障云々を口実に、ビーザを拒否してもかまわないとでもいうのか？　それが果たして国益に叶うことだというのか？　苦慮の揚げ句、私はついに人道主義、博愛精神第一という結論を得ました。そして妻の同意を得て、職に忠実にこれを実行したのです。」（手記より）

杉原は、このような決断をすると、一九四〇年七月二九日から一分の休みも無くビザの発給を始めます。わずかしななかったビザの所定の用紙はすぐなくなり、トランジットビザに必要な長い文書をすべていちいち自分の手で書くという作業をしながら面接と聴取をこなし、万年筆も折れて普通のペンにインクをつけてか書かねばならなかったといいます。杉原は、後に家族に危害が及ぶことを案じて、誰にもいっさいビザ発給の業務を直接には手伝わせなかったそうです。そのようにして、リトアニアの領事館が閉鎖されたあとも、滞在先のホテルで、そして九月五日にベルリンに転出する駅のプラットホームでも列車が出発する直前まで、ビザや通行許可書を書き、記録が残っているだけでも二一三九通の日本通過のビザを書き続け、ビザに含まれる子供の数を入れると六〇〇〇人以上のユダヤ人の命をホロコーストから救ったといわれています。杉原千畝のはかには、スウェーデン外交官ラウル・ワレンブルクがユダヤ人に同じように命のビザを発行して、二万人近いユダヤ人を救ったといわれていますが、杉原はそれに次ぐ数のユダヤ人を虐殺から救ったことになります。

しかし、杉原がなぜ、外務省の訓令に違反してまで、ビザを発給する決断を下すことになったのかは、死後に残された彼のごく短い手記だけからではよくわからないように気がします。どうしてビザの発給の決断をくだしたのか。私は何年か前に岐阜県八百津町にある杉原千畝の記念館を訪ねたことがあります。杉原千畝の記念館で感じましたことは、記念館の展示が示そうとしているのは、杉原千畝が偉い人だということです。残虐なナチスからユダヤ人の難民を救った偉大な人物であり、郷土の誇りであるという主張が強く感じられました。しかし、なぜ、杉原千畝と妻の幸子が、リトアニアにすでにソ連軍が侵入し、領事館の閉鎖が迫るなかで自らの危険をかえりみずに、ドイツとの同盟関係にあった日本政府の命令に反してまで、ビザの発給をおこなったのか、杉原千畝の記念館に行ってもよくわからないのです。自分の命、妻の命、幼い三人の子供の命、自分の職やキャリアをすべてかけて、お金や名誉などの何の見返りも期待せずに、数千人のユダヤ人にビザを発給したのか、記念館で上映されるビデオや展示だけではよく分かりません。

杉原千畝についてその功績をたたえる海外のインターネットのサイトのなかには、杉原が武士の教育を受けていたから、武士道に基づいてビザを発給したのだと解説を述べているものもあります。しかし、杉原の決断の最も深い部分で働いていたのは、彼のキリスト教の信仰であったように私は思います。杉原

千畝は一九二四年にロシア人女性と一度目の結婚をし、ロシア正教（つまり、Orthodox Church 正教会）に改宗しています。一九三五年にそのロシア人女性と離婚して、日本人の幸子さんと再婚しますが、幸子夫人も正教会でキリスト教の洗礼を受けました。杉原千畝は、生涯、正教会の信仰をまもり、戦後の一九五四年頃の一時期には東京にある正教のニコライ聖堂に併設されたニコライ学院の教授などもしています。キリスト教の信仰が杉原のビザ発給の決断に大きくかかわっていたことは、昨年の一〇月に九四歳で亡くなった妻の幸子夫人の証言によって知ることができます。杉原がなぜビザを発給したのかを、杉原が亡くなったあと、幸子夫人が何度も聞かれたそうです。そのことについて、幸子夫人は著書で次のように書かれています。

「「ビザを出すと決めた杉原さんのお気持ちがよく分からないのですが」こうした質問が、多くの人から何度も出されました。それをひと口に言うならば、あの時、夫が私に言った、『私を頼ってくる人々を見捨てるわけにはいかない。でなければ私は神に背く』という言葉でしょう。

強いキリスト教信者ではなかったのですが、神に背くのは、ひいては人道にもとるということであり、《神は愛であり、愛は神である》と聖書にあります。異邦人であろうと人間と人間の愛は世界につながるという、夫と私の考えは間違っていなかったと思います」（『六千人の命のビザ』二〇〇頁）

数年前に、日本ルーテルアワーの「英語で聖書を学ぼう」のウェッブページに、杉原幸子夫人のインタビューが英語で掲載されていました（以下私訳、中略あり）。

「領事館に七月二七日に何人かのユダヤ人がビザを求めてやって来ました。ソビエトがリトアニアに侵入してきて、領事館を閉めるように、外務省が命じてきたので、荷物をまとめて立ち去る準備をしていた時でした。ユダヤ人が言うには、自分たちのほかに数千人のユダヤ人がビザを求めているとのことです。

「しかし、私たちには三人の小さな子供たちがいました。五歳と三歳と生まれたばかりの赤ん坊と。子供たちがナチスに捕まえられたなら、殺されるにちがいないと。たいへんな難題でした。一晩中、このことを考えぬきました。しかし、最後に私は、これは神が私たちに与えた使命だと思ったのです。夫と私は、これこそが神が私たちをこの世に遣わした理由だと信じたのです。神が私たちにせよと命じていることに背を向けることはできないと信じたのです」。

「私の夫は、人々への愛からあのようなことをしました。そして、私が思いますに、それは彼が神を信じていたからなのです。彼は神が彼に期待していることを断ることができないと知っていたのです。これをするために、私たちが持っていたあらゆるものを失う覚悟を私たちはしなければなりませんでした。しかし、私たちは神が私たちにするように期待していることをしなければならなかったのです」。

このように杉原幸子さんは述べているのです。

外務省を追われる―隠蔽と迫害

リトアニアから列車でベルリンに向かった杉原は、その後、プラハの総領事館、ケーニヒスブルグの総領事館に転勤して、最後はルーマニアのブカレストの日本公使館に着任し、そこで敗戦を迎えます。ブカレストの郊外で収容所生活を送り、一九四七年四月に日本に帰国します。帰国した杉原を待っていたのは、外務省からの首切りの勧告でした。帰国後まもなく外務省に呼ばれると、「君のポストはもうないのです。退職していただきたい」「例の件によって責任を問われている、省としてもかばいきれない」と言い渡され、杉原は覚悟していたのか、抗議ひとつせずに辞職します。杉原が四七歳のときです。外務省のなかでは、杉原がユダヤ人たちから大金を貰ってビザを出したから、金には不自由しないだろう、杉原はスイス銀行に大金を預けているという根も葉もないうわさまでも流されたといいます。

日本の外務省は戦後になってもなお、ユダヤ人にビザを発給して六〇〇〇人の命を助けた杉原を、なぜ首を切って排斥したのでしょうか。一九九二年に、国会の衆議院の予算委員会で、杉原の免官の理由を質問された外務省は、杉原は訓令違反のために免官されたのではなく、彼が職を失ったのは戦後の外務省の人員整理の一環にすぎないと回答しています。一九四七年には、外務省の人間の約三分の一が解雇され、遅れて帰国した杉原はそのなかに入っただけのことであるというのです。杉原はビザ発給の責任を問われて外務省を解雇されたのではなく、外務省の機構、職員の縮小によって依願退職をしたというのが、外務省の公式見解です。しかし、事実は外務省の回答とはまったく違うようです。一九四七年当事、アメリカとソ連の発言力の増す中で、日本にとってソ連との関係がきわめて重要なものになっていました。外務省のなかには英語の得意な者は少なくありませんでしたが、ロシア語を習得している者は数少なく、外務省はソ連関係職員の確保に懸命の努力をしていました。そのためロシア語のできる関係者は、たとえいったん職を失ってもほとんどが再任されていますし、杉原よりも遅れて帰国した者もポストを得ています。しかし、外務省はロシア語に堪能で、ソ連問題に誰よりも精通しており、経験と能力と実績のあった杉原を再雇用することなく切り捨てているのです。

杉原千畝の研究者である渡辺勝正氏の二〇〇六年に出版された著書によりますと、杉原の免官は、外務省の曾野明というキャリア官僚が外務次官に進言したためのようです。曾野は「杉原をクビにしたのは私です」と公言し、「日本国を代表してもいない一役人が、こんな重大な決断をするなどはもっての外であり、絶対、組織として許せない」と言っていたそうです（『杉原千畝の悲劇』一〇頁）。組織の命令に反して行動した者は、それがたとえどれほど正しい判断であり、いかによい結果を生んだとしても決してゆるさないということは、裏を返せば、その組織がどれほど悪い正義にもとる残忍非道なことをやっても、組織の命令に従っているかぎりは、それにたずさわった個人の責任は問われることがないということでしょう。組織の上からの命令だから仕方ないことをやっただけで、たとえそれが悪と知りつつやったことでも、何の責任もないことになります。

外務省の杉原に対する排斥は徹底しています。戦後、杉原の

ビザによって命を助けられたユダヤ人たちは、杉原に感謝を述べるために、彼の消息をたずねて日本の外務省に何度か問い合わせをします。「杉原センポはどこにいるか」と。杉原は、チウネという自分の名前が西欧人には発音しにくいので、外国では「杉原センポ」と呼ばせていたのです。外務省は、ユダヤ人からの問い合わせに対して、「杉原センポ」という人物には該当者がいないと返事をし続けます。当時の外務省に勤務していた人のなかで、杉原の姓をもつ人はわずかに三人しかおらず、リトアニアの領事代理をしていた杉原センポだといえば、外務省に特定できていたことは間違いないでしょう。しかし、ユダヤ人からの問い合わせについて、外務省は該当者がいないと回答し、杉原自身にも何の問い合わせもしませんでした。

杉原が、自分が発給したビザによってユダヤ人たちの命が助かったことを知ったのはビザを発給してから二八年後の一九六八年、杉原が六八歳の時でした。一九六八年八月、イスラエル大使館から突然、杉原のもとに電話がかかってきます。杉原をイスラエル大使館で出迎えたニシュリという参事官は、ぼろぼろになった紙を取り出して見せました。ニシュリは、カナウスの領事館で杉原と交渉をした五人のユダヤ人の一人で、杉原の発給したビザをずっと大事に保管していたのです。助けられたユダヤ人たちは、ビザが発給されてから二八年間、杉原のことをけっして忘れることなく、ついに探し出したのです。

翌一九六九年、杉原はイスラエルに招かれ、宗教大臣より勲章を受けます。その宗教大臣のバルハフティック氏も、カナウスで杉原と交渉した五人のユダヤ人の一人でした。彼らは、そのときになって初めて、ビザが杉原の独断によって発給されたものであること、そのことによって彼が戦後、日本の外務省を追われたことを知ります。それまで彼らは、ビザは日本政府がユダヤ人に対する厚意から発給したものだと考えていたのです。その事実から推察すると、日本の外務省は、杉原のビザ発給の要請を拒絶していた事実を隠し、杉原のことを歴史から消し去ることで、ビザ発給が杉原個人の決断ではなく、日本政府がユダヤ人への友好政策の一環によるものであったと後に主張したかったのだろうと思います。日本は戦争中に悪いことしただけではなく、ユダヤ人難民にビザを発給する人道的な行為もおこなっていたという姿勢をとりたかったのではないでしょうか。一九八五年に杉原にはイスラエル政府から、「諸国民の中の正義の賞」というイスラエルの最高の賞が送られますが、その記念式典にもイスラエルの日本大使館からは誰一人として出席しませんでした。

日本政府や外務省による杉原の徹底的な排斥や無視と呼応するように、杉原のビザ発給を誹謗するような動きが出てきます。たとえば、新ゴーマニズム宣言や戦争論で戦後の歴史教育を批判する、漫画家の小林よしのりたちは、杉原のビザ発給の背後には日本政府・軍部の方針があったからだという説を確かな根拠もなく流しています。本日は、長崎に原子爆弾が投下されてから六四年目の記念日になりますが、小林よしのりたちは、日本人は実はたくさんのユダヤ人を救ったけれども、当のユダヤ人の方は原爆をつくって日本に被害を与えたなどと主張しています。小林たちには日本の戦争犯罪を隠蔽し、日本の政府や軍部にも人権や戦争の大義があったのだとする意図がみえます。

また、一九九八年にはアメリカの大学教授であるヒレル・レ

ビン氏が、『千畝』という本を書き、日本でもその年にすぐに翻訳されて出版されましたが、それは杉原に対する誹謗中傷に満ちたバッシングの本でした。その本のなかでは、外務省はビザの発給を知っていたのだから、英雄になりたくて杉原は虚偽の主張をしているとか、悩む杉原を妻の幸子さんが励ましたというけれども、死人に口なし、何ともわからないとか、残された幸子夫人への個人攻撃も含め、捏造されたインタビューや実証にもとづかない、歴史的事実に反することが書かれています。その本には三〇〇箇所以上の間違いがあるとして、二〇〇二年に幸子さん側が出版差し止めと名誉毀損の裁判を起こして、二〇〇五年に原告側勝訴の和解が成立しています。しかし、実は日本の外務省が、この本の著者のレビン氏を、一九九四年に「先進国招聘プログラム」と称して日本に招いておりまして、レビン氏の著作『千畝』の作成に大きな便宜をはかり、さまざまな優遇措置を行っていたことがその裁判のなかで明らかになっています。映画『シンドラーのリスト』などで杉原に関心が高まっていた時期に、外務省はレビン氏を日本に招いて、杉原バッシングの本を書かせた、少なくとも書く手伝いを積極的にサポートしたといってよいだろうと思います。かつて、外務省で懸命に働いた仲間の人間に対して、外務省が行ってきたことはこのようなことなのです。

杉原千畝は、外務省の仕打ちに対して世間に訴えたりすることなく、ビザ発給のことを他人に誇ったりすることも語ることもほとんどなく、また、日本で彼をたたえるような出版や記念事業が行われることを見ることなく、主に貿易関係の仕事などをしながら一九八六年に亡くなりました。

杉原千畝と隠れキリシタンの信仰

杉原がキリスト教信仰に基づいてビザ発給の決断をしたとしても、しかし、私にとってなおまだ疑問でありましたのは、なぜ、彼がキリスト教徒になったのかということでした。彼はロシア人女性と一度目の結婚したときにロシア正教の洗礼を受けました。しかし、もしも、自分のなかにロシア正教の信仰を受け入れるような素地がなければ、一九二四年当時の日本の男性が、日本の文化のなかにはないような相手の異質の宗教に、ただ形式的にしろ、改宗するということは考えにくいのではないでしょうか。しかも、彼はロシア人の妻と離婚し、キリスト教とは無縁だった日本人の女性と再婚してからも、日本人の妻もロシア正教の洗礼を受け、夫婦で正教の信徒として生涯を送っているのです。杉原はどこで、キリスト教への関心やつながりをもったのでしょうか。杉原自身は、自分のことをあまり語らず、ビザ発給のことを他人にも家族のうちでも語ることがなかったようですが、自分の信仰についてはほとんど何も書き残していないのでその事情がよくわかりません。

しかし、あるとき私は、名古屋の金城学院の理事長をされていた渡邊宣親先生という方が書かれていた言葉に出会って、はっといたしました。渡邊先生は、岐阜県可児市の出身の方でしたが、隠れキリシタンの調査のために、岐阜県八百津町に出かけられたときのことを短いエッセイに書かれていた次の言葉です。

「これは私の推測ですが、この地方（八百津町）も隠れキリシタンの多いところでしたので、杉原千畝とキリスト教（キリシタン）とには、何らかの結びつきがあったのかもしれません」

その指摘に私は驚きました。たしかに、隠れキリシタンの信仰とキリシタンへの弾圧の歴史を杉原千畝と結びつけるならば、杉原のビザ発給の行動がより深く理解できるのではないか。隠れキリシタンの信仰とキリシタン弾圧の歴史の伝承が、何らかのかたちで杉原に伝わっていたのではないか。

名古屋市中区には、東別院と呼ばれる真宗大谷派の大きな寺院があります。その東別院の西方の裏手に、栄国寺という小さなお寺があります。栄国寺の建つ地域は、織田信長が千本の松を寄進したことから「千本松原」と呼ばれるようになり、江戸時代の初期には犯罪人を処刑する刑場として使われていました。その栄国寺には、処刑されたキリシタンの冥福を祈る切支丹塚が残されています。

日本にキリスト教が伝えられたのは一五四九年のことですが、一五六九年にイエズス会の宣教師フロイスが、織田信長に布教の許可を求めて岐阜にやってきています。信長は岐阜城内をみずから案内するなど、フロイスを優遇しました。信長の子の織田信忠がキリスト教の布教をゆるしてから、美濃地方にはキリスト教が急速に広まります。織田信長の領地であった岐阜県、愛知県は当時、九州に次いでキリスト教徒が多く住んでいた地域だったのです。信忠の長子で織田家の後継者となった織田秀信は、一五九五年一六歳で洗礼を受けています。一六三八年頃、美濃国の全村数一三九二のうち二七一の村にキリシタン信者がおり、岐阜県可児市では全村数の三五％にあたる三三の村にキリシタンがいたという記録が残されているそうです。

しかし、一六一四年に徳川家康が発したキリスト教禁教令によって、尾張藩ではキリシタンの検挙と処刑がいくたびも繰り返され、キリシタンへの弾圧は過酷を極めました。とくに一六六一年には、「濃尾くずれ」と呼ばれるキリシタンの大検挙事件が起こります。美濃国可児郡塩村(現在の可児市塩地区)で、数名のキリシタンが発見されて検挙され、これをきっかけに、キリシタンの検挙が濃尾地方の七九の村々に広がり、多数の男女が投獄されました。尾張藩は、そのうち伝道に努めたとされる男女二〇〇余名を一六六五年一二月一九日、千本松原の刑場で処刑しました。尾張藩はその他のキリシタンは放免しようと努めたといわれますが、幕府の了解をえることができず、結局検挙された二〇〇〇余名全員のキリシタンが処刑されました。集団的な虐殺、ホロコーストが行われたわけです。

時の尾張藩二代目藩主徳川光友は、処刑場を別の地に移し、千本松原の刑場跡地に翌一六六六年、清涼庵と号するお寺、現在の栄国寺を建立し、処刑したキリシタンの冥福を祈らせたといいます。現在の栄国寺の本堂前を裏門に向かって行くと右手の奥に、切支丹塚、別名千人塚と呼ばれる三〇坪ほどのごく小さな遺跡が高い木々に囲まれひっそりと守られています。切支丹塚には、供養のための礼拝地蔵がほかに数体あり、当時につくられ文字も判読しがたい供養塔が建っている中で、一九九七年に建てられたばかりの真新しい顕彰碑が目をひきます。カトリックの名古屋教区が、一五九七年に長崎で二十六聖人が殉教

した四〇〇周年の記念を迎えて、名古屋で処刑されたキリシタンの顕彰碑を建てたのです。お寺の中に立てられたカトリックの碑。三〇〇年有余の長きにわたって、栄国寺は処刑されたキリシタンを供養するという仕方で、殉教したキリシタンの信仰を証してきたとはいえないでしょうか。長崎で殉教して二十六聖人と呼ばれる人たちのうち、実に十人が尾張や伊勢などの東海地方出身者でした。二十六聖人中の最年少十二歳のルドビコ茨木も尾張の出身とされています。また、今回、調べて初めて知ったのですが、二十六聖人のなかのこのルドビコ茨木、レオン烏丸、パウロ茨木の三人は、秀吉の朝鮮侵略で秀吉軍にとらえられ、日本に連行されてきた朝鮮人であったとも言われています。韓国の有名な殉教の地、切頭山の聖地には、この三人の記念碑が建てられているそうです。

キリシタンを密告する者には銀五百枚という多額の報奨金も出され、一族相互総監視体制の徹底した弾圧のもとで、尾張美濃地方のキリシタンは壊滅したといわれています。一六六七年に、尾張藩は藩内のキリシタンが絶滅したと幕府に報告しています。

しかし、一九八一年三月、この地方で人々を驚かせた発見がありました。岐阜県可児市に隣接する可児郡の御嵩町でキリシタンの遺物が新たに発見されたのです。御嵩町の道路工事中に、三点の「十字架」を刻印した石の製品が発見されました。これに驚いて、他にもキリシタンの遺物が残っていないかと捜してみたところ、御嵩町の小原村、謡坂村などから続々とさまざまな遺物が発見されました。なかには、古井戸の水神の碑と思われていたものが、実はキリシタン遺跡だとわかります。それまで、「水神」と刻まれていたと思われていた「水」という文字が、汚れをよく落としてみると、実はf字形に変形した十字を中心に、左右から二本の長い曲がった釘のような字が取り囲んでいたものになっていました。さらに驚くことに、この「水神」が祀ってあった古井戸の石垣のなかから、高さ二八センチの十字架を浮かし彫りした石が見つかりました。「キリシタンたちは、弾圧が強くなってきたので、この十字架を井戸の石垣のなかに隠し、井戸には偽の水神を祀り、水汲みをする際に祈っていたのだろう」と言われています。その他にも、神社の拝殿や木の部材のなかにたくみに隠された十字架やマリア像などの遺物が見つかっています。私は御嵩町を訪ねましたが、文化財や資料の収集や調査研究や一般に学習の場を提供する「なかせん道御岳館」という町の施設で、御嵩町で発見されたキリシタン遺物の展示を見ることができます。

また、調べてみるとこの御嵩町には、そうした遺物や遺跡だけではなく、伝承行事のなかにも、キリシタンのものではないかと思われる風習があったことがわかってきました。それは、ある家に伝わっていた「絶やさずの灯明」といわれる行事で、「毎年太陽暦の四月二十日夜から翌二十一日夜まで仏壇に納められていた小さな仏龕（ぶつがん：仏像をおさめる厨子）の中に安置してある観音像と思われる小像を開帳し、灯明を絶やすことなく二日間灯し続ける」という簡単なものだそうですが、「行事を伝承するにあたっては代々姑から嫁へ『四月二十日から二十一日には夜昼仏龕を開帳し、灯明のみ灯せ、線香も読経も一切しなくてよい』と、きつく言い置かれ、嫁はそれをかたく

なに守り続けていたのである」と言われています。このような行事が、その観音像が紛失する昭和三〇年代まで続いていたというのです。もしそれが仏教行事でしたら、灯明、献花、線香の三つ具に読経が必要とされていたと思われるのに、読経も線香もなく、水と花と灯明だけなのです。「春の一昼夜だけの行事であることを思うと、むしろ洗礼の水とキリスト復活の灯火とを賛美する復活徹夜祭の行事を記念して、恵みを願う行事だったのではないか」と推察されています。

人々がこうした発見に驚いたのは、それまで周辺の村、塩村をはじめ数十の村々はキリシタンがいたとしてよく知られていたのですが、御嵩町の村々のなかでは一九八一年のキリシタン遺物の発見まで、キリシタンについての記録も伝承も一切なく、御嵩町にはキリシタンはいなかったと考えられていたからです。それまでは、キリシタンがいなかったと思われていた御嵩町の村々でもキリシタンがいたことが一九八一年になってはじめて確認されたのです。濃尾くずれの事件の発端となった塩村から、御嵩町までは地図の上で見ると直線距離にすれば一〇キロほどしか離れていません。そして、御嵩町の役場と隣接する八百津町の役場との距離は直線では五キロくらい奥まっただけの近さです。キリシタンのいた塩村や周辺の村々から、より山の奥へ木曽川に沿ってより奥地へと逃れたキリシタンがいたのではないか、御嵩町や杉原千畝が生まれた八百津町にも、検挙を逃れたキリシタンたちがひそかにかくまわれたか、みずから隠れキリシタンとして生き延びた人たちの末裔がいたのではないかと思われます。ちなみに、明治新政府がまだキリシタン禁教を解いていない明治三年（一八七〇年）、全国に先駆けて当時は天主公教会と呼ばれたカトリック教会が岐阜市に建てられ、それは岐阜県安八郡三城村の農民庄右衛門らの尽力によるものとされていて、岐阜県に幕末でもかなりの隠れキリシタンがいたものと推察されるそうです。

昨年の北白川教会の親睦修養会でも、杉野榮先生から京都のキリシタン遺跡やキリシタンの信仰について学びましたが、隠れキリシタンたちは過酷な弾圧のなかでいったいどのようにして自分たちの信仰を守ってきたのでしょうか。隠れキリシタンを支える大きな働きを担ったものとして、「慈悲の組」と呼ばれた信徒使徒職の組織があったそうです。キリシタンの研究をされている三俣俊二氏の講演記録によりますと、その「慈悲の組」と呼ばれた組織は、構成員によって選出された慈悲役によって運営され、その目的は「マタイ二五章などからまとめられたキリスト者の根本的実践事項を遂行するためのもので」ありました。そして、慈悲の組がかかわるキリスト者の根本的実践事項は、「最後の審判の折にはその実践の有無を各自に厳しく問われるべきものでありますから、全信者にとっての根本的義務である」と考えられていたと述べられています。キリシタンの根本的義務にかかわるものとして、ドチリナ・キリシタンと呼ばれるキリスト教の基本的教義を短くまとめた文書があります。ドチリナというのは英語でいうドクトリンのことですから、ドチリナ・キリシタンとは文字通り、キリスト教の教義のことをさし、現在のカトリック教会では「公教要理」と呼ばれるものにあたります。ドチリナ・キリシタンはキリシタンの時代に最も広く読まれた教理書で、一六〇〇年に長崎で出版された版のものが、岩波文庫にも入っております。キリシタンにとって、そ

のドチリナ・キリシタンに記された「慈悲の所作」と呼ばれる慈悲の行為の教えが、キリシタンが実践すべき義務とされ、キリシタンたちはそれを暗記して覚え、オラショといわれる祈りのなかで唱えたのだといいます。

「慈悲の所作」は一四の短い教えからなり、身体にかかる七つの行為と、精神にかかわる七つの行為が記されています。

「色身（身体）にあたる七つの事。
一つには、飢えたる者に食を与ゆる事。
二つには、渇したる者に飲み物を与ゆる事。
三つには、肌を隠しかぬる者に衣るいを与ゆる事。
四つには、病人と牢者（牢獄にある者）を労わり見舞う事。
五つには、行脚の者に宿を貸す事。
六つには、囚われ人の身をうくる事。
七つには、人の死骸を収むる事これなり。
　スピリツ（精神）にあたる七つの事。
一つには、人によき意見を加ゆる事。
二つには、無知なる者に道を教ゆる事。
三つには、悲しみある者をなだむる事。
四つには、とがある人をいさむる事。
五つには、恥辱をゆるす事。
六つには、ポロシモ（隣人）のあやまり、不足を堪忍する事。
七つには、生きたる人、死にたる人と、また我に仇をなす者のために、デウスを頼み奉る事これなり。」

これら一四の慈悲の所作とよばれる教えを、隠れキリシタンたちは、オラショと呼ばれた祈り、祈祷のなかで繰り返し唱えて、伝承していたのです。飢え渇き着るものもなく、住むところもなく、病気にかかったり、囚われたりしたときに、手を差し伸べられることの有難さを、迫害を受けていたキリシタンたちが実は誰よりもよく身をもって知っていたのではないかと思います。

　こうしたドチリナ・キリシタンに示された「慈悲の所作」を根本とする宗教心といいますか、飢え渇き捕えられた弱い人たちのことを思うメンタリティが、杉原が生まれた一九〇〇年頃の八百津町の人々の生活のなかに、杉原の周囲には息づいていたのではないかと私には思えてきました。ユダヤ人の難民にビザの発給を決断するときに、「私を頼ってくる人々を見捨てるわけにはいかない。でなければ私は神に背く」と語った杉原の強い言葉と、このドチリナ・キリシタンに示されたキリシタンの根本的義務、隠れキリシタンたちのオラショの祈りと重ね合わせるときに、杉原の語った言葉を支える力の源をよりはっきりと私たちは感じとることができるのではないでしょうか。

　また、隠れキリシタンからの何らかの影響を考えるならば、杉原がロシア正教に改宗して、日本ではとくに信者が少ない正教の信仰を守り、その後もずっとカトリックやプロテスタントの教会にかわることがなかったのか、よく理解できるように思えてきます。杉原が、ロシア正教の洗礼を受けた一九二四年は、一九一七年に起きたロシア革命で成立した共産党政権によって、ロシア教会への大弾圧が進行していた時代です。一九二一年から一九二三年の三年間だけでも、主教二八人、司祭二六九一人、修道士一九六二人、修道女三四四七人、その他

信徒多数が処刑されたとする文献があります。一九三三年ころには教会や修道院の勢力は、革命前の約二割までに激減したともいわれています。大半の教会が破壊され、略奪を受け、強制閉鎖されました。数多くの修道院が破壊され、修道士、修道女、信徒が殺害され強制収容所送りにされることが、スターリン時代もその後の共産党政権下でも繰り返されました。無神論をかかげる共産党政権下で、一貫してロシア正教への徹底した弾圧は続けられたのです。もし、杉原に日本の抑圧を耐え抜いた隠れキリシタンの伝承や信仰の水脈が流れていたと考えれば、彼がロシア正教に親近性を覚え、その信仰に立ち続けたことがよりよく理解できるように思えてなりません。

しかしながら、私は杉原とおそらく八百津町にもいたと推察される隠れキリシタンとを直接結びつける確たる証拠や文献をもっておりません。また、私は杉原が隠れキリシタンの末裔であったということを主張したいわけではありません。私が申し上げたいのはただ、杉原の決断や行動を支えた力の源と、過酷な弾圧のなかで生きたキリシタンたちを支えた力の源とは、どちらも同じところから、同じ源泉から湧き出しているのではないかということです。

少しお話が脱線するのですが、最近、必要がありまして読んだプルタルコスという一世紀に生きた哲学者で伝記作家の著作のなかに私の関心を引いた文章がありました。プルタルコスは、英語ではプルタークといいますが、『英雄伝（対比列伝）』の作者として有名です。

プルタルコスは、次のような問いをたてています。

「人間世界のもろもろのことの原因やそもそもの由来を説明する際に、およそ神、あるいは神にかかわることを排除すべきなのか、それともほかに何か、神が人間を助け、人間と行動を共にする道があるのか。」

この問いかけに対して、プルタルコスは次のように答えています。

「（神は）心の内の行動にかかわる部分や意思決定にかかわる部分に対して、動機や想像力や構想力を目覚めさせ、あるいは反対に、脇へそらせたり止めたりするというようにはたらきかけるのである」（『コリオラヌス伝』三二章）

つまり、私が申し上げたいのは、杉原の決断において、彼の動機や想像力や構想力を目覚めさせた神は、隠れキリシタンや迫害を耐えたロシアのキリスト信者を堅く支えた神と一つの同じ神であり、神が杉原の決断と行為を堅く支えられたということなのです。

しかし、考えてみれば、なぜ江戸幕府はキリシタンを迫害したのでしょうか。ある歴史家が言うように、キリシタンたちが宣教師やカトリック教会の背後にある外国政府と密通し共謀して幕府転覆を企てていると考えたからでしょうか。しかし、鎖国政策を廃止し、西洋文明を導入するのに躍起となった明治新

政府もキリスト教禁教令を発布したのです。明治政府は、三百年の迫害の中でも密かに信仰を貫き通して再び世人の前に現れいでた長崎浦上のキリシタンを捕らえ、三千名以上の浦上のキリシタンを全国各地へと流配しました。ずっと以前に、井川満さんが北白川教会の礼拝で語ってくださった「浦上四番崩れ」と呼ばれるキリシタン弾圧事件です。浦上のキリシタンたちは、この全国各地への流配を「旅」と呼んだのだとうかがいました。外国政府の再三の強い抗議によってキリシタン禁制の高札が撤去され帰郷が許される一八七三年までに、名古屋にも三七五名が流されて来ています。名古屋の中心街の栄には浦上キリシタンの牢獄があったそうで、長崎への帰郷がかなわなかった八二名もの人が名古屋で命を落とし、昭和区八事の興正寺に葬られました。なぜ、外国に門戸を開いた明治政府もキリスト教を禁制にして迫害と弾圧を続けたのでしょうか。キリシタンたちは、小さなマリア像を持ち、十字架を刻んだ身の回り品を大切にし、他人に対して危害を加えない静かな信仰者の群であったのに、権力者たちはなぜにあれほど過酷にとり扱ったのでしょうか。江戸幕府や明治政府が恐れたのは、キリシタンがこの社会の慣行やしきたりよりも、高い価値を信仰に認めていたからではないかと思います。

しかしそれだけであれば、この世や社会の無常を説き「超自然的なもの」を尊ぶ他の宗教もまたそうだと言えるでしょう。権力者たちが恐れたのは、キリシタンが皆もっているように見える「自由」ではなかったでしょうか。「お上の命令」や「天皇の命令」によっても支配しつくすことのできない精神の「自由」を、一人ひとりのキリシタンがもっているように思えたからではないか。神様こそ、この宇宙と世界と命とを支配されているのであるから、「お上の命令」といえども、神様の御意志よりも高くあるはずがない。キリシタンがお上の命令に従うのは、その命令が、神様が自分に求められること、つまり、聖霊の力により頼み「神を愛し、隣人を愛する」信仰に反しないと判断される限りのことだったと言えるかもしれません。邪教を信じてはならないというお上からの命にかかわる禁止命令よりも、愛を選ぶことのできる自由をキリシタンたちはもっていた。より大きなより怖い権威に従うということではなく、とうてい赦すことのできない罪びとの自分を赦し、ふたたび繋がりを求める神の愛のひろさ、豊かさ、かけがえのなさにキリシタンたちがとらえられたからだろうと私は思います。だから、天皇であれ、お上の命令であれ、上司の命令といえども絶対ではあらず、その命令に従うか否かには、たえず愛に根ざした自由が存在します。「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。」（マタイ一〇・二八）。「信仰・信教の自由」とは、そのような「自由」が「信仰」の根幹を形成している宗教の存在があって初めて成立した概念のように私には思えます。

日本の外務省が戦後になって杉原をクビにし、杉原を徹底的に無視し、無視できなくなると誹謗中傷を行い、死後までも執拗に杉原をバッシングし続けたのかも、なぜかわかるような気がしてきました。杉原をクビにした外務省のエリート官僚は、外務省の訓令に違反してビザを発給した杉原を「組織として絶対にゆるせない」と発言しておりました。外務省の高官にも、自由がないのです。だから、彼らは自由をもって自分の決断をくだした杉原を許せないし、理解できないし、自分たちの存

在を根底から脅かすものとして、ある意味では杉原のことが怖かったのかもしれません。

さて、本日、私に示された聖書は、詩篇の四一篇です。詩篇四一篇は三つの部分に分けられ、一節から四節までの神への感謝と、五節から一三節までの神への訴え、そして、この四一篇が詩篇第一巻の最後の詩であるので、第一巻を締めくくる賛美の言葉が最後の一四節につけられています。

二節「いかに幸いなことでしょう／弱いものに思いやりのある人は。災いのふりかかるとき／主はその人を逃れさせてくださいます。」「弱いもの」と訳された言葉は、「弱い」とか「貧しい」とかをあらわす形容詞からなり、口語訳聖書では、「貧しい者」と訳されていて、ギリシア語の七十人訳聖書では、「物乞い」と「貧しい者」とを表す二つのギリシア語の単語が使われています。「幸いなるかな、弱く貧しい人に心を配る人は、なぜなら、主がその人が災いに襲われたときに逃れさせてくださるからだ。」実は、主なる神こそが、災いに襲われ、思いがけない大きな病にかかり、弱くされ貧しくされた人をかえりみられる方であるというのがこの感謝と賛美の根底にはあるのだと思います。この二節から四節を読みましたときに、私にはユダヤ人にビザを発給した杉原のことがダブってきました。

五節から一〇節は、わざわいに襲われたその人が苦しみを訴える祈りですが、五節でその人はまず自分の罪を告白しています。五節に「主よ、憐れんでください。あなたに罪を犯したわたしを癒してください」とありますが、ヘブル語原文にもギリシア語の七十人訳聖書にも、「私の魂を癒してください」と「魂」という言葉が入っておりまして、私は大切な言葉だと思うのですが、日本語訳にはなぜか訳出されていません。七十人訳聖書から細かく訳しますと、五節は次のように訳せます。「「私のことです」と私は言いました、「主よ、私をあわれんでください。私の魂を癒してください、あなたに私は罪を犯したからです」」。

それから、六節から一〇節まで、詩人は、敵が自分をどのように苦しめるかを神に訴えます。一〇節「わたしの信頼していた仲間／わたしのパンを食べる者が／威張ってわたしを足げにします。」この一〇節は、ヨハネ伝一三章一八節で、イエスがユダの裏切りについて予言したときに引用されています。「「私のパンを食べている者が、わたしに逆らった」という聖書の言葉は実現しなければならない」とイエスは言われたとヨハネ伝は書き記しています。イエスが、ユダの裏切りの直前に、この詩篇のこの言葉を引用されたことの意味は、続く一一節以降で明らかになるように思います。

一一節からは、詩人の神への切なる願いです。一一節一二節「主よ、どうかわたしを憐れみ／再びわたしを起き上がらせてください。そうしてくだされば／彼らを見返すことができます。そしてわたしは知るでしょう／わたしはあなたの御旨にかなうのだと／敵がわたしに対して勝ち誇ることはないと。」この詩の作者は、大きな病にかかるような逆境に陥り、敵ばかりか、かつての親しい仲間たちも自分を裏切り、自分を苦しめる敵となったときにも、神が彼らに対して復讐をしてくださるようにとは祈ってはいません。「見返す」と訳された言葉には、「シャーラム」というヘブル語が使われておりまして、私たちには「シャローム」という言葉でなじんでいると思いますが、それは「平

和」をも意味する言葉です。興味深いことに、一〇節の「わたしの信頼していた仲間」にも原文では「平和」という言葉が使われていまして、「私の平和の人」というのが直訳になりますから、一〇節の「わたしの信頼していた仲間」は、「私に「シャローム」と言って平和の挨拶を交わしていた人」というのがもともとの意味だろうと思います。ですから、一一節一二節は、かつてはシャローム（平和）と挨拶を交わして親しくしていた人が、きびすを返して自分を足蹴にするようになったけれども、主が私を再び起き上がらせてくだされば、その人にもシャロームを返すことができるという意味にとることもできるかもしれません。つまり、ここで大切なことは、苦しみのなかで詩の作者が神に願うことが、敵となった相手への復讐ではなくて、神が自分を再び御前に立たせてくださることだということです。神の御前によしとされるならば、それだけでもう十分であり、敵が自分に対して勝ち誇ることなど、どれほどのことでしょうか。主イエスも十字架において祈られたのは、自分を十字架につけた者たちへの神の復讐ではありません。十字架につけられたイエスを、裏切りと嘲りと呪いを引き受けたその絶望的な死から、神がふたたび起き上がらせてくださいました。そのことによって、地上でどのような苦しみや裏切りや捨てられる経験していても神様が見守っていてくださるという希望を抱くことができます。そのためにも「私のパンを食べている者が、わたしに逆らった、私を足蹴にする」という詩篇の言葉は、成就しなければならなかったのでしょう。

一三節「どうか、無垢なわたしを支え／とこしえに、御前に立たせてください。」口語訳聖書では、「あなたはわたしの全きによって、わたしをささえ、とこしえにみ前に置かれます。」となっていまして、「無垢なわたし」というよりも、「私の全き」の方が原文に忠実な訳のようです。しかし、「私の全き」「私の完全さ」によって神が支えるとは、どういうことでしょうか。つい先ほど見ましたように、五節で詩人は自分が神に罪を犯したことを告白しています。ですので、一三節の私の完全さとは、自分が生きてきた完全さのことではありません。罪を犯した自分を神がゆるし、神が罪を犯した魂を癒されたことによって、神が与えられた完全さのことをさしているのでしょう。私は神に罪を犯したが、神があわれみ、私の魂を癒し、罪のある私を完全なもの、全きものとされること、そこに私たちに与えられた神の恵みがあるのだと思います。敵や自分を裏切った者に復讐することを願うのではなく、神が罪びとである自分のような人間を堅く支えてくださることを祈る。そうすれば、神が御前に再び立たせてくださる。一三節にある「支える」と訳されたヘブル語の「ターマク」という言葉は、神の保護、防衛をあらわす用語で、「堅く守る、強く支える」と言った強固なとか、不動なとか、セキュリティや保護・保障をイメージする言葉だそうです。

杉原は、日本敗戦後、外務省にクビを切られ、ユダヤ人から大金もらってビザを出したとうわさされ、外交官の道を断たれてずいぶんと悔しい思いをしただろうと思います。彼のクビを切った人間や、戦前、戦中に情報収集や状況判断を誤り、日本を無謀で残忍な戦争に追い込んだ官僚たちが、戦後もどんどん出世をし、かつて仕事を競い合った同僚たちが外国の大使になったりしていきます。ロシア語にたけ、ソ連通であった彼が、

これから本格的な対ソ外交がはじまる時期を迎えたときに、外交官の職を失ったことは彼には無念だったでしょうし、また日本の外交にとっても大きな損失だったとも言われています。しかし、杉原は、そのような悔しい思いをほとんど語っていません。その意味でも杉原は立派な人物だと思います。

しかし、杉原はただ偉い人だったのではなく、その偉い杉原が命や職をかけても従った、はるかに偉い方が生きておられること、その神が杉原の魂に働きかけ、神の御心を聞きわけた杉原を、神が堅く支えられた。そのような神が生きて働いておられることを、杉原の信仰と生涯を通して私たちは学び知ることができると思います。神に罪を犯し続ける私たちをも神がゆるし、弱い罪ある者をも完全な者として、再び御前に立たせて堅く支えてくださる恵みをなんと感謝したらよいでしょうか。

（二〇〇九年八月九日）

浦上四番崩れに耐えた人たちを支えたもの

津和野「乙女峠まつり」に参加して

林　貞子

あらまし

一　はじめに
二　日本のキリシタンの歴史の中で
三　浦上四番崩れとは
四　浦上四番崩れ流配先の一つである津和野の場合
五　浦上四番崩れ流配者の釈放（外国からの忠告・その後の暮らし）
六　弾圧に耐えた人々を支えたもの

一　はじめに

明治に入ってから、長崎の浦上で三四一四人にも及ぶキリシタンの村人たちが、着の身着のままで船に乗せられて、浦上から、西日本の各地　鹿児島、萩、広島、福山、姫路、和歌山、大和郡山、金沢、尾張名古屋、そして津和野など　二二箇所へと連れてゆかれ、それぞれの土地で、信仰を捨てると言わない者に対して大変な拷問や厳しい弾圧が行われました。浦上四番崩れと呼ばれる出来事です。それぞれの土地での弾圧の歴史があると思われますが、この度、流配先の一つである島根県の津和野へ行きました。

津和野へは一四二人が連れてゆかれ、信仰を捨てないために、まことに残虐な拷問を受けて、三六（または三九）人が亡くな

りました。
津和野ではこれらの方々を偲んで心に刻まんと、毎年五月三日にカトリック教会のミサが行われていると聞きましたので、それに参列させていただきました。そのことによって、この地でどのようなことが行われ、流刑された人たちがどのようであったかの一端を知ることが出来ました。私は全く知らずにいたことでありました。
「乙女峠まつり」というこの行事は、殉教の跡地にはふさわしくない名称のようにも思われますが、幽閉されたところは昔から乙女峠といわれている山の中でした。津和野カトリック教会に集まり、まずミサを捧げて出発します。一・五キロ位だったでしょうか山道を行列して、祈りの言葉を繰り返し、聖歌を歌いながら乙女峠へ向かいました。一五〇〇人くらいの参加だったでしょうか。全国各地からこのために集まった人たちで、流配者たちが歩んだ道、つまり上陸した広島から津和野までを実際に徒歩で来た一団もあったようでした。
このようにして乙女峠の、牢として当てられていました光淋寺というお寺跡までの山道を歩き、殉教の場所に立ち、改めて今まで知らずに過していた歴史を身にしみて思いました。
それは、いつおこった出来事かと申しますと、幕末から明治となった年、つまり明治一年には一次の流配が、二年後に二次の村人総流配がおこり、それは明治六年まで続きました。
浦上四番崩れの浦上というのは、一九四五年（昭和二〇年）長崎に原子爆弾が投下されましたがまさにその爆心地のあたりです。
原爆投下は浦上四番崩れの七五年後でありますから、子供のころに親と一緒に流配され、帰還してやがて年老いて原爆にあったという人も一〇人くらいおられたということです。
浦上四番崩れで西日本のあちこちに流されて、大変な弾圧を受け、殉教していった出来事が、昔々のことではなくて、私の年代ですと、曾祖父か曾曾祖父の時代のことで、現在からさほど遠いことではないということを思い、一層身につまされるものがありました。
流配されていたさ中、これらのことは外国に伝わり、宗教弾圧として、また人権問題として非難を受け、日本は野蛮な国との民衆からの指摘もあり、アメリカとの対等な交渉が出来ないまでになりました。これがきっかけとなって明治政府は、二五〇年にわったったキリシタン禁教令を取り下げ、人通りの多い場所に立てられていた高札を撤去するに至りました。そういった意味でも、大きな歴史的な意味をもつ出来事でもありました。

二　日本のキリシタンの歴史の中で浦上四番崩れはいつ起こったのか。

①キリスト教の伝来　広まり

今から四六〇年前の一五四九年にザビエルによってキリスト教が伝えられ、三八年間くらいは織田信長によって優遇されて、宣教師たちも来日し、セミナリオも開設されたりしてキリスト教は、多くの人たちの心を捉え、浸透していった時代がありました。全く新しいこの宗教は驚きをもって迎えられ、その価値観は人の心を変えていったと思われます。多くの人がこの教えにひかれ、キリシタン大名も多く生まれた時代がありました。

② 追放（弾圧）の時代

それは長くは続かないで、秀吉によって伴天連追放令発布、そして、京都を拠点として二六人のキリシタンたちが捕らえられ、一条戻り橋で耳そがれ、見せしめにされながら長崎の西坂まで八〇〇キロの道のりを曳きゆかれて、浜辺で十字架につけられて殺されるという事件が起きました。元和の大殉教の一つであります京都七条河原で五二人が木にくくりつけられて火あぶりにされました。京都もそれだけに留まりませんでしたし、全国各地で弾圧の嵐が吹き荒れました。それは徳川幕府にも引き継がれました。

キリシタン禁教令が出されて、教会が破壊され、宣教師が追放され、踏み絵によりあるいは密告したものには金子を与えるという方法で沢山のキリシタンたちが摘発され、捕らえられ、拷問を受け、惨殺されるという時代が明治に至るまでの、二五〇年も続きました。

それはキリシタン追放、弾圧、殉教の時代である同時に、キリシタン潜伏の時代でもありました。

見つからないように隠れて隠れて命がけで信仰を守ってきました。観音像に見立てたマリア観音、やむを得ずお経を唱えますが悔いとお詫びの気持ちで祈る　お経消しの壺　見た目には普通の鏡ですが、陽に照らしたときに、十字架のキリストが浮かび出るように細工されている魔鏡、十字架に見立てた糸巻き（使者の胸に十字架の代わりに置いたということです）など発掘されて今に残る庶民の品々にも、厳しさとその中で命がけで信仰を守り通した一端を察することが出来るのです。

二五〇年間といえば何代になるでしょうか、長い時代にわたって、海を渡ってきた宣教師に、あるいは日本人で伝道者になった人たちに教えられた信仰を、何代にもわたってひたすら守り続けてきた多くの人たちがあったのです。隠れキリシタンと言われています。教会もなく、パードレ（神父）もいない、そして大変なキリシタン弾圧の中で、浦上のキリシタンたちは「三つの伝承」というものが、信仰のよりどころ、弾圧に耐えた先の希望となっていました。その三つというのは

一　七代経ったらパードレ（神父）様がローマから船でやってくる。

二　そのパードレー（神父）様は独身である。

三　サンタ・マリアの御像を持ってやってくる。

というものでした。この伝承されていることが完結される時には、隠れてではなく恐れることなく、心おきなくミサにあずかり、祈りを捧げることが出来るようになると、子から孫へ信仰とともに途切れることなく伝えられていました。

③ 信徒発見（一八六五年）

鎖国中の日本でしたが、浦賀にペリーの黒船が来航し、外国に対して門戸を閉ざしてばかりいられない時代になってきます。そして、日本は欧米と修好通商条約を結び、横浜、長崎、函館を外国に開港することになります。そのような中、キリシタンを探し出すための踏み絵もしておれなくなったのでしょうか、長崎奉行はこれを廃止をいたします。限られた地域ながら外国人が入ってくるようになりましたので、外国人居留地区に教会堂を立てることを許可せざるを得なくなりました。おそらくは居留している外国人のためのものだったと思います。

プチジャン神父が来日して、大浦天主堂が建ちました。それは、フランス寺と呼ばれて日本人は立入禁止となっていましたが、工事を見に行った浦上キリシタンは、独身のパードレー（神父）様が来ているということと共に、フランス寺にサンタ・マリアの御像があるということを聞き込みました。

フランス寺ができた一八六五年ごろ、浦上には四〇〇〇人の隠れキリシタンたちがいたということです。その中から少数のものが代表として訪れて、大浦天主堂に入り、プチジャン神父に「サンタ・マリアの御像はどこ?ここにおります私たちは、皆、あなた様と同じ心でございます」と申しました。この言葉は、プチジャン神父を驚かせ、キリシタン発見として、キリスト教の歴史の中で、大きな出来事でありました。徳川二五〇年以上にわたる厳しい迫害の中にあってなりをひそめ、消え入ったかと思われていた中で、彼らの先祖たちは信仰を守り持ち続け、伝え続けていたことを世界が驚嘆して受け留めたことでした。キリシタンを捜し求めても一向にいる気配がないと思っていたプチジャン神父の驚きと喜びもさることながら、隠れて信仰を守り続けていたキリシタンたちの喜びはいかほどのものであったことでしょう。

信者は続々サンタ・マリアの御像がある建立なったばかりの大浦天主堂に集まって、夜となく昼となく罪の告白をし、罪の許しを請い、安心して帰りました。しかしまだ禁教令がとかれていたわけではありません。役人が見張るようになりました。新しい迫害がおこるかもしれないと思われました。なぜなら時代は明治維新の前夜とも言うべき時でした。徳川幕府の勢力がすっかり落ちていて、幕府を倒そうとする西日本の諸藩は日本の開国にも反対していましたので、外国人を追い払えと叫んでいるときでもありました。長崎で、神父が目立ち、フランス寺へ参る人が増え檀家になっていくことは、幕府を倒す口実になりかねません。それに、幕府が決めている禁教令が、百姓どもから破られるのは、幕府のこけんにも関わることでしたから、たとえ大迫害になっても今、目前に現れたキリシタンたちを押さえ込まなくてはならないこととして睨んでいました。

④　監視の目をのがれつつのミサと布教活動

神父は、そうなってはいけないことを配慮して、自分のほうから信者たちが潜んでいる村々島々へ出掛けたそうです。フランス人であることは目立ちますから、黒く染めた棕櫚で作ったかつらをかぶり、百姓のような野良着を着て、夜の闇に潜んでまわられたということです。村では百姓家の納屋を聖堂にして神父を迎え、ミサを捧げました。また夜には監視の目を逃れて、天主堂の屋根裏部屋に若者が集まります。プチジャン神父は彼らにキリスト教の教義を詳しく教え、特訓をして伝道者として村々へ返したということです。

伝えるほうにも受けるほうにも命がけであるこの熱心さと伝道が、次なる迫害にそなえるものとなったのではないかと思われます。じっとなりをひそめて、消え入ったかに見えていたキリスト教でありましたが、深く埋もれていた火種が、燃え始めて、激しい火となっていったように思われます。

⑤　新たな弾圧

長い間、弾圧に耐えて潜んでいた信徒たちが、長く待ったパー

ドレーを迎え、話を聞き教えを受けることが出来る、ミサにも行くことが出来る、サンタ・マリアの像を目の当たりに見ることが出来る、そういった待ちに待った時代になったかに見えたのですが、そうではなく再び弾圧が始まりました。

喜びは長く続かないで、三四〇〇人が、着の身着のままで船に乗せられて、全く見知らぬ土地へ島流しにされる刑がおこります。これが浦上四番崩れといわれる弾圧です。

⑥　キリシタン禁教令の解除

時代はすでに明治になっていましたから、外国人の出入りも多くなって日本での出来事は外国にも知られるようになっていました。浦上四番崩れの出来事は、宗教弾圧として、また人権問題として外国から非難を受けました。アメリカとの対等な交渉が出来ないまでになりました。これがきっかけとなって明治政府は、キリシタン禁教令を取り下げざるを得なくなり、全国に立てられていました高札も撤去するに至りました。

そういった意味でも、大きな歴史的な意味をもつ出来事でもありました。それだけに、流配となった浦上の信徒たちがどのような迫害を受けたかということは、書き留められたもの、あるいは話を聞いたもの、写真も残っていますから、検証することが出来ます。いうなればそれくらい、近い時代までキリシタン弾圧は続いていたということです。なぜ、ここにいたって浦上四番崩れ　という次なる大弾圧が起こることになったのでしょうか。

三　長崎キリシタンの受難　浦上四番崩れ　について

①発端となった葬儀事件

事件のきっかけとなったのは、葬儀の問題でした。浦上の信者たちは、「わたくしどもは、昔からの信仰をまもってきた家でありますので、これからは、葬儀などいっさいキリスト教によって行いますから、さようご承知下さい。」という意味の口述書を庄屋に出しました。

幕府の重要政策として、村人はそれぞれ檀那寺と言われたどこかの寺に属することが決められていましたが、それを否定したわけです。庄屋は長崎代官にお伺いを立てました。長崎代官は、自分だけで判断が出来ずに、京都まで行って、幕府のお伺いを立てました。倒幕を考えている諸藩の侍たちは、村の百姓どもが日本の寺に属さずにフランス寺へ参り、フランス人から教えを受けていることが許せないとして、自分たちで信者を皆殺しにすると騒ぎ出しました。長崎奉行の一人は、幕府からの返事を待ちきれなくなり独断で、浦上のキリシタンの主だった者の召し取りを部下に命じました。このように、村人が、葬儀はキリスト教によって行いますのでさようご了承下さいといったこと、つまり信仰の自由を求めたことが発端となりました。「キリシタンを捨てます、改宗します、」といえば拷問や弾圧は受けなくてすんだのですが、絶対にそこは譲らなかった、譲れなかったことが、浦上四番崩れといわれる、大弾圧を招くことになりました。浦上キリシタンは、この流配のことを「旅」と呼んだそうです。苦難の旅が始まろうとしていました。

② 旅　と呼ばれた　浦上四番崩れ（第一次と　総流配の第二次）の様子

第一次に　中心的な人たち一一四人が浜辺に連れ出されて、備後の福山、長門の萩、石見の津和野へと三そうの船に乗せられて流配となりました。どこへ連れられていったかも知らされぬまま残った村人たちは、やがて自分たちも皆、捕らえられることは覚悟して、熱心に天主堂へ参り、教理を学び、殉教を覚悟で励まし合い祈っていたということです。

明治になって新政府は神道を，国教とする方針を表明し、徳川幕府のキリシタン禁制という政策を引き継ぎました。そして浦上キリシタンを西日本各地に分散して総流配にするというきびしい処分を御前会議で決めました。これに対しては、日本に来ていた諸外国の領事らは、余りに惨い宗教弾圧だと中止を申し入れました。たまたま長崎に来ていた英国の公使たちが、長崎県知事にいろいろ掛け合って、こんな乱暴ことをしていたら、日本は宗教の自由を許さない野蛮な国だと思われるし、評判が悪くなるからその命令は取り消すがよいとしきりに進言したのですが、お上の決定だから県知事としてはいかんともしがたいといって突っぱね、第二次の総流配は行われてしまいました。

第二次の流刑が行われたのは、一次の二年後　一八七〇年（明治三年）一月で、村民全部が港に停泊して、黒い煙を吐いている船に積み込まれるのですが、その時の様子は次のようであったそうです。

「幼子は誰かの背に負われ、歩けない老人はもっこに入れて担ぎ、家の中のものは何もかもそっくりそのまま置いて、召し捕らえられていきました。珍しく雪が降り続いていました。その中を、家族離れまいと親も子もかたく手を握り合い、みな頭には洗礼のときにかぶった白い布をかぶり、声を合わせてロザリオの祈りを唱え、兵隊に囲まれて港へ下っていきました。船に乗せられてどこへつれていかれるか知らないけれども、まもなく殉教の栄光を受けると思えば、最後まで信仰を捨てずにおりたいものと、今は一心に聖マリアに臨終の助けを祈るのでした。」

三〇〇〇人あまりの信者が、全く直に、役人の言うとおりに動いて祈りを唱えるほかは何も言わない、ほんとうに柔和でキリストのお供をしているようでありましたので、かねてキリシタン退治を叫んでいた人たちも、心を打たれ涙を流して見送ったそうです。

このようにして、二回にわたって浦上キリシタンたちの流配が行われました。三三九四人が　金沢、尾張名古屋、和歌山、広島、岡山、徳島、高松、松山、鳥取、姫路、郡山、伊賀上野，等々二二ヶ所に何も持たず、着の身着のままで船に乗せられ、それぞれの近くの港で下ろされて、村を、平地を通り山を越えてそれぞれの土地へ連れて行かれました。一八七三年（明治六年）の帰還までに、六一三人の殉教者を出しました。それは流配者の五人に一人になります。

四　浦上四番崩れ　流刑先の一つである　津和野　の場合について

①　津和野の特徴

留配先の土地でキリシタンたちがどのようであったか、それぞれの土地での歴史がありました。

弾圧の歴史は、為政者のよって消したい歴史でもあったわけで、きちっとは残されていないのですが、津和野へ連れて行かれた人たちのことは、拷問を受けた人の中で、浦上キリシタンの中心人物であった高木仙右衛門、守山甚三郎たちが、一日一枚支給されるちり紙に、竹の棒を削ってペンにして、毎日の出来事を忠実に書き記していました。また六年して、キリシタン禁教令が解除されて浦上へ帰ってきてから、「覚書」として書いたものが残っていて、弾圧の様を知ることが出来るのです。生きて帰った人たちの記憶をたどる証言も沢山にあったと思われます。

津和野へ流配となったのは、一五三人でそのうち幽閉されて、寒さと飢えによる衰弱、三尺牢に閉じ込める、氷の池におとして水責め、裸で縁にさらして叩き続けるなどの拷問を経て三八人が亡くなっています。これらの人々の名前（多くは洗礼名）はもとより死亡の日付や当時の年齢もほぼ正確にわかり、石碑に刻まれています。

津和野には浦上の信徒の指導的であった人たちが送られ預けられました。それは、この地が、神道研究が盛んで、亀井という津和野藩主が神道に変えさせることに自信を持っていたことがあり、キリシタンの信徒を改心させる責任を負わせました。長崎の浦上から船で広島に着き、そこからは山陰道へ出て石見国今の島根県の津和野に連れられました。更に山を登った処にある光淋寺に留め置かれました。何日かかったことでしょう。これだけでも、老人や子供たちには特に厳しいものであったことが察せられます。毎日寺のお坊さんが来て説教をします。役人たちは、高が知れた百姓たちゆえじっくり聞かせたらまもなく改心するだろうと甘く見ていたのですが、いざ転宗を強いられると誰一人それに従うものはありませんでした。お坊さんがあきらめると次は、神主さんが説得にかかりましたが駄目でした。キリシタンの信仰は厚くて、あの手この手での話は聞くけれども、信仰を捨てるという最後のところは譲らなかったのでほとほと手を焼き、改心させるということをあきらめて、最初の方針を途中で変更をして、拷問を加えて、信仰を捨てさせるという方法をとったのでした。具体的にどのようなことがなされたのでしょうか。

③　寒さと飢餓の苦しみ

温暖な土地である浦上でとらわれた日に着ていた着物でしたから、雪が積もる山陰は寒かったと思われます。一日にたった一枚あてがわれるちり紙を、ご飯粒をこねて張り合わせて、背中に当てるそでなしを作って着て、たたみもない板の間で、抱き合って寝ていたということです。寒くて寝られませんでした。寒さと空腹で心のくじけるものがではじめると、他のものは自分の食べ物を分け与えたと言います。

負けて転宗を申し出たものは、法真庵という尼寺にうつされ、食も多くなりますし、出歩くことも許されました。転宗しない者は絶食同様にしておき、転宗した者の様子を見せて、お上の言いつけに従って、ただ西洋の宗教を捨てますと言いさえすればいいのだと迫りました。一日に米が一合三勺　味噌が親指大、塩一掴み、水一杯、ちり紙一枚ずつで、子持ちの母親などは、自分の食べるものも子供に与えるのでますますやせて、弱っていきます。そこへ来てキリシタンをやめさえすればいいのだと

迫ったのです。大きな誘惑であったと想像できます。肥くみに来た農夫が子供たちを喜ばせようとして、鳴く蝉を囲われている中に放り込んでやりますと大喜びして捕まえて、遊ぶどころかすぐにバリバリと食べたと言う話も残っています。

もりちゃんという六歳の子供の話が伝わっております。役人が美味しそうなお菓子を見せて、キリシタンを止めたらこのお菓子全部やるよ、と誘いましたがその子供はそれを拒んで、「おかか（母）がね、キリシタンば捨てないとハライソへいける、というたもん。ハライソへ行けばね、そげんお菓子より、もっともっと甘かもんあると・・・」。ハライソへ行ける、ということがただ一つの信仰であり、望であり、簡単なだけにいよいよ硬いものであったといえます。殉教者名簿に、カタリナ　もり明治四年七月二〇日と刻まれています。飢餓による衰弱死ではないでしょうか。

後にこれらの体験をした人々が語ったところでは、打たれたり算木責めを受けてもその時は痛いけれども、痛くても息が切れればハライソにあるんだ、殉教者の栄光が与えられるんだという望があったからただ耐え忍べばよい。けれども腹を減らされて二ケ月も三ケ月も、やがて半年、一年、二年になってゆき、長い間同じ説教を聞かされて、転宗を勧められると体も弱り頭も変になってゆき、テング（悪魔）の勧めに乗ってしまって、キリシタンを捨てる気になってしまう・・・何が恐ろしいと言って飢餓の状態にして、何も仕事をさせず、大勢を狭い部屋に閉じ込めているというほどつらいものはない、つまり一番効き目のある責め方だということでした。そのようにひどい責め苦が続く中、弱り果てて、転宗するものあり、ひとりまたひとりと死んでいったということです。

荒野の誘惑を受けられたイエス様の出来事を思いおこしました。神の子として、神の心に適う者として、伝道のわざに踏み出さんとされた時に、悪魔がイエスを誘惑して荒野へ連れて行きます。そして四十日四十夜の断食をされます。すると誘惑するものが出て来て、もし神の子だったら、これらの石をパンにして空腹を満たしたらどうだ、といいました。私はその時の誘惑の深さを思ったことでした。イエス様は、誘惑に陥られたでしょうか。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と書いてあると言われたことです（マタイ四の一　ルカ四の一）。飢餓がこんなにも人を苦しめるものであるということから、人には食べることが大切である。けれども、それだけではない。人は神の口から出る言葉、つまり信仰が欠くべからざるものであり、それによって生きるのであると言われたことに、読み飛ばせないものを感じさせられております。

④　三尺牢（和三郎の死　安太郎の死）

見せしめのために、三尺牢というまさに三尺、つまり一メートル足らずの立方体の箱に裸のまま押し込めて雪の中にさらすという人間の弱さを最大限に利用する肉体的・心理的な拷問を行いました。この三尺牢の実物大の模型が津和野の民族資料館に置かれているのを見てまいりましたし、幽閉されていた光淋寺跡（乙女峠）に、同じものが作られ、あぐらをかいた形で頭を下げて閉じ込められている若者の像が置かれていました。上に小さな穴があけてあり、わずかな食べ物が落とせるように

なっていました。それは寒さと飢えの身にとってどんなに苦しい姿勢であったことでしょう。

最初に三尺牢へ入れられたのは、二七歳の和三郎という青年でした。二〇日ほどで弱り果てて臨終近くなった時に、甚三郎は貨幣をナイフの代わりに用いて床に穴を開けて脱出して、彼を慰めに行ったそうです。その時和三郎は、やがてみんなも殺されるのだから一緒に埋めてもらいたいと言い残して亡くなりました。アントニオ・マリア　和三郎　明治元年一〇月九日と殉教者名簿の最初に載っています。

次に、三尺牢へ入れられたのは、安太郎というおとなしくて明るくて立派な若者でした。彼が信仰を捨てれば他の者たちも捨てるであろうとの役人の思惑だったようです。役人たちがかわるがわる出てきて、信仰を捨てるように説得しましたが、応じることはありませんでした。三尺牢は雪の中に置かれていました。これを見て他の者たちは一層結束をしたようです。甚三郎は夜の闇の中、床下から抜け出て、「安太郎さん」と二度声をかけたらようやく返事があって、そこで安太郎の驚くべき言葉を聞きました。甚三郎の今に残る手記によりますと次のようなことだそうです。「わたくし申するには、あなたはこの三尺牢の内にてさぞやさみしゅうございましょうと申したれば、答えて申しなさるには、わたくしはさみしゅうはござりません。九つ（十二時）より先になりますれば、青い着物に青い布をかぶり、サンタ・マリア様の御影の顔立ちに似ておりますその人が、物語いたし下さるゆえ、すこしもさみしゅうはござりませぬ。けれども、この事はわたくしの生きておるまでは、人に話してくださるなと言うて、それより三日目に、真によろしき死去でござりました。この人はまことに聖人と思いました。」これは三尺牢へ入れられて一〇日目の明治二年一月二〇日のことで、ジョアン・バプチスタ　安太郎（三〇歳）の殉教記念日と記されています。

私はこの安太郎青年の話しを知ったときに、新約聖書にあります　石打の刑にあって死んでいったステファノの最後を思い出しました。ステファノの殉教　というところです。

「人々はこれを聞いて激しく怒りステファノに向かって歯ぎしりした。ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」と言った。人々は大声で叫びながら耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、都の外に引きずり出して石を投げ始めた。証人たちは、自分の着ているものをサウロという若者の足もとに置いた。人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい」と言った。それからひざまづいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないで下さい」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って眠りについた。サウロはステファノの殺害に賛成していた。（使徒言行録七章）

感動的なステファノの殉教の様子です。あわせて最後のところに名が出てまいりますサウロですが、のちのパウロです。彼はこのステファノの殺害に賛成し、石を投げる人たちの着物の番をしていた、とあります。キリスト教徒を追いかけてつかまえることにおそらく先頭に立って走り回っていたのでしょう。ダマスコへの道の途中で、「サウロよ」という呼びかけを聴いて、一八〇度の転換をして、改心をし、今度は命がけでキリスト教

を伝えるパウロとなりますが、ステファノのこの有様に遭遇したことも、このパウロの改心に深い関わりがあると思います。三尺牢で死んでいった安太郎が、ステパノを思い起こさせたことでした。

⑤　殿様御殿での問答

ある日、信仰を捨てずにいる者たちが、殿様御殿に引き行かれました。それは、東京の政府からから、福羽美静が下ってきて、キリシタンの様子を探るためでした。福羽美静は津和野第一の国学者で、政府の神祇判官の位にありました。キリシタン処分について，福羽は、「百姓は子供みたいなもので、道理をわきまえず邪教を信じているのだから、諸国へ分散して預けて、僧侶や神官からよくよく教え諭したら、きっと日本の昔からの信仰に転ぶだろう」と主張し、結局この言葉が取り入れられて、浦上からあちこちへと分散して預けられた次第だったのですが、この案に相違して、いくら僧侶や神官が説教をしても教えを捨てなかったので、キリシタンの信仰というものを探りに来たのでした。

御殿の贅を凝らした美しさと対象に、連れて行かれたものたちは、国もとを出る時の単衣の着物に暖を取るためにちり紙をご飯粒で張り合わせたものを重ねて、頭は棕櫚の皮のごとくで、乞食の衰え果てた有様で座敷に通されたそうです。その席で、キリスト教以外の宗教では果たして救われないのかと言う問題が、福羽美静と高木仙右衛門の間で問題になりかけたのですが福羽が、「まあまあ今夜は議論なんか止めて、多いに飲んで食べて世間話でもしよう」というふうに話題を変えてしまって、これ以上無学な百姓と対等で議論することは自分の貫禄に関わるので、話は続かなかったということです。

この身分制度の厳しい時代に、代官や政府の要人の前に出ても臆することなく、こびることなく、妥協することなく、信仰を曲げることをしなかったキリシタンたちに、かれらの信仰によると人間はすべて神の前に平等であるという事実を見出し、全く驚いたということですし、彼らの命も惜しまぬ信仰に居合わせた高官たちはどう思ったことでしょう。しかし、説得しても駄目だと言うことになると一層信仰を捨てないものへの弾圧は、厳しさを増してゆくことになりました。

⑥　水責め・火責め

十二月三十日、厳寒の津和野で雪が三尺くらい積もっていたといいます。、甚三郎と仙右衛門に、役人たちはお決まりの説教をいたしますが、どうしても言いつけに従わないので、厚い氷が張った二十坪ばかりの池に、外国の宗教を信ずる者には日本で出来たものを身につけることならんといって、まっ裸にし、ちょんまげを結んでいた紙紐もとって、突き落としました。その水責めのときの消息を甚三郎が後に次のように書き記しています。

「その時天をながめ、手をあわせ、サンタ・マリアに御取次ぎを頼み、ゼイズスも御供を願い、仙右衛門さんは、天にましますの祈りを申し上げなさる。私は身を捧げる祈りを申しあげまする。そのとき人が申すには、「仙右衛門、甚三郎、天主が目にかかるか、さ、どうか」とあざけりました。その時面に水を汲み投げつけ、息のとれぬようにいたしました。それより段々と身

体は冷え凍り、だんだんふるいが来まして、歯ががちがちになり、そこに仙右衛門殿申さるるには、「甚三郎、覚悟はいかが、私は目が見えぬ。世界がくるくる回る。」もはや息がきれんとする時にあたりて、役人が申すところに、早く上げろ、と言いつけたり。その時警護の役人、早く上がれ、と申したれど、いま宝の山に上がりおるからは、この池の中よりあがられん、と言いておるうちに、三間ばかり竹の先にかぎを付け、かぎの先に毛髪を巻きつけ、力にまかせて、ひきよせたり。それを水の中より引き上げ、雪を掃き、しば束を二つたきつけとして、割り木を立てて燃やし、二人のからだを六人をもって囲い、その火によりてあぶり、ぬくめ入れ、気づけを飲ませ、正気づかせたり。その時の苦しさはなんとも申されませぬ。（中略）それより四，五日暮らしたところで、また牢屋の前に二尺五寸の土牢を四つ掘りました。その土牢に入れて屋根をして、食物が入るほどの穴を開け、便所も小用もそこにしておき、寝も立ちもされぬようにいたし、この責めにて改心をさせるつもりでありました。そこでなお驚き、人間の力にては必ずテング（悪魔）の勧めにあい、迷いの心が出ぬとは言われませぬ。それによって天主、聖マリア様に一心を持って願いました。」

この手記の中に、氷の水の中に放り込まれて祈る二人に、「天主が助けに来るか見ていよう、さ、どうだ・・・」と役人が言ったとあります。私は、十字架にイエス様がはりつけにされたときの聖書の記事を思いおこしました。人間は何とひどいことを口にするのでしょう。「祭司長たちも律法学者たちと一緒になって、かわるがわるイエスを侮辱しながら言った。『他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架かから降りるがいい。それを見たら信じてやろう』。」それからいよいよイエスが「エロイエロイ、レマ、サバクタニ。」（わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか）と大声で叫んで息を引き取られんとするお苦しみの時に、ある者が走りよって酸いぶどう酒を含ませた葦の棒を持っていこうとしますが、「待て、エリアが彼をおろしに来るかどうか見ていようといいながらイエスに飲ませようとした。しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた」（マルコ　一五章）と聖書に記されていますところです。

役人たちが、池の中の二人に「早く上がれ」といったときに、「今宝の山に上がりおるからは、この池より上がられん」とありますが、このとき見ていた宝の山とは何だったのであろうか・・・と思いました。究極の時に、天にある安らぎを垣間見、感じたのではなかったのではないかと思いました。

⑦　丸太の十字架に縛る（少年裕次郎の死）

役人は、勇敢で指導的な存在で、氷の池に落とし、そのあとで火にあぶる拷問にもキリシタンであることを止めない守山甚三郎を憎み、彼の弟の一四歳（今でいえば中学の二年生くらいか）の裕次郎を杉丸太に縛り付け、その後素裸にして縁側に座らせて、鞭で責めました。一四歳の男に子にとってそれがどれほど恥ずかしいことであったか、そして鞭打たれるたびに、キイキイと叫び声を上げました。その叫びは牢まで聞こえて、みんなは吾身を削られる思いであったと言います。二週間後に裕次郎は危篤の状態になりました。さすがにその担当であった役人は哀れに思って、裕次郎を姉のマツに渡しました。マツに暖

められて、といっても炬燵や厚い布団があるわけでもなかった中で、意識を取り戻した裕次郎は、悲鳴を上げてしまったことを詫びて、そのあとで次のように語ったことが記録されています。

「もう耐え切れないと思った時に、向こうの屋根の上に一羽の雀がしきりに鳴いている。そこへ、米粒を運んできた親雀が小雀の口へ入れてやっているのが見えたというのです。イエス様を思い、小雀でも神様から護られていると思うと、まして私がここで苦しめられているのをご覧になって、より以上にかわいいと思ってくださらないはずはない。こう思うと勇気が百倍して、耐えることが出来ました」と姉に話して、明治四年一一月二六日に殉教しました。裕次郎はかつて聞いていた聖書の記事を思い出していたのではないかと思いました。「二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」（マタイ一〇の二九）

「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に収めることもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは鳥より価値のあるものではないか。」（マタイ六の二六・ルカ一二の六）

この時、少年裕次郎の、死に際の言葉が、「子供泣かすな」と言うことと、「兄ジャ（甚三郎のこと）は結婚をしてその子を、伝道者にしてほしい、信仰のことをよう知らんと人は弱かけん・・・」ということだったそうです。やがてその遺言は、姉のマツと、兄の甚三郎によって実現されます。この「信仰のことをよう知らんと人は弱かけん・・・」という、少年裕次郎の言葉は、腑に落ちる言葉です。

五　浦上四番崩れのキリシタン釈放（外国からの忠告・帰還後の暮らし）

このように浦上キリシタンたちは、流された先々で、信仰を全うするゆえに、厳しい弾圧にさらされて一日一日を送っていましたが、彼らの全く知らないところで、これらのことは外国に知られるところとなります。外国から、非人道的な宗教弾圧は止めるべきだと言う声は高まり、イギリスの英字新聞で大きく取り上げられたりして外国から日本政府へ待遇改善勧告が出されましたし、一八七一年（明治四年）明治政府を代表して岩倉具視使節団が欧米諸国へ出発しましたが、訪問の先々で、浦上の事件などが非難され、強い抗議にさらされました。米国大統領が、岩倉使節に、禁教令解除の勧告をいたしました。

結局このように外国からの避難非難忠告によって、やっと明治政府はキリシタン禁制の高札を撤去しました。これは全国に禁教令の高札が立てられてから　二五九年ぶり、長崎の西坂で京都から曳き行かれた二六人が殉教してから二七四年経てのことでした。信仰の自由が表向きには一応認められて、浦上四番崩れで流刑されていた人たちの釈放、帰還となりました。

無学で文字も知らない百姓たちが、大切に、隠れて伝えられた信仰を堅く保ちつつ、柔和にへりくだって数々の犠牲を捧げ主イエスへのまことを貫いたことが、世の賢い人たちをことごとく打ちのめして、本人たちの知らぬ間に大きな国際問題とな

り、日本をも変えたことになりました。この「浦上四番崩れ」といわれるキリシタン迫害に流された人数は、三四一四人、苦しさに負けて改宗したものは一〇二二人、流された先で死んだ人の数は六六四人でした。

浦上へ帰った次の年の夏に、赤痢が大流行しました。大浦天主堂からかけつけた医者の心得があるドロ神父の手がまわらないところを、裕次郎の姉のマツは、他に三人の帰還した娘たちと一緒になってその手伝いをしました。彼女たちは、小さな部屋を借りて住み、共同生活をして、ドロ神父から医学や、祈り，教理を教わり、修道会の生活となっていきました。また、大暴風雨が襲いバラックの家々が吹き飛びました。天然痘の流行もありました。孤児もではじめました。孤児を引き取ってあずかり、また病気の人たちを世話する人となりそれが，ドロ神父たちの協力を受け、今に残る施設となっています。まさに、裕次郎の「子供を泣かさないで・・・」という遺言をまもったことになりました。甚三郎の子供たち子孫たちから多く伝道者が出ているということです。長崎で被爆されてその後多くの著書を残され「長崎の鐘」の歌でも私たちなじみの深い医師の永井隆さんは、甚三郎の長男の守山松三郎神父から洗礼を受けられています。

六　浦上四番崩れのキリシタンたちを支えたもの

①　神の業

キリシタンが弾圧を受けた歴史は、二五〇年にのぼります。最後の章と言うべきものが、述べてまいりました浦上四番崩れでありました。この長い期間、まさに命がけでひたすら教えを信じ、あるものは隠すことなく信仰を言い表し、また多くはかくれキリシタンとしてその信仰を家族に伝え、子孫に伝えてまいりました。普通なら消滅しても何の不思議もないことであったと思いますが、残虐極まる死を覚悟しつつ、じっと潜んで、耐えて信仰を捨てることなく持ち続け、子に孫にかけがえのないこととして伝えて何世代にも及んだということ、そして二五〇年の間、消えることなく存続してきたということは、奇跡に近いことだと思われます。人間業を超えたことと言えるのではないでしょうか。私はここに、神の業の本当性とでも言うべきものを感じました。証ではないでしょうか。

②　聖霊様の助けによって

このような弾圧にあっても、キリシタンを捨てると言わないで、殉教していった人たちを支えたものは何だったのか、わたしには到底出来ないであろう・・・そう思い続けていました。けれども、流配先の一つである津和野へ行き、殉難の跡地に立ち、あるいは残された資料たとえば、幽閉中にあてがわれたちり紙に竹を削って書いたものや、帰還後の「覚書」としてのこされているものなどを通して学んでいくうちに、いろいろ教えられるもの、感じさせられることがありました。

高木仙右門衛門の言葉

「どんなに強い人間でも、あんな目に合わされたら、人間の力だけではとてもしのぐことは出来ません。私が転べば、御主、日本の沢山の殉教者様がたに対して申し訳がございません。そう思って断食の犠牲を捧げ、聖霊様のお助けを祈っておりました。聖霊様のお力でしのげたのでございましょう」

守山甚三郎の言葉

「人間一人の意志の強さだけではとうてい耐えられるものではない。天からの聖霊すなわち神の御力に恵まれてはじめてできるとおもう」。水責めをされて、息絶えそうになって、警護の役人から、上がってこいといわれた時に、「今、宝の山に上がりおるからは、この池より上がられん、といいおるうちに・・・」髪の毛を巻き取られて引っ張りあげられたとありますが、宝の山とは何だったのでしょうか。

三尺牢に入れられて、雪の中に捨て置かれた和三郎にあらわれ、物語して慰め、「ちっとも淋しゅうはござりません」と言わしめ、安らかに死に至らしめた存在、あるいは丸太に縛り付けられて、鞭打たれて、殺されていった一四歳の裕次郎が見て、それによって神様の愛をこのような中で知らしめた雀の親子など、まさに信仰の支えというものが与えられてあるのだと思いました。

京都で捉えられて、見せしめのために耳そがれて長崎の西坂まで八〇〇キロを曳き行かれた二六人が、讃美をしながら、顔輝かせて死んでいったということを聞いたときにも思ったのですが、そうさせた幻があったのだと思ったことでした。それなしにはなし得ぬことであると思っています。

③　インマヌエル

「死の陰の谷を行く時もわたしは災いを恐れない。あなたがわたしとともにいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力付ける。わたしを苦しめるものを前にしてもあなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎわたしの杯を溢れさせてくださる。」（詩編二三編の四、五）

聖書の中でイエス・キリストは「インマヌエル」といわれています。これは、「神われらとともにいます」という意味だそうです。万事お手上げで、死の影の谷を行く時も、主がともにいてくださる、目には見えないけれども、確かにいます方、「主よ」と呼びかけたらそこに共にいてくださる方、わたしたちはその御手の中にあることをおぼえていたいと思います。

④　恥の極みをもって

この度の学びの中で、丸太の十字架にくくりつけられて、鞭でたたかれ、青く腫れ上がって死んでいった一四歳の裕次郎が、素裸であったということが紹介されていますが、そのことに関して、永井　隆著に「・・・イエスもこのように布きれ一寸も残さず取られて、素裸でした。あとでご絵やご像をつくった芸術家たちが、それはあまりにひどいので腰に布を付け加えました。きのうまで、師よ師よと従っていた幾百か幾千かの市民の前に、素裸でさらされたイエスを思い祈っていた」と記されてあるのを見ました。キリストの十字架がそのようであったのかと深く心にしみたことでありました。

そのようにして、十字架にかかって死んでくださったことを、そしてわたしたちをそれしかない方法で救ってくださったことを、肝に銘じて生きていきたいと願いますし，そのお方が、「インマヌエル」すなわち「神、われらと共にいます」ことは何とありがたいことかと思わされました。

終

絶えず喜びなさい

井川　満

一　入院するまで

佐伯先生がお祈りの中に覚えてくださいましたように、私はC型肝炎に罹りまして治療を受けております。ほぼ一年間に亘るインターフェロンの投与が終わって二ヶ月ばかりたったところです。肝炎のウィルスがいなくなったかどうかは、これから更に数ヶ月間、血液検査を繰り返して、様子を見なければならないそうです。とにかく、インターフェロンの投与が終わりやや体力が回復してまいりました。肝炎が見つかって、まず二ヶ月の入院がありました。その間、佐伯先生を始め多くの方々に見舞っていただき、またお祈りに覚えていただきましたこと、こころから感謝いたしております。この教会には、私よりも遥かに重い病気を経験された方、あるいは長期に亘る難しい病を荷っておられる方がいらっしゃいます。私の病気はややこしいものとは言え、この程度の病について、私が入院報告をいたすというのは如何なものかと思います。しかし、病気を通して知らされたこと、感じたこと、それを切っ掛けに自ら省みたことなどを一度纏めかつ整理することは大切なことであり、私自身にとって必要であるとおもわれました。佐伯先生が、八月に説教する人を募っておりました折、引き受けさせて頂くべきだと感じまして、申し出た次第です。

昨年（二〇〇八年）四月中旬でしたが、私が仕事をしている場所に家内から電話がありまして、クリニックから血液検査の結果が送られてきて肝機能の数値が悪いので、とにかく家に帰ってこい、というのです。私は、もう二五年位前から高血圧で薬を服用してまいりました。薬の服用を続けるためには、六ヶ月に一度位は血液検査を受けることが必要です。前日にそのための採血がありました。これまで約二五年間、検査結果が特に問題となったことはありませんでしたから、今回の検査も全く気に留めてはおりませんでした。自覚症状はありませんので、家内の電話をいぶかしく思いながらとにかく家に帰りました。帰り着いて、クリニックから送られてきていた検査結果を見ると、信じがたい数値が並んでおります。しばらくして、家内が言うには、この数値は即入院というものである、とにかく、明日の朝バプテスト病院で診察を受けてくれ、入院させてもらえるかどうかわからないが、洗面道具とパジャマは持って行くように、とのことです。しかし、私にはこれらの数値はとても自分のものとは思えませんでした。自覚症状は全く無いし、自分がこんな病気になるような心当たりもありませんので、明日バプテスト病院へ行って検査を改めてしてみれば、目の前にある数値が何かの間違いであることが分かり、即座に返されるであろうと思っておりました。

翌朝、バプテスト病院へ行きました。再検査の結果は肝機能の数値はさらに悪くなっておりました。診てくれた先生は、「まだ簡易検査によってではあるが、C型ウィルスが検出されている」と言われるのです。病室に連れて行かれ、持ってきたパジャマに着替え、入院となりました。何がなんだか分からないうちに、入院患者としてベッドのうえに横たわっておりました。それから約二ヶ月の入院生活をおくることになりました。入院中も軽い黄疸症状が現れただけで特に体調不良を感じることな

く、退院間際まで過ごすことができました。二ヶ月近くの治療の経過より、結局インターフェロンによる治療をせざるを得ないとの主治医の判断で、インターフェロンの投与が始まりました。これから体調が段々と悪くなっていきました。

入院の間、佐伯先生を始めとして多くの方が見舞ってくださいました。病院での最初の日曜日の午後、先生は大勢の方々と共に来てくださいまして、詩編一一八編の一七、一八節

「死ぬことなく、生き長らえて
主のみ業を語り伝えよう。
主はわたしを厳しく懲らしめられたが
死に渡すことはなさらなかった」

を読んで、祈ってくださいました。この詩編は、永口裕子さんが脊椎への癌の移転が疑われて検査を受ける折りに、小笠原先生が永口さんに贈った聖句です。永口さんの場合は、もし本当に癌の転移であれば命に関わることであり、大変心配された検査でした。私の病気は、ややこしくはあっても直ちに命に関わるというものではありません。佐伯先生は、「これは退院したら、一度は説教せよということです」と笑いながらおっしゃられました。

二　入院での実感

自分が入院してみて実感したことは、「人間は死ぬ」ということです。そんなことを知らなかったのかといわれれば、もちろん知っておりました。しかし、入院してみてそのことを肌で感じるというか、心の奥底に切実に刻み込まれたという思いがいたしました。それは、死を抱えて生きている人を何人も目前にし、交わりをもったことによります。交わりを持った方々のうち、特に印象深かった方について述べます。

Tさんは患者達と明るい調子で会話している人でした。当初は、彼はもうすぐ退院するのだろうと思っておりました。彼と話して分かったのですが、彼は進行してしまった大腸癌を患っておりました。始めの京大病院での診断は、もう治療の仕様が無い段階まで進んでしまっている、というものであったそうです。そこで彼は「余命は何ヶ月くらいでしょうか」ときくと、医師は「月単位で数えられない、日めくり状態だ」と言ったそうです。そして、治療はせずに体に動く間好きなことをやるか、あるいは駄目でもともとで抗癌剤治療をやってみるかの決断を求められたそうです。彼は抗癌剤治療を選び、バプテスト病院に入院となったわけです。ここでの診断も同様でしたが、不思議なほどに治療が効果を現し、退院後一年半余になりますが、治療を受けながら現在も仏像彫刻に励んでおります。彼が余命は日めくり状態といわれたなかで、一日一日を大切に生きている姿は印象的でした。

Mさんは、とても愉快な人でした。やはり大腸癌が分かったときには進みすぎていて、手術は不可能であったようです。それなのに好物の豆を結構な量食べて、腸閉塞を起こして夜中に担ぎ込まれてきました。小康を得てから私と同室になりました。彼は俳句を好み、かつ大変上手で、NHKテレビの「テレビ俳壇」で特選になり、年初の番組で、その第一番の句に彼のものが披露されたこともある程です。やや脇道にそれますが、彼が私に教えてくれた句に「兵卒の位牌に母の団扇風」というのがあります。彼の奥さんのお兄さんかおじさんが特攻で死んだのだそうです。この句を私に教えたとき、彼の目から大粒の涙が

ボロボロこぼれたのを忘れることが出来ません。彼が生きてきた時代を切実に感じさせる句です。彼は、患者達との会話ではいつも皆を笑わせ、俳句に興味を示すものには手ほどきをして、大変好かれておりました。退院のとき、「次に戻ってくるときは、この階ではなく、一階上（ホスピスのこと）かな」などと言って笑わせていました。その後、何度か入退院をくりかえし、ついに亡くなってしまいました。

私がいたのは四人部屋でした。Mさんと同室のとき、彼とほぼ同じ年格好の方がおられました。この方とはあまり親しく話すことはなかったのですが、わずかに交わした会話からもかれが生きてきたこれまでの歩みが分かりました。彼は退院して仕事をするのを首を長くして待っている風でしたが、私が退院してしばらく後に亡くなったそうです。

私がいた病室の扉は、昼間は原則として開いたままでした。その扉をスタッフが閉めに来て、しばらく部屋から出ない様にとの指示が出されることがありました。後で分かったことですが、これは亡くなった患者を運び出す場合でありました。外に出ていて、丁度この場面に出くわした方の話によると、スタッフが廊下に並び遺体を送っていたそうです。このようなことは、かなり頻繁にあったとの印象を私は持っています。

病院の中では、直接に口に出すことはなくても、多くの方が残された日数は多くはない、との切実な緊迫感を持って生きておられました。「人は必ず死ぬ」というのは、具体的な顔をもって語りかけてくることでした。

三　死刑囚を思う

地上での命の日数を僅かに限られたり、急激に体力が落ちていったり、痛みに絶えず襲われたり、あるいは活動が極めて不自由であったりするような制限の許に日を過ごす場合、どのような気持ちになるのか、またどのような姿勢で日々を過ごすべきなのか、という問いは入院してしばらくすると絶えず心に浮かんでくることでした。そのとき、真っ先に思い起こされたのは、『五十年史』の福田幸子さんのことでした。このことを見舞ってくださった佐伯先生に申しますと、「小笠原先生も同じ事をおっしゃっていましたよ」と言われました。北白川教会の人は地上の生を終えようとするとき、等しく福田幸子さんのことを想うのだろうと考えられます。本来ならば、今日は福田幸子さんの死に様を中心に語るべきと思いますが、私にはその消息をしっかりと受け止めることは出来そうにもありません。

家内が病院に来てくれるとき、新聞を持ってきてくれましたが、ある日の（朝日新聞の）天声人語は、島秋人の短歌の引用から始まっていました。それは、そのころかなり活発に議論されていた死刑制度について論じたものでした。一通りは読みましたが、特別の印象は持たなかったので、その新聞は次の日に持ち帰ってもらいました。しかしその後、島秋人の短歌が気になり、家内にその新聞を見つけてくれるように頼みましたが、駄目でした。その歌は、退院後に手に入れた彼の歌集『遺愛集』を繰ってみると、

「ひと日着て残る体温いとしみつ青さ薄れし囚衣たたみぬ」

であったようです。この歌には、死がいつくるか分からない毎日において、この日一日命を長らえたとの切実な思いが窺えま

す。また、そのような思いを重ねてきた日数が囚衣の色も薄れているところから分ります。入院中、正確ではないにしても、この短歌を想い返し、かつてラジオで聞いたことのある島秋人の生涯を考えていると、死刑囚はある面が強調されているにしても、本質的に入院しているものと変わらないように思われてきました。そして、キリスト教的観点から見るならば病院患者に限らず、すべての人の存在とも本質的には違わないと感じてくるようになりました。すなわち、死刑囚の死は特別の形でやってきますが、死のやって来かたが違うだけで、自然死と呼ばれるものと本質は同じではと感じてきたわけです。

『遺愛集』によれば、彼は処刑をその前日には告げられたようです。後で触れます新保満『永遠と愛』の補遺に述べられているSさんは、当日の朝、処刑の直前に告げられたようです。先の短歌に触れて、島秋人が、刑務所の中に制限され、そして遠からず死がやってくるのが定まっている生において、その日一日は生きることを許されたのをどんなにか感謝し、命をどれ程いとおしんでいるかを述べました。同じ思いを歌った彼の短歌をもう一つ紹介します。

「温もりの残れるセーターたたむ夜ひと日のいのち双掌（もろて）に愛（いと）しむ」

これは一九六三年の作で、毎日歌壇賞が与えられたものです。この歌から、限られた命を一日一日生きる厳しさと同時に一日の生の尊さが切実に伝わってきます。

島秋人とSさんは死をどのように迎えたかを述べることにします。島秋人は、処刑の前夜次の歌を詠んでいます。

「この澄めるこころ在るとは識らず来て刑死の明日に迫る夜温し」

極く限られた人達ではありますが、この夜彼に面会できました。この最後の面会での別れに、彼の一番好きな讃美歌「いつくしみ深き」をみんなで歌ったそうです。また、遺愛集の「あとがきに添えて」、という彼の文は刑死前夜に書かれたものであります。その一部を引用します。「夜の更けるまで教育課長さんと語り合っても話がつきない思いです。僕は生かされて得た心でしみじみと思うことは、人の温かさに素直になって知ったいのちの尊さです。厚意の多くに甘え切って裸になって得たよろこびの愛おしい日日のあったことがとてもうれしいと思います」

先に名前を出しました新保満『永遠と愛』の補遺に記されているSさんの処刑について触れてみたいと思います。新保さんはＩＣＵの第一期生で、川田殖さんと同期です。『永遠と愛』の題がつけられたブルンナー教授説教集は、新保さんの筆録によるものです。この説教の筆録集がどのような事情より生まれたのかが、補遺に記されております。満州奉天の小学校で新保さんと同じ組だったSさんが、終戦後の大混乱の中に両親を失った末に日本に引き上げてきました。そして厳しい時代の流れの中で殺人を犯して、死刑囚となりました。新保さんが、その殺人事件を知ったのは、電車の中で他の人が読んでいた新聞記事の写真がたまたま目に留まったことによります。新保さんはSさんに面会するため刑務所を訪ねます。Sさんがキリスト者となるまでの経緯は感銘深いのですが、省略いたします。ただ、新保さんがブルンナーの説教を筆録したのは、Sさんを含む死刑囚たちのためであったことを注意しておきます。Sさんが処

刑された当日の様子は、補遺に引用されている二通の手紙、それらはUさんからのものと、大野牧師からのものから比較的詳しく知ることが出来ます。これらは福音の力を示すもので、全文をここに再引用したく思いますが、分量の関係もあり抜粋に止めます。

まずUさんの手紙について述べることにします。Uさんというのは、刑務所で極めて反抗的だったSさんを、心をくだいて導いたキリスト者死刑囚です。彼らが収監されていた刑務所では、死刑の執行通知は処刑日の午前九時から一〇時にかけての一、二時間の間であったようです。この刑務所では、運動、入浴などは時間や人員は一度やるとそれを変えないことになっていたようです。ある入浴日、二番目に決まっていたSさんとUさんは一番目の入浴となりました。二人は、Sさんが今日処刑されると悟ったようです。二人は、ゆっくりと風呂に浸かりながら、もうすぐにやってくる死、そして十字架と復活について話したようです。手紙に記されている二人の風呂での会話の一部を引用します。

「・・・・『この一、二時間というものは、廊下に役人の靴音がすると、自分に執行通知が来たのではないかとビクビクで、一日として安らかな日はなかったが、主が復活したまいしごとく私たちクリスチャンにも復活があることを信ずるようになって、いつの間にか役人の靴音に何も感じないようになってきました。お蔭で今では、今日は確かに、自分が後一、二時間後には執行されることは間違いないと思うけれど、こうしていられるのが不思議ですね。今日は天国で待っていてくれている父や母に逢える』といって、『親はその子に、友は友に・・・・』と讃美歌を彼は口ずさんでいました」

彼は房に帰ると片づけをして通知を待っていたようです。浴場から帰って一時間位した頃、彼の監房の鍵があけられる音がUさんに届きました。祈っているUさんの房の前にSさんが立っていました。再び手紙を引用します。「『お世話になりました。お先に行って待っています。お体を大切にしてください・・・・』彼は一寸の乱れも見せずにすらすら挨拶をしますが、私はただ涙がこみ上げてきて、胸一杯となって言葉が出てきません。やっとのことで、『直ぐ私もあとからゆく。天父の許に帰るのだよ。風呂で話したように、お父さん達にすぐ逢えるぞ。復活を忘れず、十字架にすがれ』と追いすがるようにいった言葉が分かったのでしょう、彼は大きくうなずいて笑って去り、次々とカルバリ会（Uさんが作ったクリスチャン囚人の会）の人々の房の前に行って挨拶をして、力強い足どりで階下に降りて刑場に向かいました」

次に大野牧師の手紙の一部を引用します。

「十時半頃、S君、実に立派な態度で、主の御許に行きました。恐怖の色少しもなく、極めて平静に元気に讃美歌に和し、貴君にどうぞ宜敷く伝えてくれるようにと頼んで、勇ましいという程の態度で行きました。御栄えを現わして下さって感謝の至りでした。

（今朝）私と斎藤伝道師と（福岡拘置所に）行き、讃美歌五二九番を歌い、彼も大声で共に歌いました。そして、斎藤さんにロマ書五の一―一一、同八の一―一一、ヨハネ伝一四の一―七を読んで貰いました。私は、礼文によって聖餐の式を司り、祈りを以って終わりました。貴君も、此の時刻、祈っていて下

さる筈だと（Sに）告げました。
　それから、行く前、彼の好きな讃美歌はと聞いたら、五二五番（現讃美歌四八九番）との事であったので、それを信者である役人も加わり、四人で大声で歌い、そして彼が行ってからもう一度、その一節を歌いました」
　この二人は十字架のキリストに導かれて、復活を信じて堂々と死を越えていきました。キリストの十字架は、死の恐れに打ち勝つものであることがここに示されております。私たちは、遅かれ早かれ必ずやってくる死を、どのように超えるのか、それは病気を経験したことのない人であっても、あるいは病人であっても、さらには死刑囚であろうが、全く同じ重さで問われていることであります。人生の最後の仕上げとして誰にもこのことが課されていると思います。

四　どんなことにも感謝しなさい　バプテスト病院では、毎日礼拝があり、週日は午後一時から二〇分間の礼拝があります。私は、入院中は欠かさず出席いたしておりました。毎日出席することによって、外から御言を聞かされることの大切さを教えられました。入院して約三週間が経過したある日の礼拝で、テサロニケ人への手紙Ⅰ　五章一六、一七、一八節が読まれました。そこには

・いつも喜んでいなさい
・絶えず祈りなさい
・どんなことにも感謝しなさい

とあります。この言葉は私にカチンときました。思いもかけない病気に罹り、入院を余儀なくされ、病が完治するのかも分からないでいるのに、このことを感謝しなければならないのですか。入院して思うに任せない生活を強制されていることを、喜ばねばならないのでしょうか。このように悩んでいる者にこのような言葉は、カチンと当たってくるものでした。普通の状態の私ならば、キリスト者であればそうするのが当たり前だと思いつつこの御言を聞いただろうと思います。しかし、病気を抱えて入院を強いられている身には、とても「そうです」と素直に受け入れることは出来ませんでした。それ以来、私は絶えずこの言葉に問い掛けられることとなりました。
　退院後、カルヴァンの註解書を見てみました。カルヴァンは概ね次のように言っております。「この部分はキリスト・イエスの十字架に贖われた者が、再び肉の思いに囚われ、死の縄目に再び結びつけられないための、この世界での生き方を示している。肉の思いに囚われないためには、心の節度を保たなければならない。そして、パウロは以下の様に教える。喜びの根元は、平静な落ち着いた心にある。この平静な心は不意に襲ってくる不正や災難のために過度に乱されることはない。それから、苦しみや悲しみ、心配や恐れが我々を圧迫しないために、神の摂理に信頼するように。
　不正や災難が襲うと、神の摂理を疑う妄想が我々の心に生じる。しかし、神は我々のことを心にかけ、救済を与えるのであり、祈りによって我々は自分の心配事を、神の胸に委ねる様にと教える。神に対する感謝と、その恵みに関する認識と祈念が、我々の心の中にあるあらゆる悲しみを克服する」
　カルヴァンが述べているように、私たちは僅かの災難に襲われると、すぐさま神様は自分のことを忘れているのではないか

と思ってしまいます。一旦、このような疑念が生じると、自分が失ったと思うもの、たとえば健康、に心の思いが集中し、これに囚われてしまいます。そして自分の肉体のことで思いが一杯になり、神様に不満を抱いてしまいます。ここに悪魔が容易く付け込んで我々と神様の間に溝を掘り、やがて我々を掠め取っていきます。こうならないためには、どんな状況に至っても、我々は神様の摂理の中にあることを絶えず想わなければなりません。どんなことが起こっても神様の摂理の中に置かれていることを信じて、絶えず喜ばなければなりません。感謝しなければならなりません。どんなことが起こっても、喜び感謝するためには、絶えず祈らなければなりません。絶えず祈るためには何が起ころうとも、喜び、かつ感謝していなければならなりません。神様に不満を抱いている心は祈ることは出来ないでありましょう。すなわち、この三つの事柄は、全てが一緒になってなされなければならないのであって、三つの内の一つあるいは二つだけがなされる、ということは決して有り得ないことになります。繰り返しになりますが、我々が悪魔に掠め取られて再び死の縄目に繋ながれないためには、我々に理解できないどんなことが起こっても、それも神様の摂理の中にあること故に、いつも喜ばねばならなりません。いつも喜ぶためには、絶えず心を神様に向けて祈らねばならなりません。いつも祈るためには、全てのことを神様に感謝しなければならなりません。神様に感謝するには、いつも心が喜んでいなければならなりません。このように三つの事柄を一体として我々は行わなければなりません。そして、一七節後半には「これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」とあります。パウロは、このことは神様がキリスト・イエスを通して私たちに命じておられるというのです。

五　十字架を想う。　病院の礼拝で聞かされたとき、カチンときた言葉でしたが、カルヴァンの註解によって私の拒否反応は和らぎました。先に記したようにカルヴァンは、「この部分はキリスト・イエスの十字架に贖われた者が、再び肉の思いに囚われ、死の縄目に再び結びつけられないための、この世界での生き方を示している」と言っていますが、イエスの十字架について考えたく思います。

マルコ一四章三二、三三節に「イエスはひどく恐れてもだえ始め、『わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい』」とあります。ルカ二二章四四節には「イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた」ともあります。このように切に祈られたにも関わらず、イエスの祈りは聞かれなかったように見えます。その後においても、イエスは全てのものを剥ぎ取られました。

- 弟子達は眠ってしまいました。
- その後、弟子達は逃げ散ってイエスを見捨ててしまいました。
- ペテロはイエスを知らないと三度も言いました。
- 罪人として十字架の死を言い渡されました。
- 衣類を剥ぎ取られました。
- 見物人からも、処刑に携わった兵士からも嘲笑されました。
- 神様からも見捨てられ、呼びかけにもまったく応答のないうちに息絶えました。

これらは、人の罪を神様から負わされた故であるとすれば、人の罪は神様をかくまでも怒らせるまでに甚だしいものであることが分かります。既に罪の縄目にがんじがらめになっている人間をどのように扱っても、神の怒りを解くことはできない、人間を滅びから救い出すことはできない、ただ罪のないイエスの上に人の罪を置いてそれを滅ぼし尽くす以外に方法がないことが示されています。

この神の怒りが注がれ、イエスから全てが剥ぎ取られていく中にあっても、イエスは神への従順を失いませんでした。イエスには神のなさることが理解できませんでしたが、全てが神のご意志の許になされており、神の摂理の中にあることを信じて死に至るまで従順であられました。

地上の生を営んでいると、「どうして？」と思わざるを得ない事柄が満ちているように見えます。自分が平穏でいるとき、他の人にどんなことが起こっても、それは神の摂理のうちのことだと何か悟ったような、本質は無関心の態度をとれます。しかし、いざ事が自分の身に起こると、慌てふためいて「どうして、どうして？」と神様に不満を投げつけます。しかし、私たちが最も深く「どうして？」と問わねばならないのは、罪のないイエスの上に我々の罪が乗せられ、イエスがとことんまでの苦しみを味わったのか、ということではないでしょうか。私が肝炎に罹って入院したとき、「どうしてこの私に？」「それからどうなるのか？」と盛んに呟きました。イエス様の十字架を想うとき、自分には理解できなくても、全ては神様の摂理の中にある、ということを受け入れることが出来ます。そして、パウロが勧めるように、「いつも喜び」「絶えず祈り」「すべてのことに感謝」して、死の縄目に再びつながれることのないようにしなければならないこと分かります。

私たちは、イエス様の名によって祈りをいたします。何をお願いしても宜しいのでしょう。生活の安定や健康、または長寿を願って何の問題もないでしょう。しかし、このような類の願いをかなえるためだけにイエスの十字架があったとは思われません。イエス様の十字架での苦しみは、罪の結果としての死からの救いでした。私たちは必ず死にます。どんな死に方をするかは、人それぞれでしょうが必ず死にます。地上の生の終わりに必ずくる死を、十字架以外によっては、我々は望みと喜びを抱いて越えて行く術は無いと私には思えるのです。福田幸子さんの死に様、そして先に私が紹介した二人の死刑囚の処刑に際しての様子などは、十字架の恵みは確実に罪を滅ぼして、死の恐れを取り去っていることを示しています。刑場に向かうSさんに、「天父の許に帰るのだよ。復活を忘れず、十字架にすがれ」と呼びかけたUさんの言葉は、地上の生を終わって死の淵を、望みをもって渡っていける鍵であると思います。

編集後記

『北白川通信』第三四号をおとどけします。今回は、キリスト者の核問題への取り組みに長年関わって来られた山崎知行、喜美子ご夫妻お迎えして催された親睦修養会を中心にし、また礼拝での説教その他を掲載させていただきました。

文字に起こされたものを校正かたがた読み直して、ここに掲載されたものを語られた方々が、それぞれ直面する或る「ざらざらしたもの」を避けることなく、そこで神の語り掛けを聞こうとしている共通のひたむきな姿勢を、あらためて思わされました。そして北白川教会は、そのようなものを自分たちの信仰として、大切にしてきたことを思い、励まされました。

佐伯先生の開会礼拝で引用された高木仁三郎氏の言葉「放射能は地上の営みの原理を破壊する異物である」は、現在私たちが置かれている根本の危機と問いかけを言い表すものであることを思わされます。チェルノブイリを訪れた山崎夫妻が、放射能の価が高い四号炉の前に立っても、五感は何にも感じることができず、「これは人間の扱えるものではない」と呻かれている姿に問題の核心が示されているように思われます。川西史子さんのウガンダ訪問記は、その淡々とした語りのなかで、ウガンダ（そして日本）のざらざらしたものを浮きぼりにしており、それぞれの「自分でできる」をまさぐられます。工藤浩栄さんの「青森に住むインドネシアの兄弟姉妹へ」は、工藤さんが、つがる市の公民館でされたもので、インドネシア語の原文もあります。ここにも小笠原先生との出会いで新しくされた人の証言があります。武田尚子さんの「小さな人にはやさしくね」は十二月の教会学校のクリスマス会でのお話ですが、ここには大人の私たちの心の背中にも迫ってくる神様の問いかけがあります。金山弥平さんのものは、今回唯一『通信』のために書き起こされたもので、自らの事故の苦しみの経験より綴られたものですが、「われわれの顔の汗の中でパンを食べ」、その汗の苦味のうちで味わうパンが、キリストの受肉の恵みに通うことを明かしておられます。瀬口昌久さんの「堅く支える」は、杉原千畝のユダヤ人救済の背景に、キリシタン迫害の歴史を重ねて考察した興味深いもので、次の林貞子さんの「浦上四番崩れ」と共に、血にぬられた迫害の歴史を私たちがどう受けとめるのかを深く問いかけています。井川満さんの「絶えず喜びなさい」は、自らの病の「深い淵」より、真に見据えねばならないものが何であるかを、「必ず死なねばならない」私たちに示しておられます。

この度も編集の作業を終えて、誰構わず、この『通信』を是非、読んで下さいと触れ回りたい気がしています。

［E・K記］